

ました。この時門弟等は先生の危険を慮り何とか引止めようとしたに對し、先生は儼乎として「子等は余を愛するか、將た國家を愛するか、若し國家を愛するならば決してこの行を妨ぐるな。余久しく草野に臥して時機の到るを待つてゐた。今や天下紛々國是一定せず、この秋に當りて國家百年の長策を建つるもの余を措いて誰かある」と叱咤して之を斥け、敢然國家の爲に犠牲となるの覺悟を示したのであります。斯くて若干の門弟のみを連れて、西洋鞍に打跨り三月二十九日無事京都に着きました。餘談ですが、京都の人で今は故人となられた内貴甚三郎氏なども少年の頃の西洋鞍の先生を見て、随分外國カブレの人だと思つたと私に語られたことがあります。斯うして京都へ召出されたけれども何分先生は身分の低い藩士であつた爲め、その偉才は認められながらも幕府の樞要な地位に就くことは出来ませんでした。時は丁度七月十一日、先生は山階宮へ伺候した後、松代藩の宿陣本覺寺（下寺町五條下る）を訪ひ、夕方木屋町の寓居へ歸らうとして馬に乗つてやつて來ると、前に申した河上、前田の兩刺客の爲に木屋町三條に要撃せられて先づ馬の前脚を斬られ、今の象山先生記念碑のある邊まで來て馬が倒れると共に兩人の刃によつて無念の最期を遂げられたのであります。

事のゆきさつは、先生が幕府の密旨を受けて京都に上り屢々山階、中川の兩宮を始め二條、嵯

峨の諸公卿に向つて開國論と公武合體説とを勸説し朝廷の討幕計畫をも阻止したとの風評が立つたので熊本藩の河上彦齋（玄明又の名を高田原兵衛と稱す）は之を聞いて大に憤り、長藩の久坂玄瑞（義助）と謀り、鳥取藩の前田伊右衛門を誘ひ、先生の歸途を要してこれを暗殺したものであります。

序に、河上彦齋の生家は小森氏で父の名は貞助、母は和歌子といひ、天保五年十一月二十五日熊本城下新馬借町に生れ、幼にして河上源兵衛に養はれたとあります。彼は先生を暗殺した後左の如く告白して居ります。

「余人を斬ること猶木偶を斬るが如く、嘗て意に留めず、然るに象山を斬るの時に於て初めて人を斬るの思ひをなし、余をして毛髮の逆豎に堪へざらしむ、是れ彼れが絶代の豪傑なると、余の命脈既に罄くの兆にあらざるなきを得んや、今より斷然此不祥的の所行を改めて、方さに象山を以つて其の手を收めんのみ。」

これを以て見ても先生が絶代の豪傑であつたことが察せられるわけで、それ以後、彦齋は決して人を斬らなかつたといふことであります。

彦齋は先生暗殺後年餘にして信州松代に赴き高田原兵衛と變名し自ら下手人なることを隠して

佐久間家を訪ね、同家に宿泊し、先生の横死を弔し、優遇されて歸つたといふことであります。彼は遂に明治四年十二月四日畢生の主義とする攘夷説の爲に罪せられて刑場の露と消えました。斯くの如く象山先生は晉に經世家、政治家としてのみでなく、その他砲術家として、蘭學者として、蘭法醫學者として殊に科學者として、將又文學者として、更に經學者として何れも甚だ造詣が深かつたのはその絶大なる奮勵努力の結果に外ならないこと申す迄ありませんが、幕末天下紛々たる時に於て身を以つて皇國に許し、五世界を達觀せる識見のもとに衆論を排して飽くまでも所信を斷行した所の實に偉大なる人格の根本要素と申すべきものは、彼の孔子が天命を知つた如く、又西郷隆盛が天道に従ふと稱し、敬天愛人をモットーとしたると同様、夙に天の靈寵を感じ信仰信念を體得して居つた點にあることを見逃してはならないのであります。凡そ人は純潔なる精神のもとに一生懸命の境遇に身を處すると、次第に生理的・心理的醇化を起して神を見出すに至るものである。天と呼び、ゴッドと稱し、或は又神佛と唱ふるも歸する處は皆同一で、即ち超人間的の絶對なる力を信仰するに外ならないものであります。斯かる超人間的の絶對な力を信じ、常に感謝、憧憬、歡喜、満足を以つて眞理を辿り理想を追ふところに宗教の本領があるのだと私は信じて居ります。而もこの宗教たるや決して道德や科學と衝突する如き傾向のあるもの

であつてはなりません。兎に角、象山先生は深く天を信じて異常なる精神力を發揮した爲めその奮闘努力は實に人業ではなかつたのであります。さればこそ例へば僅か八ヶ月間で前述の通り蘭語に習熟することも出来たのであります。弘化二年五月十八日先生三十五歳の時、友人竹村金吾に送つた左の手紙を見ても明かにその眞相を物語つて居ります。

「昨年来再び童子輩と混成洋書に取掛り此節宅に差置候黒川生も歸省の事に候へば、折々深川邊迄も麴町邊迄も飛塵暑雨を避けず通ひ候て、不分明の所を搜し候様に仕、夜分も九つを承らずに臥せり候と申事は無之候、如此餘計之勞苦を仕候事逸樂を願候が人の常情に候へば、小生とても其勞苦を悦び候事にては無之候へ共、此時に當り是にてはすまぬ事と心付候事も、天の靈寵に頼ての事に候へば、是を小にしては御國の爲め、是を大にしては皇國の干城にも相成候爲めに、斯仕候て天寵にも答へ候様仕候にて御座候。此節洋學に寢食仕候事、敢而私の物好にては無之候。云々」

曩に擧げた先生の獄中記即ち省譽録の中にも

「人の知るに及ばざる所、而も我獨り之を知り、人の能くするに及ばざる所、而も我獨り之を能くす、是亦天の寵を荷ふものなり。天の寵を荷ふ、此の如くして唯に一身の爲に計りて天下

の爲に計らざる時は則ち天に負く、豈亦大ならずや。」

「古より忠を懐きて罪せらるゝもの何ぞ限らん。吾怨むことなし。但し爲すに及ぶべき時に爲さず、將に病弊をして復救ふ可からざるに至らしめんとす、是れ則ち悲しむべきのみ。」

「予年二十以後、乃ち匹夫の一國に繋がるあるを知り、三十以後乃ち天下に繋がるあるを知り、四十以後乃ち五世界に繋がるあるを知る。」

等の感懐が見出されるのであります。又前に述べた通り先生五十一歳の時、病氣の癒つたのに對し、「天[○]龍[○]を得て居るから天が洋書を讀まして下さつた爲め醫術の理法を習ひ得たのである」と感謝して居ります。或は又「天公本知我」と云ひ「天下後世必ず當に公論あるべし、予又何ぞ悔いん、何ぞ恨みん」と叫んで居ります。此等の事柄は如何に先生の思慮の遠大にしてその志操の高潔なりしかを明示するものであります。嘗て象山先生が信州東筑摩郡青柳宿の本陣青柳家（當主村長青柳八郎氏）に泊られたことがあつたが、青柳家は代々敬神の念に篤き家柄とて座敷の床の間に天照皇大神を祭つてあつたので、先生は決して床の間に脊を向けず始終その方に直面して坐られた。食事の時も同様であつた爲め給仕人が困つたといふ逸話が同家に残つて居ります。以つて先生が如何に敬虔な篤信家であつたか、察知せらるゝでありませう。さうして斯かる憂國の

至誠に溢れ、信仰の熱情に燃える先生の面目を仰ぎ見る時、我々後進たる者は自ら省みて大いに奮起を要する次第であると思ひます。

之を要するに、象山先生は天の靈寵を信ずることが深かつた爲め、各種の學術技藝や武道に精進すると共に非凡なる實行家たることを得たのであります。斯くして修養鍛錬せる高潔なる情操、鞏固なる意志の然らしむところ、單に知識や意見を抱持するに止まらずして、必ず之を上書したり或は自ら實行することを怠らなかつたのであります。門弟吉田松陰の詠つた「止むに止まれぬ大和魂」も亦一にこの精神に外ならない。この師にしてこの弟子ありと申すべきでありませう。

然るに我國近時の教育方法は、概ね唯智識を授くることにのみ偏して最も大切な信仰心を與へることを忽にして居る傾向があるのは、洵に遺憾に堪へません。即ち神、佛、天その他この種の何れの觀念でも差支ないが兎に角人間以上の或る絶對な力を信ずる心を養ふところの信仰教育を怠つて居り、又一方では正しい體育を忽にして來た爲め、一般に智識は相當に發達して居るけれども情意の鍛錬は甚だしく不十分なのであります。昔の武士道は先づ神に祈つて後に武術を行つたものであります。即ちこの神に對して何等疚しくない心を以つてする身體の鍛錬こそ眞の體育なりと申さねばなりません。然るに今日の所謂體育は兎角競技第一で何でも勝利を得ようとする

ことを目標とし、その爲には随分不純な氣持を伴ふものが見受けられるではありませんか。現に學校などで行はれる運動競技を見るにつけても私はひそかに遺憾を感じる次第であります。例へば應援團の如きも敵が失敗した時に喜んで旗を振り太鼓を叩くやうなことをしたり、或は殊更敵の選手の氣持を攪亂するやうな態度をとつたりするものが少くありません。他人の失敗を喜ぶ態度は情操の劣劣なるを示すものであります。又女學校などでは、よく講義中に先生が失策でもすると生徒はクス／＼笑ふ癖がありますが、先生の失策を笑ふなどは無論失禮のことであり、亦自分の情操を劣下する結果となります。或は又教師や友人に渾名を付けて面白がつたりするなども慎みの足らない行爲であります。斯様な不心得を輕々に看過し放置する時は、不知不識の中に情操は益々劣下となるばかりであつて、遂に親を思ふの情さへも薄らぎ、果ては畏れ多くも皇室に對し奉り、不敬を働くやうな結果に立ち至るやも測り難いのであります。

されば、この誤れる風潮を救済する爲にはどうしても智育と同時に宗教的信仰教育と眞の體育とを併せ行ひ十分に情意の鍛鍊を與へねばならぬ。即ち象山先生の實例に見ても、和漢學や科學の智識を修むると共に堅き信仰心を有ち且つ武道に精進することに依つて、始めて斯くの如く智情意の三者が圓滿に發達した偉大なる人格者たることを得たのであります。

惟ふに斯かる完全なる教育こそ、我建國の大精神、惟神の大道に基ける 皇祖皇宗の御遺訓として、教育勅語に明示し給へる御趣旨に合致する所であり、俯仰天地に恥ぢざる眞の大國民を養成するの途に外ならないと信するのであります。

然るに現代は一般に御都合主義、八方美人主義の如きを以つて世渡りの上法であると考へられ甚だしきに至つては實業家や政治家は嘘をつくことが上手でなければ商賣も政治も到底うまくゆかないなど、心得るものさへある有様なのは、全く教育の缺陷を表はすもので、邦家の爲め洵に寒心に堪へません。

故澤柳博士は象山先生を評して「今日でさへ得られない所の偉大なる眞の立憲的政治家である」と感嘆し、又「今日の政治家は一步なり二歩なり時勢に先んじて居るものは殆どなく時世の進歩に漸く引きづられて行く有様であるが象山先生の如きは眞の先覺者たる大經綸家である」と賞讃して居られます。實に象山先生の持論たる東洋道德と西洋技藝との合致論や、開國論は申す迄もなく、日本將來の要策を豫斷した炯眼と云ひ、志士吉田松陰が全然先生の卓説に従つて行動した點と云ひ、近くは故加藤弘之博士が「世界の大大勢を達觀せる識見家」として西郷翁と並び稱し、藤田東湖、横井小楠などは到底及ぶ所でないといつた點等より見ても、實に近代に於ける一大偉

人たることに何人も異議を挟まないであります。

若し果して然らば我國現時の政界と云はず、學界と云はず、産業界、教育界と云はず第二第三の象山を見出さんが爲には、家庭に於ける薫陶を始めとして國民教育に一大改革を加へ、我建國の大精神に基き惟神の大道に則り且つ之を貫徹せしむべき信仰信念を與ふるを以つて第一義となし、身を以つて皇國の爲めに許す所の大國民を養成するを以つて急務中の急務とすべきであつて、特に將來の國運を荷つて立つ青年諸君に向ひ一大覺醒を促さざるを得ない次第であります。

長々と愚見を申述べ且つ時々脱線の感さへありましたことは、甚だ恐縮に存じますが、唯國家のことを思ふの切なる餘り僭越と薄識とを顧みず敢て皆さんの前に微衷を懇へさせて頂いた次第であります。何卒失禮の段は偏に御寛容あらんことを願ひ、併せて御靜聽を賜つたことを深く感謝致します。(昭和五年十月)

生活の合理化と超合理化

「合理化」の意味

近來頻りに、各方面で、「合理化」と云ふことが唱へられて居るが、これは所謂「産業の合理化」なる標語の趣旨が他の方面にまで敷衍されたものである。産業の合理化とは、簡単に云へば、最小の経費を以て最大の生産を行ひ、之に依つて産業の發展を圖ることである。この産業合理化運動は歐洲戦後、特に疲弊した獨逸が、國力の恢復を企圖する爲に案出した方法であるが、その後經濟界の世界的不況に伴ひ、今や各國の考慮すべき重要問題となつて來た。米國では、それ以前から、能率増進とか科學的管理とか稱して、その實現に努力して來たが、これもその目的に於ては産業合理化運動の一面に外ならない。要するに、「合理化」なる言葉の意味は、一切の組織、設備、運用、技術、生産、及消費に關して、合理的最善の方法を盡すと云ふことに歸着するのである。

分相應の生活

一體、産業に限らず、凡ゆる方面に於ける人間の生活が、出来るだけ合理化せらるべきことは固より當然であつて、今更らしく、これが高調されるのは寧ろ不可解だとも云へるが、蓋し、昨今の行詰まれる経済的不安に刺戟せられて、殊更痛切に、その必要が感じられて來た結果である。即ち、これまで吾々の家庭や社會に於ける生活には、一般に甚だ多くの無駄や缺陷が含まれて居た。言ひ換へれば、眞に合理的の文化生活が營まれて居なかつたと云ふことを深く氣着くに至つたのである。そこで速かに、この不合理な、不経済な組織や方法を改めて、合理的な最善のものに引直さなければならぬ、と云ふのが即ち合理化運動なのである。つまり生活の合理化とは、「必要にして且つ十分なる」限度の生活を全うする一事に盡きる。必要にして且つ十分なる限度と云ふ意味は、常に時代の進歩に伴ひ、文明の利器を適當に應用しながら、しかも贅澤や冗費を避け、分相應の著實な生活を營むことである。

「合理化」の實績

斯様に云つてみれば、「合理化」は極めて分り切つた當然の事であつて、何人も敢て反對すべき理由は無い筈であるが、しかも、これがなか／＼實行されないのは何故であるか。私は既に十餘

年以前から、種々の機會に於て、「合理的最善の方法」なる語を用ひて、この趣旨を主張して來たのであるが、最近漸く「合理化」に一般の注意が向けられるやうになつたものゝ、猶ほその實績の頗る擧がらないのを遺憾とする。例へば、先づ第一に、現在の如く、輸入超過三億と云ふやうな我國民の生計からして、分相應で不合理千萬と云はねばならぬ。或る外國人が「日本はあんなに贅澤に物を消費して居るから、國民は餘程裕福なのに違ひない。然るに貧乏だ」と云つて居るのはどうも合點がゆかぬ」と云つたのは洵に痛い皮肉である。

元來、我國の中流以上の家庭では、子供の時分から金の勘定やその使ひ方を覺えるのは下品なことゝ考へられて居る。だから、さうした家庭の子女は、とかく金錢の値打を知らず、長じて後にも無駄使ひを平氣とする。中には學生々徒の身分で汽車の一二等に乗つたり、高價な裝身具を着けたりして、却つて得意の者さへ少くない。「世界中で日本の學生が最も生意氣で最も贅澤だ」と外國から歸つた京都大學の同僚なども慨歎して居る。實際、今日の日本の大學生の平均學資があれば相當の海外留學が出来るのである。嘗て倫敦で或る日本人が試みに英國の一少年に向つて「何か好きなものを買ひなさい」と云つて一片の金を與へた、子供は暫くして何も買はずに歸つて來た、そして曰く「彼處の店へ行つたけれど一片の値打のあるものが見當りませんでした」と。こ

これは即ち、假令餘分に貰つた金でも無意義な買物に費すまいとする心掛が子供の頭に沁み込んで居る結果であらう。

吾等の責任

併しながら、日本の青少年を責める前に、先づ吾々自ら大いに省みて、今日の狀勢に對する重大なる責任を自覺せねばならぬ。既に述べた如く、日本は貧乏國の癖に、一般人の生活が甚だルーズで動もすれば身分不相應の奢侈や虚榮に流れんとして居る。未だに宵越しの金を使はない江戸ツ子の氣前を誇つたり、電車で間に合ふところを自動車に乗り廻して高い賃金を拂つたり、物見遊山や娛樂物に派手を競うて得意がつたり、汽車の辨當を半分位も食ひ残したまゝ捨て、しまつたり、その他これに類する所業は隨處に見受けられるが、本人は勿論、世人の多くも格別不都合とも不合理とも氣にかけて居ないらしい。さうして、斯様に私經濟の上で浪費を惜まない人達は必然、公經濟たる銀行や會社や學校等の事務上では更に以上の無駄を顧みないのが通例であるから、延いて社會にそれだけ損失や迷惑をかけるわけである。これは聽て一國の財政にも差響いて來るであらう。又個人的には隨分物を吝みながら、公共物だとい向に重んじない人も少く

ない。例へば不用の時に電燈を點け放しにして(定額制では料金が變らないからとて)電氣を空費するなどは一般の通弊である。斯様な電氣の無駄を合算するならば、我全國では一ケ年に少くとも一億圓以上に相當するものが空費されて居るだらう。米國のカーネギー氏と云へば、御承知の通り、日本の三井三菱以上の大金持であるが、氏は或る夜外出して數丁行つた後フト自室に電燈を點け放して來たことに氣着き、急ぎ引返して消燈した上、再び出かけたと云ふことだ。これと反對に、我國の或る著名な精神家たる海軍將校が嘗て倫敦在勤中、燈火を點じたまゝ外出し、歸つてから宿の主婦に「燈は消しておく他の家で役に立ちます」と注意されて赤面したと云ふ話もある。斯様に外國では、物を粗末にすることを嫌ふ徳義心が上下を通じて發達して居るのに、我國では相當の知識階級でさへ、多年の習癖から、不注意の間に浪費をなす有様で、一般世俗に至つては、公私共に著しく消費の不合理が行はれて居る。さてこそ西洋人の目に、日本人は非常に不眞面目で、らしが無いと見られるのも止むを得ない次第である。

實行力の缺如

然るに、幸か不幸か、昨今の不況に迫られて、我國民も聊かこの點に目醒めて來た。その結

果、所謂消費節約、緊縮、合理化、國産愛用等が叫ばれて居る。ところが、イザ實行と云ふ段になると一向に捗らない。何とかせねばならぬと焦りながら、実績は頗る振はぬ。相變らずの放縱か然らざれば徒らに萎縮してしまつて、眞の合理化や國産愛用はなかく實現されない。それは合理化の實際方法がむづかしいのかと云ふに、決してさうではない。右にもその一端を述べた通り、極めて常識的な事柄で、難解な理窟も面倒な手續も存しない。否、萬人の爾かあるべし、爾かありたいと希ふ所のものである。誰しも、虚榮奢侈を排して勤儉節約を行ひ、そして新時代に適應した能率の高い文化生活を営むことを希望して居るのは當然である。然るに、その理窟は百も承知し、その方法は眼前にありながら、容易にこれが實行されないといふのは何故であるか。善と知り利益と知りつゝ之を行ひ得ないとは、如何なる理由なのであらうか。特にこの重要な一點に關して、私は世人の深甚なる反省を促したのである。

右の理由を一言に盡せば、我國民は一般に情操と意志との鍛練が不十分で、従つて實行力が乏しい爲だ、と云ふの外はない。然らば更に借問しよう、何故に斯く情意が劣弱で實行力が不足なのであるか。これに對して私は敢て斷言を憚らない、輒近に於ける我國民教育はその根本方針を誤り重大なる缺陷を有するが故に、この謬弊を招くに至つたのであると。語を換へるならば、現

欠

欠

て今更ながら感慨に堪へなかつたのである。)

然るに、維新以後歐米文物の輸入と共に何時しか物質主義に泥み、知識の吸収のみに耽り、果ては、この尊い傳統的精神文化の基調たる信仰教育と武士道とを忘れんとする者が多く、遂には知識階級宗教無用論を唱へたり、或は眞の體育を解せざる曲學者や無自覺者さへ出づるに至つたことは、實に國民の前途に重大な暗影を投じたものと云はざるを得ない。近時の社會不安と云ひ思想惡化と稱し、何れもその端をこゝに發して居るもので、全く各人が信仰を失ひ修養の根本を誤れる當然の歸結であらねばならぬ。今にして我國民は、この暗影を一掃し、光明の世界に立歸るべく努力する所がなければ、終に取返しのかぬ邪道に陥つてしまふであらう。

信仰教育の具體策としては種々の案が立てられるであらうが、要は、先づ幼少時代より家庭の内外を問はず常に宗教的雰圍氣の裡に薰陶を與へ、更に學校時代に於ても、努めて信仰心の涵養を助長するの方針を採るべきである。斯うして絶えず至高至善のものに奉仕する敬虔眞摯の氣分を以て、訓練と體驗とを積み重ねる中に、益々確乎たる信仰を體得するに至るであらう。(宗教的情操養成に關する要綱に就いては中央教化團體聯合會編纂のものを参照せられたい。)

生活の超合理化

生活の合理化は先づ生活の超合理化に始まる。換言すれば、合理的生活は宗教的信仰と眞の體育とに依る純潔なる情操と鞏固なる意志とを要素とする所の熱烈なる實行力に俟つて始めて完全に實現される。この見地より、現在吾々の日常生活を省ると、如何に多くの合理化すべき缺點を見出すことであらう。その一斑は既に指摘しておいたが、尙試みに二三の卑近なる例を擧げて諸君の一考を煩はしたい。

宗教的信仰を有つ者にとつては、凡ゆる物象は公私の所有を問はず皆神より與へられたもの、吾々人間は出来るだけ有効に且つ正當にこれを使用することに依つて、文化文明の進歩に貢献すべき使命を負うて居ることを確信する。従つて、假令、一滴の水、一片の塵と雖も、これを空費し或は粗末に取扱つては神に對して相濟まぬ。況んや貴重なる金錢、物品、土地等を無意義に浪費することは洵に勿體ない罰當りの所業であると感ずるやうになる。即ち茲に深く無駄を慎しむ心掛が起るのである。前述の如くカーネギー氏が電氣の空費を恐れ、又英國の少年が無價値の買物を憚つたのも、恐らくこの氣持に據るものであらう。又酒や煙草にしても、苟くも神に奉仕し

理想を追及せる者が、これ等の有害物を嗜むことは明かに不合理である。信仰ある者にとつて飲酒、喫煙は却つて苦痛であり、これを廢することこそ満足であらねばならぬ。然らば禁酒、禁煙は進んで實行され、而もこれに感謝を覺ゆる筈である。これ即ち生活合理化の一端に外ならない。

衣食住の合理化

衣食住に於ける二重生活も早く改めねばならぬ。近頃、賀川豊彦氏や一燈園同人等の斡旋に依つて、頗る實用的な廉價な洋服、靴等が供給されるやうになつたのは洵に結構なことで、吾々は見榮や贅澤を棄て、ドシ／＼と斯う云ふ品物を利用すべきである。又彼の冬の襟巻なども不經濟なるばかりでなく却つて不衛生なものである。腕時計は歐羅巴の軍人が始めたもので、鐵側の實用向を第一とし、金側は僅かに婦人用にのみ試みられたのであつたが、近來、日本では、男子用にも金側が流行し益々贅澤化する如き傾向を見受けることは再考を要する。

飲食物は體力や筋肉労働に應じて適量を攝らねばならぬこと勿論であるが、日本人は一般に食ひ過ぎる癖があり、爲めに胃擴張患者が多いと云はれて居る。殊に肉類や玉子などを餘り食へるとは決して滋養にならないばかりか、却つて有害なることが最近の衛生法で明かになつた。珈琲も

よくない。これは茶の中でも最も有害なばかりでなく外國よりの輸入品でもあるから、我國內から全廢することにした。然るに、一方で國產愛用を叫びながら、この方面に向氣のつかないのは、大抵のレストランやホテルの食事、宴會を始め、汽車の食堂並びに驛賣珈琲等を見ても分るではないか。さうして、これがため珈琲の輸入額は毎年約二百萬圓にも及ぶといふことである。紅茶は比較的害が少いけれども、リプトンなどは舶來で贅澤品であるから、我臺灣產の紅茶（烏龍茶、三井紅茶等）を代用するのが適當と思ふ。番茶、桑茶等は無害（寧ろ有効）で廉價で、而も我國産品であるから一層よろしい。又珈琲にはその効果が無いが紅茶、番茶等は殺菌力が強いとさへいはれてゐる。更に結構なのは水を吞むことである。勿論不潔なのはいけないけれども水道の水や清き眞水は大いに衛生に適してゐる。元來、身體の大部分は水であることを考へると、「水腹も一時」とは確かに眞理を穿つて居る。白米が脚氣の原因となり、飯としての滋養分も乏しいのみでなく却つて有害であることが漸く一部の専門家に認められ、半搗米等が追々用ひられるやうになつたが、最も理想的なのは玄米食で、東京帝大の二木醫學博士も盛んにこれを推奨されて居る。現に拙宅でもこれを常食として居るが、初め馴れない内は玄米に二割位の小豆を入れ少量の鹽を加へて煮ると食べよい。馴れると焚方も上手になり、それに例の心理的生理的變化も起つて來て、小豆などを入

れずとも美味を覺える。而も少量の玄米で足るやうになるから、暫くの辛抱が肝腎である。副食物は野菜、果物等が適當とされて居る。斯く玄米食は少量で十分の滋養が攝れるから、これを奨勵することは、經濟上から云つても又食糧問題から考へても非常に適切な方策であると思ふ。

住宅の合理化

近來、我國の住宅にも鐵筋コンクリート建（木筋コンクリート建も可なり見受けるが、これは武田五一博士などの説によると不適當だとのことである）が行はれ出したのは耐震耐火の上から合理的であるが、これを日本化することに於て未だ不十分な點がある。（拙宅ではこの點を相當苦心した）。例へば、多くは西洋の建物をそのまま、眞似て、屋根や廂を附けることを考へないが、歐米と違つて熱度の高い日本では、窓や壁から這入る熱氣を、この屋根や廂で遮ることが必要だ。又我國は雨量が多いから、これに依つて濕氣や雨水の侵入を防ぐのも極めて大切である。更に洋館は元來空氣の流通が宜しくないことは明かで、外國人も却つて日本の吹き通しの住居を推賞して居るが、斯様な固有の特長は成るべく保存することにした。夏分などは、洋館は勿論、和風建築でも窓や障子に網戸を用ひるのが適當で、これに依り蟲類などの侵入を防げるから従つて

蚊帳なども要らない。又普通の窓硝子は人體に必要な紫外線を透さないから、これを透す特殊の硝子を適宜に用ゐることを忘れてはならぬ。それから、日本人は入浴を好むが、風呂の構造やその保温加熱装置等にも工夫を凝らすことが肝要である。御参考までに拙宅の實例を申すと、これは知人達から魔法風呂など、評せられて居るが、特殊の構造を有し、熱絶縁にはイソライトと稱する天然の國産物を用ひ、熱蓄積には素焼の煉瓦を用ひて居る。朝五時頃火を入れると、一時間内外（夏は約三十分）で沸き立ち、その最初に焚いた熱は湯が沸くと同時に浴槽の周囲にある上述の保熱煉瓦に蓄積される。風呂の四周は右のイソライト瓦で圍まれて居るから熱損失が少い。そして、湯の熱損失は周囲の蓄熱で補へるから、朝一度焚きつけるだけで一日中適度に湯の温度が保たれる。尚風呂の中では手拭も用ゐず、身體も洗はないことにすれば、湯は終ひまで綺麗である（これは一般の浴場でも實行が望ましい）。燃料は廢物、反古、塵芥等を利用し不足の分だけ石炭で補ふ。この補給石炭費は一日平均約十錢、これで全家族が終日何度も自由に入浴することが出来る。又飲料水は無論水道であるが、その他の用水は舊來の井戸から電氣唧筒で汲み揚げて使つて居る。その方が拙宅では經濟的だからである。冷蔵庫も井戸を利用し、又井戸の中にタンクを沈めてこれに水道の水を導き夏は冷たく冬は暖かに保つ方法を實行して居る。

覺醒奮起せよ

我國では從來、炊事や煖房に薪炭を多く使つて居るが、これは少くとも大都市では寧ろ不經濟であり又所謂都市煤煙問題から考へても面白くなく且つ火災の危険もあり、それに熱効率も悪く、おまけに大切な天然資源たる木材を消耗するわけであるから賛成出来ない。速かに電氣か瓦斯に改めねばならぬ。殊に電熱を利用することは凡ゆる點より見て最も適當である。又熱源のみでなく、割烹、洗濯、掃除等にも便利な電氣器具を應用して人力の節約を圖り、家庭生活の能率を上げることは、新時代の文化生活に適つた合理化である。室内の設備に就いても一般に改良すべき餘地は澤山あり、一々吟味すれば限りが無いが、假りに電燈を一つ取付けるにしても、その位置に適否がある。例へば、湯殿と洗面所、便所と手洗場等は大概隣り合つて居るのに、それ／＼別々に電燈を點けたり、或は間の壁を穿つて電燈を挿入する等のことを見受けるが、これは拙なる方法で、室の中間の區劃を適當にすれば一方の電燈のみで間に合ふ筈である。例へば、間に擦り硝子を入れて洗面所又は手洗場の方の電燈で湯殿や便所に兼用せしめ、手や顔を洗ふ照明を主とするのが本當である。又一般に洗面所と鏡との關係位置に注意することが足らないやうであ

る、これは鏡の前の顔に向つて、晝の外光や夜の電燈が程よく射すやうに考慮せねばならぬ。

以上擧げたやうな實例はまだ澤山あるが、何れも日常生活に於ける卑近な事柄であつて、恐らく何人も理窟では直ぐ解ることであり、且つこれを實行するにも別段の支障は無い筈であるが、而も今日まで實績が振はないのは、前段述べ來つた通り、人々が理想と眞理とに邁進せんとする宗教的信仰の涵養と眞の體育的訓練とを怠り、従つて高度の情操と金鐵の意志との養成を缺き、これでは相濟まぬ、勿體ないと云ふ氣分が足らず、甚だ以つて實行力が乏しい爲め、動もすれば御都合主義に流れ、儉安姑息に日を送つて居るからである。この弊風は是非根本的に革正しなければ邦家の前途に對して憂慮に堪へない。その爲めには先づ我國の一般教育に大刷新を加へて、從來の智育第一主義を排し、「終始清い心で永續的に働く」やうに適當なる信仰教育と眞正の體育とを大いに加味して情意の鍛鍊と知識の發達とを相並行せしめ、依つて以つて、神が人類に下せる大使命たる最高理想の文化文明を完成する目的の爲めに、堅き信念と清き情操と強き實踐力とを以て奮闘努力する人格者を多數に養成する外はないのである。而も、元來、日本人は毫も歐米人に劣らざる素質を有する民族であることは根據ある研究の證明せる事實であるから、吾々が眞に覺醒奮起するに於ては最も偉大なる國民として世界に立つことが出來ると思ふ。(昭和五年十一月)

明治天皇ご教育勅語

英國文部省に於ける我教育勅語

往年、田所美治氏が、文部次官に在職中、海外に出張し、英國の文部省を訪問した際、調査局長ツウエンティーマン博士は田所氏を或る一室に案内した。この室は、英國各地の教育者が相集つて研究したり協議したりするための大切な室であつたが、その壁間に田所氏の眼を驚かすものが掲げてあつた。それは 明治天皇の教育勅語の英譯で、嘗て菊池大麓博士等が翻譯して寄贈したものである。田所氏がその理由を尋ねると、ツウエンティーマン博士は襟を正して「斯様な尊いものは貴國以外の何れの國にも求めることが出來ない、これは實に 天祖の御子孫たる萬世一系の 皇室を戴く日本にして始めて仰がれる勅語である。一體、日本の如き國體を有する國家でなければ、其の君主が國民に對して此の如き人倫道德の教を御示しになることは出來ない。吾々歐洲人は神より外に道德上の教を授かることは不可能である。今この勅語の内容を拜するに

全くバイブル以上の權威ある聖經典であつて、教育の眞精神といふものは、その一字一句に炳乎として輝き満ちて居る。斯くの如き立派な經典を有つて居られる日本の教育が駸々乎として發展を遂げてゆくのは固より當然のことである。洵におめでたい限りであつて我々外國人は羨望に堪へない。仍つて之を此處に掲げて我國の教育者達にも拜讀させ、我教育をも之に則らしめたいと希ふ微意なのである。」と云ふ意味のことを答へたさうである。

ツウエンテイーマン博士は勿論眞面目な基督教信者であつたが、博士をして我教育勅語に對する斯くの如き深い感激と理解とを有たしめたものは偏にその敬虔眞摯な「信仰心」の働きにあることを私は信じて疑はない。

我國の神道に據れば 天之御中主神を天地の主宰者とし 高皇産靈神並びに 神皇産靈神を萬物の創造者とし、しかも、これ等の三者は同一神であると思做して、これを三位一體と稱して居る。これが謂はゆる本身であつて 天照皇大神や瓊々杵尊を始め奉り、その他天神地祇並びに 神武天皇以下御歴代の 天皇はその分身又は權化であらせられるとなす所の一神教であると申すことが出来る。さうして 天照皇大神の天壤無窮の御神勅や、齋鏡の御神勅、高皇産靈神の神籙の御神勅即ち禊、祓、鎮魂等の儀式に依つて祭祀を大切にすべきことを示し給うた御神勅等を基礎と

して我建國の大精神、大理想たる惟神の道が生れて來たのである。言ひ換へれば、神の御延長たる萬世一系の 天皇が仁を本とする徳治主義に則り國民を治し給ふことに依つて天壤無窮の國體が存立するとなす所の謂はゆる祭政一致の皇道を上下共に信奉し實行しつゝ、時世と共に之を進化發展せしめて今日に及んだものである。

嘗て或る日本人がロンドンの一大書店に立寄り「貴店で一番よく賣れる本は何か」と尋ねたら言下に「バイブル」と答へたさうである。我國に於て教育勅語に關する書物がよく賣れるといふ書店が果してあるであらうか。バイブルはいふまでもなくキリストに依つて神の道を傳へられた聖典であるが、我教育勅語も亦同じく、神の道即ち惟神の大道を御示しになつたもので、そこには人間にして人間を超越し、日本人にして日本人を超越した我建國の大精神、大理想たる所謂皇道が高く掲げられてある。これぞ即ち我 皇祖皇宗の御遺訓に外ならない。斯様に、神の子と仰がれるキリスト、或は 天祖の御子孫におはしまして、而も御信仰の篤き 明治天皇の如き大人格者に依つて、それ／＼神の道を傳へられたものが、バイブルであり或は教育勅語なのである。故にこれ等の聖典は之を各人の必携品となすべきは勿論、その教へを眞實に理解し實行するには、どうしても堅き信仰心が無ければ到底駄目である。

斯様に外國人ですらも、信仰を有つ者は、我教育勅語の尊さに感佩して居る。況んや我々日本國民たる者は更に一層の感奮と熱誠とを以つて聖旨を奉體しなければ誠に相濟まぬ次第である。日本國民の踐むべき道、嚮ふべき所を御示し下さつた教育勅語の御趣旨を何處までも服膺して精進することに最大の歡喜と憧憬と満足と感謝とを覺える如き尊い情操を有つやうに、我々は修養し、教育されなければならないのである。これ即ち 天祖に對し奉る信仰の至情に外ならない。我々日本國民がこの信仰を體得することに於て始めて、ツウエンテイマン博士の謂はゆる偉大なる教育の効果が擧がり我建國の精神が益々發揚されるわけである。

維新前の武士及學者

我國の明治維新前に於て、國民の手本と仰がれた武士や學者が、今日の所謂智識階級の人々とその修養の仕方にて異なつてゐた點は、單に學問の修業のみでなく、これと同時に宗教に依つて信仰心を養ひ又武術に依つて意志を磨いたことである。當時の武術は今日でいへば正しい意味の體育に相當するもので、即ち技術の巧拙のみに囚はれず精神の鍛鍊を主としたものである。故にこれを武徳とか武道とか呼ぶ方が一層適切にその意味を表はして居る。斯の如く往時の人格者

は學問と信仰と武道とに依つて人格の三要素たる智情意の全き修養鍛鍊を心がけたものである。例へば信州松代藩の英傑佐久間象山の如きはその代表的人物である。象山は西洋の學問を研究するために先づ蘭語を覺える必要から黒川良庵といふ蘭方醫を自宅に聘して共に勉強したことがあるが、その後竹村金吾と云ふ友人に送つた書簡に次の如く述べて居る。(これは弘化二年五月、象山が三十五歳の時に書いたものである。)

「昨年来再び童子輩と罷成洋書に取掛り、此節宅に差置候黒川生も歸省の事に候へば、折々深川邊迄も麴町邊迄も飛塵暑雨を避けず通ひ候て、不分明の所を搜し候様に仕、夜分も九つを承らずに臥せり候と申事は無之候、如此餘計之勞苦を仕候事逸樂を願候が人の常情に候へば、小生とても其勞苦を悦び候事にては無之候へ共、此時に當り是にてはすまぬ事と心付候事も、天の靈寵に頼ての事に候へば是を小にしては御國(松代藩の事)の爲め是を大にしては皇國の干城にも相成候爲めに、斯仕候て天寵にも答へ候様仕候にて御座候、此節洋學に寢食仕候事、敢而私の物好にては無之候。云々」

文中の「天の靈寵」なる言葉は明かに象山の信仰を表白して居る。又象山の獄中記「省譽録」の一節にも

「人の知るに及ばざる所、而も我獨り之を知り、人の能くするに及ばざる所、而も我獨り之を能くす、是亦天の寵を荷ふものなり、天の寵を荷ふ、此の如くして唯に一身の爲めに計りて天下の爲めに計らざる時は則ち天に負く、豈亦大ならずや」とある。要するに、天の寵を荷ふとか、天に負くとかいふ觀念は、これ即ち神を信じ、その信仰に活かすことを意味して居るものでなければならぬ。實にこの信仰があつてこそ、象山は古今東西の學を究め、常に高潔な志操を持して、不撓の意志のもとに、眞の大先覺者たる面目を發揮することが出来たのである。

又西郷南洲と相呼應して幕府明け渡しの難局を立派に解決した勝海舟（象山の門人）は、江戸の貧乏旗本の子に生れ、或る書店の主人の情に依つて漸く讀書させて貰つたといふ話であるが、長するに及び日蓮宗を信じ武道を勵み更に四年間某寺に入つて禪を修行した。海舟の偉業は實にこの精神的鍛錬の賜であつたと思ふ。また西郷南洲も敬天愛人をモットーとし、吉田松陰もその妹へ送つた手紙の中に神明を尊ぶべきことを訓へ諭してゐる。松陰が「吾今爲國死、死不負君親、悠悠天下事、感賞在明神」の詩を遺して、少しも取亂すことなく從容死に就いたのも全く永遠に生くる途を悟つた信仰の力に外ならない。

要するに、さうした信仰信念を有つてゐる人々の奮闘努力に依つて我國近代文化の基礎は築かれたのであつて、決して唯學問や智識のみの結果でないことを忘れてはならぬ。

明治天皇の御信仰

畏くも不世出の大偉人として我等の仰ぎ奉る 明治天皇は、未だ儲君におはします御時より毎朝御父君 孝明天皇の御伴を遊ばされ清涼殿の御苑に於て 天照皇大神を始め萬の天神地祇に御祈願を籠めさせられしと洩れ承る。天皇の偉大なる御人格は固より天資に由らせ給ふ所とは申せ、亦一つには斯くの如く御幼少の頃より高き御信仰の素地を培はせ給ひし御成果にこそと拜察致されるのである。

つくづくと思ふにつけて尊きは

遠つ御祖の御いつなりけり

國民は一つ心に守りけり

遠つ御祖の神の教を

の御製を拜するも 天祖即ち 天照皇大神を遠つ御祖と憧れ給ひ、その御教を遵奉せる國民を嘉

し、且つこれを鼓舞し給ふ大御心と共に、現津神アキツミカミ（或は現神アキツミカミ）の御名を負はせ給ふ通り 天皇御自身にも天孫即ち神の御延長であらせられることを信ぜさせられ、その模範を示し給ふ御信仰の偉大さを伺ひ奉ることが出来るのである。

千早振る神の御代より一筋の

道を踐むこそ嬉しかりけれ

の御製は萬代不易の惟神の大道を守らせ給ふことが誠に御満足であり御歡喜であらせられるとの御意に拜せられ、この「嬉しかりけれ」と仰せられた御言葉の中に尊き御情操が伺はれるのである。若し假に天皇は惟神の道を守り給うたと申すだけならば未だ的確に御信仰の深さを現はすには足らぬと思ふ。然るに 天皇は惟神の道を守り給ふことを御喜び遊ばされたのであるから、そこに甚だ深き御信仰の情操が躍如として拜し得らるゝのである。何故ならば、堅き信仰心を以つて實行する所には必ず絶大の歡喜と満足と感謝と憧憬とを伴ふからである。

神津世の御代のおきてをたかへしと

思ふそおのか願なりける

の御製には、 天皇が常に敬虔なる御精神を以つて神代よりの掟に遵はせられんと御祈念あらせ

られしことを拜察せられて畏き極みである。この御製と申し、前の「千早振る」の御製と申し 天皇が如何に 天祖に對し給ふ御信仰御景慕の情の深く篤くおはしましゝかを伺ひ奉ることが出来るのである。此の崇高なる御信仰に基き 皇祖皇宗の御遺訓として我等臣民の遵ふべき所、踐むべき道を御明示遊ばされたのが即ち明治二十三年御渙發の教育勅語に外ならないのである。

目に見えぬ神に向ひて耻ぢさるは

人の心の誠なりけり

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけれ

鬼神も泣かするものは世の中の

人の心の誠なりけり

これ等の御製は 天皇が神靈と感應道交遊ばされし尊き御情操と堅き御信仰とが伺はれ、實に神人合一とも申すべき偉大なる御人格が偲ばれて全く感激に堪へない。申すまでもなく人は神佛と感應靈交が出来るやうにならなければ未だ眞の信仰心を得たとは云へないのである。

神風の伊勢の宮居を拜みての

後こそ聞かめ朝まつりこと

毎朝先づ賢所を御禮拜遊ばされた後に始めて政を贊はせ給ひし謹嚴なる御態度が拜察出来る。これ即ち祭政一致の皇道である。

神垣に朝参りして祈るかな

國と民との安からむ世を

とこしへに民安かれと祈るかな

我世を守れ伊勢の大神

國民のうへ安かれと思ふにも

祈るは神の守なりけり

斯くの如く神かけて國と民とを愛し給ふ大御心の有難さは偏に感激の外はない。

我國は神の末なり神祭る

昔の手ふり忘れなよゆめ

とこしへに國守ります天地の

神の祭をおろそかにすな

御祭祀を如何に御大切に遊ばされしかは、これ等の御製を拜しても明かに伺はれるが、實際、紀元節、孝明天皇祭、十二月十五日の御神樂等は壯嚴を極めさせられた由で、殊に一年中の大祭たる新嘗祭は、前夜より翌朝にかけての御神事であるが、天皇は神嘉殿に出御あらせられて御手づから神饌を御供へ遊ばされ又神枕まで御用意遊ばさるゝ御儀式は實に神々しき限りであつたと洩れ承る。尙祭日の前夜より御齋戒のため御食器までも新たにせられ、さうして朝と晩とに御禮拜遊ばされたとの御事である。

三室戸敬光子爵の談に據ると、明治四十一年以後の事、或る大きな御陵の環渟浚渫費を豫算に計上して御裁可を仰いだことがあつたが、偶々暴風雨のため他の工事の必要が突發したので、この豫算を流用することに取計らつた。天皇はこれを知り召され内匠頭及諸陵頭に向はせ給ひ「朕の住む宮殿内の工事ならば兎も角、大切な御歴代の御陵のことは左様に輕々しく變更すべきものでない。朕の心持では、御陵の工事豫算を裁可するに當つては先づ御先祖に對し奉り御陵に斯々の工事を致しますと心に念じ奉告申上げた上のことである。されば若し他に必要の工事が生じたならば、その方は別に適當の處置を講ずべきであつて、既に決定せられた御陵に關する工事を濫りに中止變更してはならぬ。」

といふ意味の御言葉があつたので當局者は非常に恐懼したとのことである。

又、伊勢の大廟の御門扉は、四尺四方の檜の一枚板で木曾の山中から採つたものを二十一年目毎に御取換へになるのであるが、或る時 天皇は宮内大臣に向はせられ「段々世の中が移り變つてゆくと今に鐵筋コンクリートの御門に代へたらどうかなど、申出る技術者もあるかも知れないが、しかしそれはよろしくない。大廟は神代ながらの御住居にして差上げなければ相濟まぬ。若し檜の一枚板が無ければ二枚接いでもよいであらう、止むを得なければ杉板を代用しても差支ない。よく取調べておけ」との御意であつた。仍つて宮内省では早速木曾の御料林に就いて篤と取調べた結果、檜は潤澤でその心配の無いことが確められたので、その由を奏上すると 天皇は非常に御満足あらせられたさうである。

斯様に 皇祖の御祭事や山陵の御費用を始めとして 皇太后陛下の御用途等は決して節減を御許しにならなかつたことは偏に篤き御孝心の發露でなくてはならない。

嘗て大和畝傍附近で陸軍大演習を御統監の砌、「事の序に御陵を参拜することは非禮である」と仰せられて樞原神宮に御参拜あらせられなかつた。その他何事によらず序を以つて行幸遊ばさるゝことは絶えて無く、斯かる場合には特に侍従を差遣はさるゝを常とし給うた。これ等は、御目的

以外、事を苟も遊ばされない謹嚴なる御性向が伺はれて唯畏しと申すの外はない。

明治元年三月十四日御發布になつた五箇條には

「衆ニ先チ天地神明ニ誓ヒ」

と詔せられ、同三年一月三日の大教宣布には

「天照大神ノ神勅ニ添ヒ祭政一致ノ旨ヲ體シ神明ヲ敬シ惟神ノ大道を遵奉スベキ」

ことを御示し遊ばされた。次いで明治八月四月十四日の立憲の大詔の中には

「五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ」 「朕今誓文ノ意ヲ擴充シ」 「漸次ニ立憲ノ政體ヲ立テ」

「汝衆庶ト共ニ其ノ慶ニ賴ラントス」

と仰せられて居る。更に明治二十三年十月三十日御換發の教育勅語は、此の崇高なる御信仰のもとに、我建國の大本に鑑み、我國體の精華を擧げて、國民道德の淵源を明かにし給うたものであることは改めて申すまでもない。

尙又日清、日露の戦役に當りて下し賜へる詔勅の中に「天佑ヲ保有シ」といふ御言葉があるが、外國人の中でも信仰ある者はこの御言葉の意味を聞いて非常に感嘆したさうである。

教育勅語に現はれた人倫道德に就いても 天皇は常に御自らその模範を示させられ衆に先じて

御實行遊ばされたことは茲に改めて申述ぶるまでもなく國民の齊しく仰ぎ奉る所であるが、例へば「夫婦相和」の範を垂れさせられし御事や、或は又御日常の如何に御質素御儉約におはしましたるかば申すも畏き極みである。その一二を拜聞するに、皇后陛下(後の照憲皇太后)には元來御虚弱にあらせられたので、明治天皇は常に之を御軫念遊ばされ、香川皇宮大夫に御下命になり宮城内の紅葉山とか代々木などへ皇后の御散歩を御勧め遊ばされたさうで、又御反物やその他の御買上品なども、これは皇后に宜しからうと仰せられて御自ら御見立てに相成ることが屢々あらせられた由である。

御服裝の如きも夏冬を通じ御軍服又はフロックコートに限られ、その他には白羽二重の御寢間着があるのみで、外套は御有ちになつたが滅多に御召しにならなかつた由。さうして着物の色は褪せても糺ぎ合はせでも法規に叶へばそれでよろしい、心に錦を纏へとの大御心に伺はれた。

御内儀即ち御常御殿は御居間であるが、夜はシャンデリヤ一基に十本許りの蠟燭が點ぜられるに過ぎなかつた。表の御座所は御學問所と稱し侍講などから種々御聽聞遊ばされた場所であつて、こゝには、天皇の御用ひになる西洋机一基の上に三本の蠟燭を立てた金燭一臺と、侍講などの用ゐる低き西洋机一基の上に蠟燭一本の銀燭一臺と、その外所々に高臺の蠟燭が用意せられた

が、普通は金燭一臺のみで御済まし遊ばされたとの御事である。

宮城内の電気は帝國議會の火災後蠟燭に改められ、その後、表の宮殿は再び電気に復したが、御居間と御學問所とはそのまゝ蠟燭を御用ひ遊ばされた由拜承してゐる。

嘗て田所美治氏が時の宮内次官河村金五郎氏の談として私に傳へた所に據ると、天皇の御居間の障子は古びて黒くなつて居り剩へ所々に切張りを施されてあつた。又平素御使用の毛筆の如きも毛が切れて頭が丸くなるまで御取替へ遊ばされず、これにインキを付けて御製の歌など御書きになる、しかもその御用紙はと申せば陸海軍大臣よりの帷幄上奏文を入れて差上げた古状袋を御手づから裏返しに遊ばされたもので、これ等の御製の草稿は御學問所の片隅に置かれた廢物御利用のボール箱の中へ御仕舞ひになつてある。インキ壺は巷間の文房具店などで見受けると同様の、當時十錢か十五錢位の粗末な夫婦壺である。又御居間の一隅には普通の植木鉢に簡單な植木を植ゑさせられ、これを眺めて御樂み遊ばされた。御脚下に敷かれた虎皮はその頭が損じたので犬の皮を以つて修理せられたものを永く御用ひ遊ばされた等の御事は、承るだに感激恐懼の念に堪へない(右の虎皮は明治神宮の寶物館に陳列されてある筈である)。

天皇は又廢物利用に大御心を置かせられた。例へば煙草の吸殻を集めて女官に賜はり、女官が

これを工夫して吸口の菊の御紋を切抜き屏風に張つて御覽に入れたところ、非常に御賞めになつた。蜜柑もやゝ古くなると汁を絞つて葡萄酒の空瓶に入れたのを御附の人々へ分け與へられた。家鴨の卵の如き大きな殻はこれを盃に作られ、漆で色々の繪を御描きになつて、これも側近者へ賜つた。又ジャボンの皮は菓子器に作つて御利用遊ばされた等のことを洩れ承つてゐる。

斯様に決して物を無駄に御捨て遊ばされぬ御儉徳はやはりその深き御信仰より出でたる結果と拜察致される。一體信仰のある人から見れば、凡ゆる物象は、公私の所有を問はず皆神より與へられ又は委託されたものであつて、我々人間はこれを出来るだけ有効に且つ正當に使用することに依つて、文化文明の發展に寄與すべき使命を負うて居るものである。それ故、たとひ一滴の水、一片の塵と雖も、これを空費し或は無意義に取扱つては神に對して相濟まぬ、況んや貴重な金錢、物品、土地等を浪費することは洵に勿體ない罰當りの所業であると感じざるを得ない。即ち茲に深く無駄を慎む心掛が起るは當然のことである。

更に又 天皇は「避暑避寒は病人のすべきことである」或は「國に一日も政なくてはならぬ」「朕は多數の人々の爲すまゝに與みせん、夏冬は何處も同じこと、人々の心持に依つて暑くも寒くも感ずるものである」と仰せられて避暑避寒を遊ばされなかつた。乃ち御製に

年々におもひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

とあるのは、この御事を窺はるゝのである。又 天皇は京都の地を非常に御好きであつたのであるが、或る時田中光顯伯が京都行幸を御勧め申上げたところ「維新當時のことを思ふと情に於て忍びないからそれを云うてくれるな」と仰せられたさうである。又「京都へゆけば一二泊では足らぬ、長く滞在することになるから、政治がおろそかになり、上は 祖宗の御遺訓に悖り下は萬民の信望に反くであらう」とて、遂に京都行幸を御断念遊ばされし由である。斯くの如く、常に國民の心を御掬み取りになり、天下のために御私情を御節制遊ばされし確乎たる御意志や、眞摯なる御情操は、唯拜跪して感銘するの外はない。

又嘗て、鐵道の列車内に据付けてあつた電氣扇を御自ら御開閉になりその動作具合などを御研究遊ばされたが、その後、宮城内の表の御所だけに之を御採用になり、電氣が無かつたので蓄電池で御廻はしになつたとのことである。その時の御製に次の通り仰せられてある。

よきを取り悪しき捨て、^{トクケニ}外國に

劣らぬ國となすよしもかな

御酒は御嗜み遊ばれたが決して御自分から飲むと仰せられたことはなかつたさうで、又長くも御病氣の際、御苦惱の御様子を御示し遊ばされなかつたことなどを承るにつけ、如何に克己心の御強くおはしましたかを伺はれて感嘆に堪へない。

その他尙、御高德は數限りもないが、斯くの如きは偏に「神の御代より一筋の道をふむこそ嬉し」との大御心を以つて神の道そのまゝを御遵奉あらせられんとする尊く堅き御信仰の結果に外ならないと申上ぐべきであつて、何れの場合にも常に御満足御歡喜の情を以つて御實行遊ばされし御事と拜察する次第である。されば 天皇の御側近く仕へ奉りし人々の洩らされた所によるも天皇の御風手は實に神々しく且つ尊嚴に渡らせられしとの御事であるが、洵にさもおはすべきこと、景仰の至である。 明治天皇こそは實に神人合一の大偉人にましまして、その御賢明に渡らせられしは「智」の高邁なる御事を、その御仁慈に富ませられしは「情」の深厚なる御事を、又その御勇敢にあらせられしは「意」の鞏固なる御事を示させ給へるものと申すべく、智情意即ち智仁勇の遍滿なる大人格者として洵に欣慕憧憬し奉るの念に堪へない御方である。

維新後の德育觀

翻つて教育勅語御發布當時に於ける我國の世相を一瞥するに、英國風の功利主義や、佛國流の自由民權論が、國內を風靡し、後には獨逸式の君權思想が國家主義的思想を培ひ、これが政治思想と結びついて改進黨と保守黨とに別れて互ひに争ひ、遂に民選議院設立の議が勝を制して、憲法發布、國會開設となつたのであるが、その當時宗教は次第に輕視せられ、或は之を迷信邪教と混同し、智識があれば宗教は不要なりと唱へるやうな大先輩の學者さへ現れて來た。さうして、これ等の觀念が遂に教育界を誤り、憲法にある信教の自由といふ意味を曲解せしむるに至つた。尙又忠孝を功利的思想で論議するやうな誤つた人々も出て來る有様だつたので、従つて宗教の必要を感じ宗教がなければ眞の人間でないことを悟る人が段々少くなつた。

併し一方に於て加藤弘之博士等は、
「中學、小學の修身學には宗教に即した道德でなければ効果がない、即ち德育といふのは宗教主義の外に効力がないと思ふ。一體德育は智育に依るものでなく、重に感念に依るものであるから、最も不可思議なる御本尊様がなければならぬ。」

哲學は智識を開くものであるが一般の實地道德を開くことの出來ないものである。私は宗教のことは深く知らないが、私の見るところでは耶蘇教が一番よいかと思ふ。しかし勿論それが神

道であつても佛教であつても儒教であつても構はない。それ等の一つを選ばして宗教に依る徳育を施す中學、小學を有つことが必要である。云々」

といふ意味のことを「德育方法案」と題して明治二十年十一月、大日本教育會で演説してゐる。又教育勅語發布後、西村茂樹氏も「德育といふものは信仰と服従とに依つて成立するものであるから今日は儒教に依つてこれを與へるが最もよい」と云ふ意味で、「學校の德育法案」と題して東京學士會員雜誌に發表してゐる。兎に角これ等の人々は信仰乃至宗教の必要を認めてゐたのであるが、一般の風潮はそれから離れて次第に御都合主義となり、その結果宗教に依る高遠なる理想主義は漸々衰へてしまつたのである。

斯かる世相であつたから明治二十三年二月に開かれた地方官會議では一般國民の德育方針に就いて盛に論議が起り適從する所を知らなかつた。明治天皇は長くもこの有様を聞き召されて非常に御軫念になり、國民道德の基準を明確にすべき教育勅語の御發布を思ひ立たせられ、その起草方を時の文武大臣榎本武揚に命ぜられたが、後、芳川顯正が代つて文部大臣となるに及び更に引繼いでこの大命を拜した。而して 天皇御親裁の下に總理大臣山縣有朋、文部大臣芳川顯正、侍講元田永孚、法制局長官井上毅等の諸氏が熱誠を凝らして研究せる結果、五ヶ月の日子を費し

て遂にこの一大聖典が出来上つた。斯くて十月末、恰も 天皇は水戸地方の大演習より還幸遊ばされ輕微の御不例に渡らせられたにも拘らず、直ちに山縣總理、芳川文相を御召しになり御假床上より御躬らこの勅語を御下賜あらせられたのである。この間の事情に就いては當時 皇女御養育主任であつた佐々木高行伯（後に侯爵）の日記（これは「明治聖上と臣高行」と題する著書中に公にされて居る）に次の如く誌されてある。

「十月三十一日元田翁を訪ふ。元田曰く、（中略）、右勅語に付いては先般内々御話致し候通にて餘程手間取れ申候、其譯は、勅語の草稿を井上毅へ内命の處、同人は心配にて相斷申候、夫より學者中の西村茂樹、又中村正直、其他へも相談相成候處、何れも好案無之、詰る處井上にて荒増の草稿出來、自分が内輪にて主人と相成、取調漸く出來たり、尤も學者中にて出來兼候場合、文部大臣にて取調候事に相成、其分を以て内閣を經而入天覽候處、自分へ御下問相成候に由り、前件の通り井上に相計り、種々修正致して差上、夫より内閣にても色々修正も之有たる由にて、漸く、御沙汰相成候、（中略）。此の精神を以つても神祇御崇敬の義は十分擴張は無論と存候、（中略）。今日教育上の勅語は實以つて難有事にて、則ち 陛下が兼々軫念あらせられし所に候へば一般に貫徹可致と相悦び候事」

畏れ多くも 天皇が如何に萬民の爲め御軫念遊ばされしかを拜察し奉ると同時に天恩の有難さに感泣の外はない。尙々木伯は兼々、當路の大官中には神祇崇敬に就いての智識乏しきやう認むとの意見を述べ、又一般國民が敬神崇祖の念に遠ざかるを憂へて熱心に神祇院設置運動を起し佐野、海江田、千家、丸山、國重等の同志と共に明治二十三年六月、これを内閣に建議したが、内閣では、神祇院を設置すると外國人が耶蘇教排斥の政策ではないかと疑ひ又佛教諸宗でも獨り神道のみを國教として重視するのではないかと誤解する處があるからと躊躇した。これに對して佐々木伯は

「祖先を尊崇するは皇國の國體にて佛教家も昔時より垂跡の説を立てたる所以にて却つて喜ぶべく外教徒も特殊の國體にて祖先の祭祀をなすには敬意を拂ふ故感觸を害することはあるま

5]

と主張した。政府も強ひて反對はしなかつたが差當り經費の出所が無かつたのと一部の神職中から異論も出た爲め遂に第一議會開會前までには決定を見ず懸案のまま保留せられた。又以つて當時の風潮を察知するに足るであらう。その後、祭祀の事は宮中にて執り行はせられ、内務省には神社局を、文部省には宗教局を置いて今日に至つたものである。

維新以來、西洋の物質文明を採り入れ智識の教育を重んじたことは固より結構であつたが、それと同時に舊來の我國の尊い精神文化の基調たる信仰教育や武道に匹敵すべき眞の體育を忽せにしたことは最大の過誤であつた。それ故、一般の智識は相當に進歩したけれども、情操と意志との鍛鍊がこれに伴つて居ない。一體今日の學校教育なるものは智識の開発を主として居るが、これは生理的に見れば即ち頭腦の發達を促すものである。然るに信仰教育と體育とは主に情操と意志との陶冶であつて、生理的には主として腹、手足等の鍛鍊を意味する。そこで、これ等の三者が恰も鼎の三足の如くうまく調和することに依つて、心理的には智情意、生理的には頭腹手足と全體的に圓滿な發達が遂げられるわけである。従つて若しそれ等の發達に過不及があれば人間として性格的にも生理的にも一種の不具的傾向を帯びることを免れないであらう。

然るに現代の一般教育を見ると、大抵は學問の修業のみを能事とし、一方信仰心の涵養や、昔の武道に當る眞正の體育を重んずる向は極めて少ない。その結果として、今や我日本國民は、果してどれだけ信仰心を有ち如何ほど教育勅語の御趣旨を遵奉して居るかを疑はざるを得ない有様となつて來たのである。されば大正十二年十一月十日 大正天皇より國民精神作興に關する詔勅を賜はるに至つたことは洵に畏れ多き極みであつて、その中に、

「晩近、學術益々開ケ人智日ニ進ム、然レトモ、浮華放縱ノ習漸ク萌シ、輕佻詭激ノ風モ亦生ス、今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ、或ハ前緒ヲ失墜センコトヲ恐ル」と仰せられてあるのを拜しては、我々國民たる者只管恐懼に堪へないではないか。

一體、信仰があれば宗教的智的情操が燃えて學問は自ら出来る、何となれば、恰も前に述べた佐久間象山の實例に於ける如く、究めざれば止まぬといふ熱誠が生れて来るからである。佛教で慈悲から智慧が出ると云つたのは之であらう。今日、大學やその他の學校、試験所、又は會社等に於て夫々専門の研究を行ふに就いても亦同じことである。先づ信仰が第一の根柢であつて、これがあれば、感謝や歡喜を以つて飽くまでも眞理を求め理想を追ひつゝ邁進することが出来るから遂に成功を贏ち得る筈である。若し然らざれば勢ひ御都合主義に流れて世間の毀譽褒貶に煩はされ或は種々の難問題に出會つた場合忽ち躊躇逡巡して空しく挫折してしまふであらう。

私の信ずる宗教

上來、縷々として宗教の大切なことを述べたが、私の謂ふ宗教とは、必ずしも従前の既成宗教のみを意味するものではない。信仰の對象は神、佛、天、或は絶對者等の何れの觀念に據るを問

はず、要は時代に適應せる健全なる新宗教又は既成宗教よりその弱點弊害を完全に除去して毫も現代の科學や道徳に牴觸せざるものであればよろしいと信じて居る。これを換言すれば、宇宙の主宰者ともいふべき超人的超自然的の絶對偉大なる力を信じ、これに憧憬しこれに奉仕し且つこれに導かれて眞理を辿り理想を追ふことに無上の歡喜、満足、感謝、憧憬等を覺ゆる心境のもとに飽くまで勇往敢爲する所に、人生の眞の意義と價値を見出すことが宗教的信仰の本體であると私は信するのである。而して神の目的と相合致するものが即ち人生の目的であるべきで、それは最高理想の文化文明を有する社會を大成するにありと信じ、この目的に向つて何處迄も、感謝しつゝ精進し努力することを何よりの光榮、幸福とせねばならぬと思ふ。

さて宗教に依つて我々の情操が醇化せらるゝことは既に述べた通りであるが、この醇化は量のみでなく亦質の變化であることを見逸してはならぬ。例へば安逸を愉快とした者が労働を好む様に變り、或は贅澤を欲した者が質素を喜ぶ様に變るが如きである。兩者共その欲求する心持は同様であるがその欲求する方向は宗教的道徳的に見て正反對である。この見地より假りに、醇化されたる高尚の情操を正(プラス)の情操、醇化されざる劣等の情操を不正(マイナス)の情操と私は呼んでゐる。斯くその質が正反對であるのみならず、亦その量にも著しい逕庭がある。學者

の區分に從へば、元來人間の情操には宗教的、智的、道德的、藝術的の四方面があるが、就中最も重要なものは宗教的及道德的情操である。智的及藝術的情操も無論必要には違ひないが、少くとも現時の一般の有様では前の二つの方がより一層大切であると痛感される。即ち前兩者の結合せる宗教的道德的情操が人格上最も大切なものである。言ひ換へれば、人格修養上の根本條件たる、「マイナスの情操」より「プラスの情操」へ徹底的に完全に醇化せしむるためには、どうしても第一に、宗教の力に依らねばならぬといふことを、私自身の永年の體驗のみでなく、その他種々の方面から考察して、特に強調せざるを得ないのである。この宗教的情操を基礎とし、これと完全に融合しなければ爾餘の道德的情操も智的情操も將又藝術的情操も到底不完全不徹底たるを免れないと思ふ。従つて道德や科學、哲學や藝術の墮落もこれより起るであらう。

私の見る所では、宗教的訓練も矢張り智育と同じく、成年期に達する迄の間に於て適當にこれを施行しなければ効果が十分に擧がらない。先づ宗教的生活の素地は、幼少の頃より家庭や日曜學校等に於て、神佛を始めとし、皇室祖先等に對して行ふ所の禮拜、感謝、誓約等の宗教的薰陶に始まり、この間に於て神、佛、或は天等何れの觀念たるを問はないが、とにかく或る至高至善の理想者——偉大なる絶對の力の存在を信じこれに憧憬するやうに仕向けてゆくことが大切である。

さうして長ずるに従ひ更に組織ある信仰教育と體育と智育とを常に相伴はしめ、斯くして宗教に依つて與へらるゝ清き精神のもとに進んで善き行ひを爲し、これが右の偉大なる最高者——神佛の心即ち天意に叶ふ所以であると信じ、之に近づき之に一致するやう精進努力することに於て自ら非常の愉快を感じ感謝を覺えるといふ氣分を養ひ育て、ゆくやうに絶えず情操醇化の方法を講ずることが肝腎である。信仰に生くる者は「神佛、我と共に在す」の觀念に終始するが故に、常に敬虔眞摯の氣分に溢れ、その行爲には毫末も表裏が無い。只管、神佛の事業に参加し得るの光榮に歡喜し、至高至善の目的に奉仕するの感激に燃えてゐる。自我の尊嚴は此處に存し人格はこれに據つて價值づけられねばならぬ。それと同時に、この自己を生成し化育した宇宙自然社會環境に對しては當然、感恩の念を生じ報謝の責任を感じなければならぬ。この精神は臆て人間相互間の敬愛融和の源となり、何事にも何物にも誠心誠意を以つて臨み、苟もおろそかにしないといふ態度を失はしめぬこととなるのである。人類の發展も、社會の進歩も總てその根本要義を此處に置かなければ、決してそれを期待することは出来ないと思ふ。

結

論

萬世一系の我 皇室に於かせられては、國民に率先して神祇崇信の模範を垂れさせられ君臣相愛の大義を布き給へるは洵に世界無比の皇道と申すべきである。

西洋諸國に於ても、斯かる徳治主義の皇道を以て理想とすることに學者の説は一致して居るけれども、これを實現することが出来ない、多くは霸道即ち力を以つて他を従へ、表面纔かに仁を粧うて居るに過ぎぬ。従つて祭政は無論一致して居ない。この事實より見ても彼と我とは根本的にその國體を異にして居るのである。斯ういふ歐米の國柄に於て謂はゆる階級闘争などの起るのは強ち怪しむに足らないが、これを以つて直ちに我日本をも律しようとするのは非常な謬見である。日本はそれ等と正反對に、本來、階級不闘争の國として出来上つて居るものと謂へる。即ち君臣父子、萬民同胞の一家族國（皇室は總御本家、臣民は分家や別家、そして朝鮮、臺灣等は養子入籍したものと考へてもよからう）の下に至誠以つて互に敬愛すべき間柄なのである。即ち親子、兄弟、姉妹、夫婦、その他肉親は勿論、師弟、主従、雇傭主と雇傭人、地主と小作人等の關係に至るまで歐米と異なり、同様の美風を保持して來たのである。それ故何處までもこの世界に卓絶せる固有の美德を維持して相和し相扶け、これを土臺として益々共存共榮の實を全うすると共にこの無比の國體を感謝し擁護しつゝ、我國獨特の文化を築き上げ、進んで世界人類のために

盡すといふことが我々大和民族の大使命でなくてはならない。然るに、この本領を打忘れて霸道國家の聲に倣ひ、進化の道程を闘争に求めんとするが如きは斷じて「日本人の墮落」である。

外國人でも、眞に心ある者は、大和魂、武士道、忠孝、夫婦或は師弟の情誼等の如き日本固有の美德には到底他國人の企及し難い深奥な根據のあることを認めて驚異の眼を見張り私かに羨望すると共に之に見倣はんとさへして居る。現に米國では我忠孝の精神を高調するの傾向を生じつゝあることは見逃すべからざる事實である（雜誌大日第一號建部博士の論文参照）。即ち、これ等の徳風は偏に我建國の大精神、大理想に則り我祖國の神聖に對する熱烈なる信仰に基いて、傳統的に育て上げられた國民精神、國民道德の結晶である。畢竟、信仰なくんば徳育は意味をなさない、信仰なき者には教育勅語の如き萬古不磨の聖典も到底これを遵奉實行することが出来ないであらう。唯單に教育勅語を暗記したり、その字句の解釋に通ずるのみでは相濟まない、宜しくこれを日本國民の聖典として日々實行しなければ措かない、さもなければ罰が當るといふ觀念を得るに至るまで訓練することが我國民教育の根本問題であつて、それにはどうしても信仰教育が基礎とならねばならぬ。これに依つて、神の國日本としての我國體の觀念を十分に徹底せしめ、この尊い宗教的情操の上に立つて凡ゆる方面に活動し得る「神民」を養成することが第一義である。

然るに輓近に於ける我教育は、既に度々指摘した通り、この大切な根本義を等閑に附して寧ろ枝葉の問題に馳り、ために天下の青年子女を騙つて先づ權勢に就き名利を追ふの風をなさしめつゝあることは甚だ憂ふべき傾向である。嘗て獨逸に於て日本の一留學生が「神をも畏れない」と廣言して自分の無信仰を表白し、多數の獨逸學生から「彼は氣狂ひだらう」と嘲笑されたと云ふ話もある。斯くの如きは全く如上の誤れる教育に依つて生れた憐むべき畸形兒に外ならない。若しも斯かる畸形兒の多數が謂はゆる智識階級として國家の中堅を占むるとせば、その前途は洵に危い哉といはねばならぬ。我々日本國民は今正に三省して上下共に一大覺醒を要すべき秋である。

これを要するに、何處までも我國體の尊嚴を自覺し、祭政一致の徳治主義のもとに、敬神崇祖の大信仰を體し、堅き信念を以つて教育勅諭の御趣旨を遵奉し、飽くまで眞理と理想のために、感謝しつゝ邁進することが、我々日本人としての必至の公道であると私は信じて居る。

終に苴み 明治天皇の御事に關して、田所美治氏、並びに 明治天皇の御代に侍従として永く仕へられし子爵日野西資博氏が何れも種々の有益なる資料を興へられたことに對し、深厚なる感謝の意を表する次第である。(昭和六年四月)

生活の更新と禁酒

新年を迎へて、遠大な計畫を樹つることも固より結構であるが、この機會に、卑近な身邊の弊習や缺點を清算して、日常生活の改善を期することも、決して無意義でないと思ふ。その意味から、先づ禁酒の實行を促したい。正月早々禁酒論を持出すのは、めでたい祝盃の手前、やゝ奇矯の感もあるが、覺悟を新たにして健全な生活に入るには、却つて無二の好機と思ふ。元來、種々の年中行事や冠婚葬祭等に酒が附物となつてゐるのは、傳統的な儀禮の形式として、強ち咎むるに及ばないけれども、今日からこれを見れば、實は酒に對する認識の足らなかつた過去の遺風に他ならぬと謂へるのであつて、既に近代の科學は、はつきりと酒を排撃してゐる以上、とにかく、酒を飲むといふことは、明かに人類の惡習であり、これを改むるに毫も躊躇すべきでない。飲酒家は今なほ種々の理窟をつけて酒を辯護するけれども、それ等は要するに、根據の無い俗説か、御都合主義の我田引水論に過ぎないのである。例へば、酒は疲労を癒し元氣を恢復すると稱してゐるが、實は正當に疲労を癒すのではなくて、疲労感を麻痺せしむるのであり、氣が晴れて元氣を恢復した如く感ずるのは、かうした中樞神經の麻痺に因つて羞恥心、自制心等を失ひ、不

自然な興奮と錯覺とに驅らるゝためであつて、謂はゆる一杯機嫌の後には却つて疲勞を倍加するのが事實である。しかも飲酒の結果は次第に身體の組織細胞を變質劣化せしめ、諸病の原因となると共に、この害毒は子孫にまで遺傳するを免れない。又酒は寒さを防ぐといふが、これも謬見であつて、酒を飲むと神経が痲痺して血管が弛緩し擴大する故、血液が皮膚の表面近く流るゝから、一時的に溫暖を感じるのである。一體、寒い時に皮膚の血管が縮まるのは、内部の熱を保護する意味なのであるが、飲酒すれば逆に血管を膨脹し表面に露出させて、體温の放散を多くすることとなる。従つて酔醒めには前よりも一層寒くなり、感冒や肺炎に罹つたり或は凍傷凍死を起したりするのである。彼の北極探検等の際に酒を嚴禁してゐるのもこのためである。而して斯かる事實に鑑みると、今や嚴寒の滿蒙に出征せる我將士の勞を犒ふため酒を慰問品として贈ることは大きな間違ひではあるまいか。斯くの如きは、折角の吾々の眞心も却つて將士に仇となるの虞があらう。私はこれらに就いても切に當局者並に世人の注意を促さざるを得ない。

酒の害は、單に生理的のみでなく道德的にも憂ふべきものがあるのは既に周知の通りで、例へば酩酊の結果、種々の醜態を演じ、或は不測の危険を招き、更に飲酒の惡癖が昂じて遂に家庭を破り、産を傾け、果ては忌はしき犯罪に陥る等の事例は決して稀らしくない。酒のため、如何に多

くの悲劇を生み、又有爲の人材を傷け、或は失つたかを思へば、酒は實に人類の敵である。

我國に於ても、未成年者の飲酒は法律を以て禁じてある。然るに、今日、高等學校、專門學校乃至大學初年級等の學生々徒にして、未成年者でありながら、飲酒を敢てする者が少なくない。これ明かに國法を犯すものである。斯かる風習を放置する時は、漸次彼等の體格を惡化せしむるは勿論、益々その品性を墮落せしめ、總て立社會の後、例へば彼の選舉法違犯や贈收賄等の如き不徳義を、世間並として格別意に介せざるにも至るであらう。畏くも、教育勅語の「國法ニ遵ヒ」と仰せられし御趣旨に照らしても恐懼の極みである。又假令、成年以上の者でも、飲酒の弊害は右の如く顯著であるから、努めてこれを慎むべきであるのに、丁年に達すれば恰も當然の權利なるかに心得て忽ち酒盃に親しむ青年達の少なくないことは全く寒心に堪へない。更に甚しきは、これら未成年者の教師たり先輩たる人々が、彼等と會飲して酔興を俱にし自ら恥づる色なきことで、しかもそれが、最も清純なるべき校友會、同窓會、又は同郷會等の席上に於て屢々見受けらるゝことは實に言語道斷である。殊に智識階級たるそれらの人々にして、よもや酒の害を知らざる筈なく、知つてしかもこれを禁じ得ないのは、恐らくその情操と意志とが劣弱で實行力が乏しいためと見なければならぬ。果して然らば、こゝにも亦、毎度述ぶる通り、知識の詰込一方に走つて情意の鍛鍊を忽せに

せる我國近代教育の缺陷を暴露してゐるものと謂へるであらう。而して情意の鍛錬の足らないのは、これも再々云ふ通り宗教的信仰を閑却せる結果である。若しも信仰心があるならば、禁酒、禁煙こそ神の道に背かぬ所として、満足と感謝の裡に進んでこれを實行するやう純潔な情操と鞏固な意志とが働く筈である。だから、「宗教なき教育は悪魔の教育」と英國のウエリントン將軍も喝破してゐる。右の先輩、識者にして、苟も國家のためを思ひ將た後進の前途を慮るならば、自ら率先して禁酒、禁煙の範を示し、斷乎としてこの弊風を排除すべく努力するのが至當ではないか。

畏くも 今上陛下には、堅く禁酒禁煙を御遵守あらせらるゝ由洩れ承つてゐる。寔に感激に堪へない。これぞ我々國民の日々奉戴すべき最高の大模範であると申し上げねばならぬ。又現代の文明諸國に於ける眞に尊敬すべき學者や經世家は、殆んど皆禁酒家である。近くは昨年來朝した米國の碩學ケネリー博士も熱心なる禁酒黨であることを私に告げ、又博士は嘗て故エチソン翁の助手を勤めてゐたが、翁も亦絶対禁酒の人であつたことを併せて語つた。

要するに、今日では、もはや、人類社會から酒を驅逐することに議論の餘地は無い。たゞ斷行の一事あるのみである。酒の無い生活こそ、ほんたうに健全な合理的な人間の生活であると謂へる。乃ち年頭に當り、生活の更新は先づ禁酒よりと強調する所以である。(昭和七年一月)

移殖民精神と信仰

(教化振興會主催滿蒙講習會講演)

信 仰

移殖民精神の根本は信仰にありと云ふことを御話する積りであるから、先づ信仰に就て申述べて見たいと思ふが、それには人格と云ふことから論じてゆかねばならない。皆さん御承知の通り、眞の人格者とは智情意の三者が圓滿に調和して發達せる人のことである。而してこれ等の要素の根據を生理的な方面から見れば、智識は大脳皮質の發達によるものであり、(情操とは、心の感じであるが、この情操は主に腦、脊髓、神經、血管、内臟(機關並腺)及大小筋肉(主に表情筋)の鍛錬によるものであり言ひ換へれば所謂肚——即ち腹の鍛錬に外ならない。又意志は實行を意味するものであるから、これも主として腦、脊髓、神經、大小筋肉等であるが特に手足の鍛錬によらねばならぬ。故に眞の人格者とは頭、腹、手足の三つが、過不足なく圓滿に調和して陶冶されてゐる人のことである。これについて解り易い一つの例をとつてお話してみよう。こゝに富豪の家

の少年があつて、郊外を散歩してゐると、丁度その附近で風を上げて遊んでゐる幼い子供があつたが、その風が木の枝に引懸つたので、どうかあの風を取つて下さいとその少年に頼んだとする、この場合、頼まれたところの少年の人格即ち智情意の三者が如何様に働くか、無論この三者は同時に働くのであるが、假りに分けて考へてみると、風を取つてやるのが道德である、年少者を愛し助けるのは人の道であると云ふ分別——即ち智識が働き、どうか取つてやりたいものだ云ふ同情心——即ち情操が働く。そこでそれを取つてやるために木に登らうとするのであるが、富豪の息子のことで、幼時から大事に育てられ、斯うした労働的なことは一切やらされつけて居ないので手足が震へてどうしても登ることが出来ない、つまり手足の筋肉が鍛錬されて居ないため、風を取つてやりたくてもそれが出来ないのである。即ち智識と情操とは當り前に働くけれども意志の力が足りない。そこで、これでは完全な人格者と云へないわけである。かう云ふ具合で、とかく富豪の子弟には意志の弱い實行力の乏しい者が多い。つまり彼等は手足の鍛錬を経る機會の少い生ひ立ちをなすからである。かう云ふ人格の状態を假に繪で示すとすると、智識は相當にあるから頭が大きく、情操も豊かであるから腹部も大きい、意志の鍛錬が足りないため手足が不釣合に小さいと云ふ、甚だ奇妙な恰好の人物が出来上るわけである。又高等教育を受けた者は理

窟を言ふけれども心に温味がなくて實行力の乏しい人間が多いと云ふ批評を聞くが、これは智識のみが發達して一方情操と意志との鍛錬が缺けて居ることを意味するもので、繪を以つて示せば、頭だけが大きくその他の部分が小さい一寸法師のやうな姿となる。さうしてかう云ふ人間が高等教育を受けた者の中に多いと云ふことは、畢竟我國の教育は智の方面に偏り情意の陶冶を忽せにして居ると云ふ大缺陷の證據なのであるから、我々教育者として、この點に對し誠に相濟まぬと云ふ感を禁じ得ない。それ故、私は及ばずながらこの方面に留意し、京都大學の學生なども、努めてこの情操と意志との鍛錬を興へるため色々な勞作を勧めて居る。例へば京都御所の掃除だとか、大學内の美化作業だとか、禁酒運動等の如きそれである。又御承知の通り私の方の専門は電氣工學であるから學生は研究上色々な實驗を行ふので、これらもやはり情意の鍛錬に役立つことは云ふまでもない。かう云ふ事が即ち小西博士の主張される勞作教育の一端に外ならないと思ふ。併しこの際嫌々ながら勞作するのではない。先程述べた風の場合のやうに、どうかして取つてやりたいと云ふ清い心で實行するのでなくてはならない。親の肩を叩くにしても、嫌々ながら叩くのでは駄目だ、孝行をするのが嬉しい有難いと感じてやるのでなければいけない。併しこの感謝の念を起すに至るまでには餘程の鍛錬を要するが、親には孝行を盡すべきものであ

るからこれを嫌と思ふのは鍛錬が足りないためであると云ふ觀念で絶えず修養を怠らないならば遂には右の感謝の域にまで到達することが出来るであらう。斯くの如く同じ働くにしても、喜んでやるのと嫌々ながらやるのとはその性質が正反對であるから、教育者たるものは特にこの點を考慮し注意する所がなければならぬ。智情意三者の關係は大體かう云ふものである。

それから宗教とはどう云ふものか、これにはいろいろ定義があるけれども、要するに、神と人との間の道徳であると謂へると思ふ。我々の普通謂つて居る道徳なるものは人と人との間の倫理的行為であつて、一般に神までの事は考へられて居ない。宗教は人と神との交渉であるが、その内には人と人との間の道徳をも包含して居ると見て貰ひたい。それから信仰と云ふ事にも、色々の定義が下されるだらうが、解り易く言へば、神を信することによつて生ずる、神に對する道徳的狀態であると申してよからうと思ふ。例へばこゝに學者が居て、假に哲學上からどうしても神と云ふものがなければならぬと云ふ理論的結論に到達したとしても、これでは未だ信仰でない、たと神と云ふものがなくてはならぬと云ふ事が理論上明かにされただけである。眞の信仰と云ふものは神との感應道交が行はれる、換言すれば神とお話の出来る状態にならなければならぬ。實際に神とお話が出来ると心的状態にまで到達した人であつてこそ始めて信仰があると云へるのであ

る。だから幾ら哲學を研究したところで必ず信仰が得られるとは限らない。信仰は體驗であるから、理窟だけを知つたのでは信仰とならないのである。それから信念とは統一ある信仰生活を實行する上の原動力であると云つてよからう。かう考へて來ると、信仰と云ふものにもやはり智情意の三方面がある。これを表で示すと次のやうになる。



さうして私共の今まで主に學んで來たのは自然科學の方面であるが、人間として無論哲學や人文科學の方の智識も必要である。殊に上來述べたやうに情操意志の鍛錬は極めて大切であるから、我教化振興會では健全な信仰を興へる爲め、主に情意の鍛錬に努力を傾けてゐるのである。

一體、科學や哲學は、眞理とか理想とかは何であるかを教へる學問であるが、我々はこれを知るのである。そこで宗教が人生に必要な缺く可からざるものとなつて來る譯である。宗教あつてこそ始

めて永續的實行力が生れ眞理や理想の實現に向つて進む事が出来るのである。これによつて宗教のない教育は駄目であると云ふことがお解りになるだらうと思ふ。よく宗教なんか要らぬものと云ふ考へを有つて居る人がある、學者の中にさへもそれがある。併しこれは大變な間違ひであつて、たとへ倫理道德を學んでも宗教心がなければ御都合主義に流れ、多くの場合永續的の實行が伴はないから情意の鍛錬は出来ないのである。それ故、宗教によつて常に清き心を保ち實行を缺かさぬやうに仕向け、以つて情意の鍛錬を與へることが是非共緊要である。

次に經驗と體驗と云ふ事について申すと、經驗とは五官に感じて得た結果を云ふのであつて、その結果を組織的に研究する學問が科學である。赤い物を見れば赤いと感ずる、これは即ち五官の一つである目の感じによる經驗である。ところが、斯様な五官の感じの外にもう一つ心の感じと云ふものがあることを考へなければならぬ。即ち我々の意識に感ずることである。人はこの心の感じを開發して行くことが非常に大切である。然るに我國では特に維新以後に於て、この事が甚だ忽せにせられて來たことは最も遺憾とすべきである。この心の感じ、即ち意識に感じた結果が體驗となるのであつて、それに對する學問として哲學が生れる。これについて思ひ起すのは彼の大發明家エチソンの生ひ立ちである。エチソンの母親は、彼を育てるのに、十歳位までの間

に非常に有効な經驗と體驗とを與へるやうに努めた。エチソンの母は頗る信仰の厚い人であつて家庭も從つて宗教的雰圍氣に満ちてゐた。この母の薰陶のもとに、エチソンは幼少の時から、好きな物理化學の本を讀むと、必ずその實驗を怠らなかつた。例へば酸素と水素とが化合すれば水になるといふことを讀むと、直ぐに酸素と水素とを用ひて水を作る實驗を行つてみる。かうして常に實行の經驗を積んでいつたのであつて、これは信仰を基礎とせる母の教育方針の然らしめた所であらう。尙又この幼年時代から既にエチソンは、勞働することは容易で而も愉快であるといふ尊い心の感じ即ち體驗を有つやうに育て上げられたのであつた。これに比べると、今日の我國ではとかく斯うした實驗方面が不十分であり又、働けとか勉強せよとか教へるけれども、その勉強すること、働くことが愉快で且つ容易であるといふ體驗を得るやうに仕向けてゆく教育が閑却されてをりはしないか。維新前の學者は信仰と武道とを重視した、だからこの尊い體驗を失はなかつたが、維新後は不幸にして智識偏重の教育に走つた結果實行の伴はない學者、單なる所謂物識が出來た。而も斯く實行の伴はないのが當り前のやうになつて來たことは洵に遺憾至極の有様である。經驗と體驗とは又酒の例をとつて見ても解る。酒を飲むと五官の一つである舌には誰しも苦がいと感ずるが、心の感じになると別だ。即ち下戸はこれを不味いと感ずるが、上戸は美味

いと感ずる。斯様に舌の感じ即ち經驗は等しく苦がくても心の感じ即ち體驗は正反對のことがあり同一とは限らない。又例へば赤い物を見た場合、色盲以外はその經驗は誰も同一であるが、心の感じは人によつて或は綺麗だと思ひ、或は嫌な色だと感ずる。斯くの如く體驗に於ては人によつて其の性質を異にするのみでなくその大小強弱にも差異があるから、この點は教育上特に注意すべき事柄である。とにかく、この體驗即ち心の感じは人によつて千種萬別である。そこで私は常から之を二つの部類、即ち假りにプラスの情操とマイナスの情操とに分けて考へてゐる。(後に之を詳説する。)

上述の如く人に依つて心の感じは種々異なるが、併しこれは生來固有なるものではなく、修養即ち道德的實踐の如何に依つて次第に生理的的心理的變化を起しその體驗に差別を來すものであつて、この結果人格上に大きな相違を生ずるに至るのである。然るに我國では不幸にも維新後の教育に於てこの道德的實踐を忽せにした結果、智識階級の人々に、とかく情操と意志との鍛鍊が足らない。此の情意の鍛鍊は信仰教育と眞の體育とに依つて與へられるものであるが、茲には主に信仰教育に依る情操の陶冶に就いて述べてみたい。

一體心の感じは色々の鍛鍊に依つてこれを變へてゆくことが出来る。例へば家賃は安いが電車

の音が騒しく聞えるから嫌だと思つてゐる家でも、心の感じの鍛鍊に依つてこれを苦にしないやうに體驗を導くことが出来るものである。又玄米を食へば身體の爲によいけれども美味しくないと言ふのはやはり體驗が足りないからである。初めは不味く感じて之を食するに眞心さへあれば終には美味しくなつて來るものである。又平素神を拜んだことのない人は手を合せて拜むのが誰かに笑はれはせぬかと氣になつて神の方へ心が向かない。けれども習慣的に神を拜むことを繰返してゐると、終にはきまりが悪いなどいふことを感じないのみか、却つて拜まなければ氣が済まぬといふ感じになつて來るであらう。斯くの如く體驗を重ねることに依つて次第に生理的的心理的變化を起すものである。生理的的心理的變化とは、例へば悲しくなると涙が出たり顔が蒼くなつたりするが、悲しくなるといふことは心理的變化であり、涙が出たり顔が蒼くなることは生理的變化である。これが同時に起るから生理的的心理的變化と稱するのである。

信 この生理的的心理的變化は、今まで述べた所によつて明かなる通り、二つの方面に分類することが出来る。即ち一つは悪化で、一つは醇化である。つまり修養すると、嫌ひなことでも好きになれる。例へば働くことの嫌ひであつた者が、働くことを非常に愉快に感ずるやうになる。前述した通りエヂソンは十歳になるかならぬ頃から既に、働くことが愉快で而も容易なことであるとの

仰

體驗を得るに至つた。ところが此の頃の人の多くは享樂主義に走り、働くのは嫌だ、なるべく樂をしてゐて餘計に金が欲しいと考へるやうだが、之は自己中心の生活によつて生ひ立つた結果で定に卑むべき心の感じである。之を正反對即ち一八〇度異なる尊い心の感じに變へなければならぬ。それには自己中心の生活と正反對なる神中心の生活に依るにある。言葉を換へて云へば信仰心を有つやうに人格を修養し向上せしむるにある。維新前に於ける人格修養の眼目は信仰心を有つにあつたが、維新後に於ては殆んど之を閑却するに至つた。先年私は某々學校の野球試合を見物したが、双方の應援團とも敵の選手が失策をすると旗を振り太鼓を鳴らして喜ぶのを目撃した、これは實に同情のない態度といはなければならぬ。妙技を演じた場合に喜ぶのなら解つてゐるが、他人の失策を喜ぶとは實に劣等な情操の現はれであつて、品性の下劣なことを示すものである。かういふ習慣を認容して置くことが抑も教育上の誤りなのであつて、不知不識の裡に生徒達は生理的的心理的惡化を來し、人格を低下せしむるのである。全く以て遺憾なことだと思つた。又或る高等女子専門學校を參觀したことがあつたが、その時にも、先生が何か失策をすると女學生が揃つてくすくす笑ふ、實に慎みのない失禮な話ではないか。かういふことが繰返されると生理的的心理的惡化を來して次第に下劣な品性の人間となるのである。しかもこれを學校側で戒める

こともなく放任してあるといふことは實に思はざるの甚しきものであると感じた。ましてそれが將來教育家として立つべき人材を養成する學校等であるとしたならば一層憂慮すべきことではないか。更に又高等専門學校の學生乃至大學初年生あたりの多くは未丁年者であるが、これらの學生の中、絶対に酒や煙草を排してゐる者が果して幾パーセントあるであらうか、甚しきに至つては、同窓會や同郷會等に於て先生や先輩が一所になつて彼等未丁年者に酒をすゝめる如き會合さへあるやうだ。未丁年者が酒を飲むことは法律によつて禁じられてゐるのみか、畏れ多くも教育勅語に「國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ」と仰せられてあるにも拘らず、この國法を無視し勅語に違反することを敢てして相濟まぬとも感じないかのやうな御都合主義の現状では、益々生理的的心理的惡化を來し人格を下等に導くのみである。斯くの如き状態のままに放置したならば、將來これらの學生が社會に立つた後に於て、どうして彼等に品性の高潔なることを期待することが出來よう。斯かる事實が若し我國教育の現状であるとしたならば、その教育たるの意義が何處にあるであらうか。神の與へたる眞理や理想をどこまでも實行しなければ止まぬといふ情操の醇化と意志の鍛鍊とを智育と共に與へることこそ眞の教育である。即ち自己中心の生活の代りに之れと正反對の神中心の生活を遵奉せしむることが最大の眼目である。これ即ち人間性の醇化たる靈性や神性を養

ふ宗教教育の缺くべからざる所以である。

こゝに一言しておきたいのは、我國では 天之御中主神を天地の主宰者とし、 天皇を神の御延長と信じて現神或は現津神と稱へ奉つて居る。故に神中心の生活と 天皇中心の生活とは我國に於て相合致し全く同一であるといふことを忘れてはならない。

然らば前に述べて置いた情操のプラス、マイナスは何に依つて區別するかといふに、簡単に申せば次のやうに分けることが出来る。先づ人生の目的とは何であるか、それは神の目的に合致するものでなければならぬ。然らば神の目的とは何であるか。この宇宙には一つの大靈があつて、これが全宇宙を統一支配してをり、この大靈を普通に神と稱してゐる。この神によつて統一されてゐる宇宙全體を神の人格的表現と見ると、我々萬物は、森羅萬象より微塵に至るまで、皆この神の一部分と見て然るべきである。解り易い例で云ふと、一個の人間の身體は無慮數百兆の細胞から成つてゐるさうだが、その各細胞はその人間のために働き、彼によつて統一され彼の目的と各細胞のそれとは同一である。これと同じ様に、この人間に相當するものを神とすれば、各細胞に當るものは我々萬物であり、そして我々は神の目的に従つて夫々その任務を盡してゐるのである。而して我々人類が神の目的に副ふための努力としては、要するに最高理想の文化を有する社

會を完成するにありと信するのである。之れ、取りも直さず人生の目的そのものでなければならぬ。即ち、我々人間の最後の目的は互に協同一致して最高理想の文化を有する社會を具現すると云ふことに外ならない。我々は各々その性能に従つて種々の職業に従事してゐるが、その職業の如何に拘らず、何れも右の人生の目的即ち神の目的を達成するために應分のお手傳ひをさせて貰ふの光榮を荷うてゐるものであると信ぜざるを得ない。又宇宙の萬象萬物は假令塵芥の如きものと雖も、やはりこの目的を達成する爲に提供せられた大切な材料であると見るのが至當であらう。故にこれ等の材料を決して無駄にせず最も有効に利用しなければ相濟まぬわけで、従つてその適當な處理法が研究せらるゝことにより、こゝに經濟學とか其の他種々の學問が起り、その結果によつて得たところの眞理はどこまでも遵奉實行されなければならぬ次第である。例へば科學的研究によつて酒の害毒が明らかとなつた今日、我々人間はこれを飲まないことに依つてその害を免れ以て能率良く働くことが神の道に叶ふ所以であるといはねばならない。斯く神の與へた眞理を遵奉し實行するは勿論、斯くすることに於て感謝と喜悅とを感ずるといふ體驗に到達するのが即ち信仰を得たと稱すべきである。斯くの如く神の目的即ち人生の目的を達成する上に効果のある情操がプラスの情操であり、これを妨げる所の情操がマイナスの情操であると私は區別してゐる。

そこで今労働といふことを考へて見るに、これこそ神の目的を達成する上に是非共なければならぬもので、働かずしてその目的を達成することは到底出来ない。だから働くといふことは神中心の生活（即ち我國では 天皇中心の生活も同じ）に叶ふもので、人生の最も意義あることであるが、これに反して、働きたい、樂をしたいといふことは自己中心の生活から起る享樂主義であつて人生の意義を没却するものである。斯く働くことに於て神の目的が一步々促進出来る以上、眞の人間たる者は必ず労働を神聖に且つ愉快に感すべき筈である。エチソンが幼少にして體驗したことも全くこの眞理に外ならない。然るに安逸怠惰を好むといふことは、體驗の修養を忽せにした結果、情操の悪化を來すに至つたもので、換言すれば、人間は本能の儘に放置するとその情操を醇化することが出來ず、却つてこれを悪化せしむる結果となるので、どうしても如上の修養體驗を積み以て情操の醇化を圖ることが根本の要件である。

我日本の國民道德の淵源は云ふまでもなく惟神の道より出づるものであるが、これは勿論原始的な本能の儘のものではなく、本能を制御し醇化して後、得らるゝ所の高き道德でなければならぬ。更にその後儒教や佛教が這入り又キリスト教等も加はつて時代と共に我國國民道德を進展せしめつゝ今日の状態に達したものであるが、明治維新以後に至り物質文明と科學的智識の吸収に急

なる餘り大切な情意鍛鍊の原動力たる宗教を輕視するの風潮を生じたことは我國教育界の一大缺陷であると云はざるを得ない。即ちマイナスの情操をプラスの情操に醇化し意志を強固ならしむにはどうしても宗教の力に依らなければならない、然らざれば兎角御都合主義に陥り易いから到底駄目であると思ふ。この情操の醇化は或る機縁によつて急激に來ることもあるが普通にはやはり不斷の修養によつて徐々に達成するのが順當である。孔子などはだん／＼に所謂漸悟した方で、「七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えず」と言つてゐる。又大惡人が一朝にして極善の人に變るなど所謂忽然大悟徹底するといふのは即ち急激な變化であつてこれを頓悟と稱せられてゐる。斯く二つの筋道があるわけであるが、何んにしても、その根柢は宗教の力に依らなければならぬ。これを國民教育の根本方針として須らくプラスの情操を涵養體驗せしむるやうに仕向けてゆくことが現在に於ける最大急務であると信ずる。世には往々宗教に依らずとも情操の醇化は可能であると考へてゐる人があるけれども、それは到底不徹底であつて、宗教なければ確乎不動の信仰信念を得ることなく、従つて前述の通り兎角御都合主義に流れ、決して完全に情操の醇化を遂げることは出來ないのである。この修養を忽せにし、尊い心の感じを缺いてゐる人は、例へば、些細なことのやうだが、平氣で道に痰を吐いたり、或は煙草の吸殻や反古屑を捨てたりして

少しも相済まぬといふ感じを起さないのである。又この頃ノー・ネクタイといふことが一部に流行するが、これを爲す人はその下品であることを厭ふ心の嗜みが足りないので、従つて人に對して禮儀を缺くことを氣付かず平氣でゐられるのである。つまりそれだけ情操が劣等なのである。斯くの如く他人に對する無作法や迷惑などを一切構はず自分さへ都合がよければよいといふやうな自己中心の生活を爲す人がだん／＼多くなつて來れば、その國の民族性は次第に低下して行くこと明かである。元來我日本人は優美な民族であり、且つ禮儀正しい國民性を有して居つたことは世界に於て優れた長所であつた。然るに維新後になつて、だん／＼歐米の短所や缺點までも眞似しだした結果、近い例がアツパツパを着て大道を濶歩したり、ノー・ネクタイや上衣なしで外出したりして平氣でゐるなど、折角我祖先が築き上げて來た、立派な文化や禮儀を破壊するに至つたことは實に相済まぬ次第ではないか。京都帝國大學文學部の某教授が先年洋行から歸られての感想に、日本の學生ほど贅澤で生意氣なものは他の文明國にはないと言はれたのも、この情操の缺如せる事實を數かれたもので、畢竟日本の近代教育がこの尊い心の感じを閑却した罪である。又小西博士の説かれた敬信愛といふことも、つまり尊い心の感じを指すものに外ならないのであつて、即ち神を信仰するといふ所から、神を敬愛するの情を生じ、敬虔眞摯の氣分に満た

されるのである。而して親に對する敬愛心は孝、君に對するそれは忠であること申すまでもない。斯く何れもその大本は同一であるから、どうしても先づこのプラスの情操を養ふことを第一としなければならぬ。

我國に於ても維新前までは一般に宗教が重んぜられ又實際に信仰心があつた。例へば幕末の英傑勝海舟の如きも、日蓮宗を信じ且つ四ヶ年間禪に參じ又武道を鍊り、和漢洋の學にも通じてゐた。即ち智情意三者の發達を兼備したのである。又佐久間象山の如きも、三十四歳の時僅か八箇月間で蘭語の稽古を仕上げたのであるが、翌年友人に與へた手紙の中に、蘭語の稽古を始めたのは天の靈寵による結果であつて、決して唯物好きの智識慾からではないと、述べてゐるのを見ても、或は又伊藤仁齋が、千載不傳の孔孟の教を發見することが出來たのは一に天の靈寵に外ならぬと感激してゐるのも、皆等しく内に確乎たる信仰を體得してゐた事實が窺はれるのである。申すも畏れ多いことであるが、明治天皇には非常に堅き御信仰を有たせ給うた御方と私は拜察する。天皇の御天資の英邁に渡らせられしことは申すまでもないが、明治維新の御偉業の最大原動力は、實にこの偉大なる御信仰の力であつたと私は確信して疑はない。

目にみえぬ神の心に通ふこそ

人の心のまことなりけれ

この御製は即ち神様と感應道交の出来るやうでなければ眞の誠のは發揮されないといふことを仰せられたものであると拜誦する。又

ちはやふる神の御代よりひとすちの

道をふむこそうれしかりけれ

これは神ながらの道を踐み行はせらるゝことが最も御愉快であるとの御意に拜誦する。この二つの御製によつても、如何に 明治天皇の御信仰が深く篤くあらせられたか、窺はれるのである。

信仰のない人は情操の醇化が出来てゐないから、物事に對して恰も色盲患者が色彩に對すると同じ有様である。一例を擧ぐれば、これは實話であるが、或る學校の先生がその弟子に向つて、世間では楓の紅葉が非常に綺麗だと言ふけれども、自分はさう思はない、寧ろ銀杏の黄葉の方が美しく見えると云つた。その弟子は、銀杏の黄葉もなか／＼美しいけれども、やはり世間並に楓の紅葉が一層綺麗だと思つて居たので、先生の觀賞眼は随分ひねく^くれて居ると私かに驚いたが、何ぞ知らん、その先生は色盲で、その楓の紅葉が汚い灰色に見えたのだと云ふ事がわかつた。即

ち五官の一たる眼が赤色の感覺を缺いて居る結果である。この誤りを救ひ體驗を與へるにはその色盲を治すより外に途はない。心の尊い感じを缺いて居る人間の態度も全くこれと同様で、その根本治療たる信仰を與へられるまでは全く反對の行爲や結論に走つて自ら氣付かない。例へば何處でも構はず痰を吐いたり、紙屑を棄てたり、或は不作法な事や薄情な事などを顧みない人を始めとして、赤化思想の唯物主義者は大小の相違こそあれ、皆心の尊い感じ即ち高尚な情操の不足を來してゐるからである。故にこれを治すには宗教の力によつて信仰心を養ひ情操の醇化を與へるより外に到底至難である。然るに、現代の日本には斯様な心の色盲患者が非常に多いと謂へる。それは即ち信仰教育が足りない結果である。

そこで宜しくこれを覺醒せしめ信仰心を涵養させなければならぬ。それには子供の時から信仰教育を施すことが必要である。さうしても猶且つ信仰心が起らず改善する事が出来ない場合には、やがて神の試練が下るであらう、即ち神がこれを戒むるために種々の苦難を與へるに至るものと思ふ。これが國民の頭上に色々の困難となつて落ち來る次第であつて、現時の經濟國難、外交國難、思想國難、就職難等は恐らくそれであると考へて差支へない。

要するに、人間の目的は人格を向上せしむるにあり、それには先づ信仰心を養はねばならぬと

思ふ。然らば西洋では如何にして子供に信仰心を與へてゐるか。例へば英國の家庭では母親が子供を寝かして置いて目をつぶさせ、『お母さんの姿は見えないでせう、けれども、お母さんは斯うしてあなたの傍にちゃんとついて居ます。それと同じやうに、神様は、目には見えないけれど、いつもあなたの傍においでになり、あなたを愛し、あなたを守つてゐて下さいます。だから、あなたは一人でも決して淋しく無い筈で、安心してお寝みなさい』と云ひ聞かせ讚美歌でも歌ひながら子供を眠らせる。斯うした事を毎日繰返して居る中に、それが次第に深く子供の心にしみ込み、子供は最も信ずる母親の教へであるから、本當に神を信ずるやうになり、又母子の愛を體驗するから神の愛も自然に解るやうになり、暗い部屋に唯一人でも一向淋しがらずに平氣で寝る。斯様な躰け方は確かに效果的な教育であると思ふ。然るに日本では母親が子供を抱いて寝たり添寝をしたりする習慣が多く、或は暗い所へ行くとお化が出るなどと傍からおどかしたりするので、子供はだん／＼臆病になつて一人寝をしたがらない。かういふ工合に幼少時代からの躰け方で子供の生理的・心理的變化に非常な相違を生じて來るのである。この、自分は一人でも神様がついて居て愛して下さるから恐ろしくも淋しくもないと云ふ心持は即ち信仰で、この氣力がやがて人間をして偉大ならしむる基であり、又國家社會を發展せしめ文化を促進せしめる原動力となるので

ある。英國人が早くから故國を離れて世界到る處に活動し遂に今日の發展をなすに至つたのも如上の信仰教育が重大な原因を爲して居ることは明かだ、これ即ち海外に於ける移殖民を發展せしむる要訣、言ひ換へれば移殖民精神の根本であらねばならぬと私は信するのである。そこで我國の家庭に於ても宗教的雰圍氣を豊かにし朝夕神佛を拜し、皇室を拜し、祖先を拜し、又教會などへも行き、誓詞と感謝とを捧げる等の習慣を繰返す事に依つて、常に敬虔清純な心を保ち、善を行ひ惡を斥ける事を絶えず努めるならば、漸次生理的・心理的醇化を起して益々信仰心が堅くなり、さうして不磨の聖經典たる教育勅語に御示し下さつた日本建國の精神——惟神の道即ち皇道を遵奉し實行して止まないことが、無上の満足であり歡喜であり而も感謝に堪へぬと云ふ尊き體驗を味ふ所のプラスの情操を體得するに至るであらう。感謝報恩の念も敬虔眞摯の氣分も將た又博愛仁慈の心も皆これに依るのである。さうしてこの愛即ち慈悲の心は獨り人間のみでなく其の他萬物にも及ぶが故に、遂には草一本でも無意味に摘み取ることは忍びないと云ふ尊い感じが出て來るのである。未熟ながら今日までの私自身の經驗や體驗に照らしてみてもこの高潔熱誠なる信仰心を總ての根本精神としなければ到底駄目であるといふことを泌々痛感するに至つたので、私は及ばずながら、同志諸君の援助を仰ぎ教化振興會なるものを興して、在來の教義宗派に偏せ

す、純一な信仰心に基く修養の運動を起すに至つた次第で、斯かる総合的な信仰を趣旨とする團體は他に其の類を見受けないうやうに思ふ。本會の趣意書にも掲げてある通り、情意の鍛錬のため京都御所の早天修養會に加はつたり、大學内の美化掃除などをやつて居るのも、終始清い心で、善行に奉仕することを愉快とし感謝し得るやうな體驗を積まうと努力して居るのに外ならない。斯くの如き修養を積むことが、やがて尊き體驗を得る順序で即ち神の道に適ふ所以であると信じて居る。我國の誇りである武士道に就いて見ても、やはり惟神の道を根本とし、これに儒教や佛教の精神が加味されたものである。だから鎌倉時代以來武士道のモットーとする所は、第一敬神、第二崇佛、第三忠孝云々とあつて、何處までも信仰を離れて居ないことが解る。昭和の初め頃來朝した米國の文學博士神學博士グリフィス氏が我日本國民に對する忠告文の中に、明治維新の遂行された原動力の第一は傳統的信仰の力ではないか、と叫んで居るのも全くこの點に着眼したものと思ふ。とにかく我大和魂なるものは斯様に信仰心が根柢をなして居ることを忘れてはならない。私の宗教觀は別項「明治天皇と教育勅語」の中にも述べて居るからこゝでは詳しく繰返さないが、要するに信仰とは、神でも、佛でも、天でも、或は絶對者でも何れの觀念でもよいが、超人間の偉大な絶對の力を信じ、常に感謝、満足、歡喜、憧憬等の情を以つて眞理を辿り理想を追

ふことを永續的に實行しつゝ、神の目的のために奉仕する事が出来れば、それでよいのだと信じて居る。さうしてこの宗教たるや現代の科學、道德と何等衝突しないものでなければならぬ。一體、眞理を假りに類別すれば宗教的眞理と科學的眞理の二方面とすることが出来るが、その何れも神の與へたものであるから、我々はどこまでも之を遵奉し實行しなければならない。然るに、宗教家は科學的眞理を、又科學者は宗教的眞理を、とかく無視或は輕視するのが在來の一般的通弊であつて、従つて永續的實行が伴はないから何時まで經つても信仰心を體驗し得ないものが甚だ多いのは洵に遺憾に堪へない。即ち宗教と科學の合致と云ふことを忽せにしてゐるのは非常な缺點である。宗教が無ければ眞の精神修養が出来ないと同時に、亦科學を重んじなければ眞の精神活動も出来ないのである。それ故自分では宗教的信仰があると信じてゐても、永續的の實踐が伴はないならば、實は信仰心があるのではない。元來信仰には前述した通り智情意の三方面を含んでゐるが、世間には、信仰に智識は無用だと考へたり或は智識の足らないことに氣付かずして信仰さへあればよいと安心してゐるやうな人も尠くないから、眞の信仰心を發揮するには、同時に科學的にも最善の道を辿り永續的に實行することが不可缺の要件であることを決して忘却してはならない。例へば科學的眞理が教ふる所の飲酒や喫煙の害を悟つて、斷乎これを禁ずるところ

に感謝と満足とを覺えるが如き實踐の伴ふのが眞に信仰ある人の生活である。

一體宗教といふものは超合理的基礎の上に立つて眞善美を全的に統合した聖の文化價値を發揮するものと云ふことが出来る。それ故これを押し進めて行くならば所謂奇蹟的な神明の啓示乃至加護を體驗するに至るであらう。弘安の元寇に當り神風が吹いたり、或は日露の大海戦に於て我國が奇蹟的な大勝を博したのも、一面には我軍人の武勇に因ることは云ふまでもないが、同時に有難き天佑がなければ出来ないことであると私は信じて居る。元寇の際には、龜山上皇を御始め執權北條時宗以下の勇將等が、不撓の信仰信念を以つて我神州の守りに當り、又日露戦争の時には、明治天皇の御信仰は固より申すも畏し、我聯合艦隊司令長官たる東郷大將も亦非常に信仰の厚い英雄である。而も、孰れの國難の場合にも、我國上下の根本精神としては、終始何等の邪念なく飽くまで正義擁護の爲めに所謂神の道を踏んで進んだのであるから、即ち神の事業に参加し奉仕した次第に外ならない。従つて、これに對し神明の加護のあるべきは正に當然の事である。實際、昔から天佑とか冥助とか云ふものは信仰のある人のみが如實に感受、體驗し得た事實であつて、信仰のない人には斯うした背後にある神聖なものを味了する事は出来ないであらう。されば我々日本人たるものは何處までもこの惟神の道を信仰遵奉し、以つて天壤無窮の理想的國家完成の一大使命の下に、東洋は勿論、全世界の平和、人道の確立實行、東西文化の融合と創造、全人類の共存共榮等のために奮勵努力すべきであつて、これぞ即ち日本精神の宣揚、皇道の擴充に外ならない。而もこれを常に感謝と喜悅とを以て實行するといふことが大切な要件であつて、他の言葉で云へば信仰心を本として最善を盡すといふことに歸着せねばならぬ。されば我教化振興會に於ても、この理想を目標として皆さんにお骨折を願つてゐる次第であるが、この趣旨は宜しく外國人にも了解せしめる必要があると思はれるので、既に開會の御挨拶にも述べた通り、中瀬古博士を煩はして本會の趣意書を英譯し、世界無比の我皇道をば Mikado's discipline と云ふ文字に譯して海外に發表したわけである。

移殖民精神

信 これまでは信仰についての話であるが、これから移殖民精神といふことについて述べて見たいと思ふ。先づこの移民と殖民との分類について申すならば、我國の立場としては、南米、南洋、或は滿蒙などへ移住せしめるのを移民と云ひ、樺太、朝鮮、臺灣などへ移住せしめるのを殖民と稱するのである。従つて南洋、南米、滿蒙等は移民地であり、樺太、朝鮮、臺灣等は殖民地である。而して

私の話はこの兩方に就いて包括的に述べるのであるから、茲に移殖民と併せ呼んだわけである。さて彼の英國の清教徒が宗教上の壓迫のために、一時和蘭に逃れ、更に千六百二十年九月末同國のライデン市からその中の百二名が汽船メイフラワー(Mayflower)號に乗じて出帆し、米國マサチューセツツ州プリマウス・ロック(Plymouth Rock)に上陸したのは同年十二月二十一日であつたが、翌年四月その船が歸航する際には既に右の人々の半數は死んでゐた。然るにも拘らず、生残つた人達の中に、誰一人として故郷へ歸らうと欲する者はなく、皆堅き宗教的信仰の下に、理想の新天地を開拓するのが神の使命であり、我々の天職であるとして、この異郷の土に踏留まつたのが、今日の北米合衆國の起源であると傳へられてゐる。即ち目的の貫徹のために飽くまでこの土地の土となるといふ堅き信念の然らしめた結果であるが、若しもこの時彼等に信仰がなく従つて心の尊い感じであるプラスの情操が鍛錬されてゐなかつたならば、恐らくホーム、シツクなどに罹つて到底この大建國の基礎を築くことは出来なかつたであらう。然るに彼等は毫も左様な女々しい心を起さず故郷へ歸らうなど、は夢にも思はないで營々と努力したのである。これは畢竟先程申述べた英國の家庭に於ける、幼少時代からの宗教的な熏陶——神様と共にあるから少しも淋しくないといふ強い信念を培はれて來たことが大いに與つて力あるものだと思ふ。即ち神

我と共にあり我を愛し我を護るといふ信仰を有つてゐるから、本國を離れて遠く他郷に在つても決して淋しく感ぜず、その地のために最も忠良なる市民として全力を捧げ、その地の土となることを満足とする、所謂到る所青山ありの氣分を保てるのである。これを日本人について言つてみると、若し我々が他國へ移住する場合には、宜しく氏神様から先祖のお墓まで一緒に持つて行き、さうして向うの國籍に入れて貰ふ位にするがよいと思ふ。この位の覺悟があれば、その土地の爲めには十分力を注ぐことが出来るから、従つて土地の人々にも信頼され、市町村會議員や代議士等に使はれることにもなり、到る所で、その人の活動が歡迎されるであらう。さすれば我々日本民族の聲價は益々發揚されると同時に彼我の貿易も盛んとなり輸出入も増進することによつて經濟的にも有利な途が拓け、互に共存共榮の實が擧げられるわけである。先年大谷尊由師が新聞紙上に、ユダヤ教なるものは、その土地のために最も忠實な市民としてベストを盡すやうに教へる宗教であると聞かされたと述べてをられるのを讀んだことがあるが、ユダヤ教には缺點もあらうけれど、この點は非常に結構な教へだと思つた。實に我住む土地のために最善の努力を捧げるといふことは神の道に叶ふ所以でなければならぬ。人間は須らく斯ういふ工合に教育さるべきものと思ふ。さうして、これが即ち正しい移殖民精神の根本と

なるのである。つまり前述した英國の清教徒の如く、理想の新天地を開拓せんがために移住するといふ堅き宗教的信念が根本とならなければならない。私の本講演に題した移殖民精神の眞意は即ち茲にあるのであつて、何處までも信仰を基調とした雄飛發展であり、單に智識や理窟のみで割出した移殖民方策であつてはならないのである。

然るに、今日までの一般日本人のやり方は、所謂錦を着て故郷に歸るとか、先祖代々の土地を離れるのは不孝であるとかいふやうな時代遅れの舊道徳に囚はれてゐる傾向が脱けないから、自然他國へ行つてもその土地のために生涯最善の力を盡し一身を捧げるといふ氣になれないものが多い。金を稼いでは故郷へ送る、溜めた金を持つて故郷へ錦を飾るといふやうなことを最後の目的とし、甚しきに至つては、旅の恥は掻捨といつた考へでゐる者も決して稀らしくない。従つてどうしても腰掛的氣分となりその土地の爲めに全力を盡し忠實であることが出來ない故、土著の人々と兎角融和し難く、その歓迎を受けるわけにゆかないのは當然の結果であらう。いつかも斯ういふ例があつた、米國にゐる或る日本人が天長節に日本の國旗を掲げてゐたら米國の在郷軍人がその國旗を引裂いてしまつたので、日本人との間に一捫着起つたが、その時米人の言分は、他國へ來て世話になつてをりながら自國の國旗のみを掲げておくといふのは國際間の禮儀を知ら

ないやり方だ、なぜ日本の國旗と米國の國旗とを交叉して出さないか、と怒つたのださうである。又或る日本の紳士がサンフランシスコ市第一等のホテルへ泊つたのはいゝが、その廊下を浴衣一枚で歩いてゐたので、日本の領事がこれを見兼ねて、そんなことをして貰つては困る、ホテルの廊下は大道と同じだからと戒めておいた、ところが翌日行つて見ると、今度は部屋の前の廊下へ蜜柑の皮をどつさり捨ててあつた、そこで又領事がこれを詰ると、いや君はこの廊下が日本の大道と同じだと言つたぢやないか、日本の大道は蜜柑の皮を捨てゝも構はないから此處へ捨てたのだと答へたさうである。これ等は皆日本の教育の缺陷から生ずる間違ひで、外國人に對し耻しい次第である。又關東州の或る都市には特に三十七八年戰役後から日本人が澤山行つてゐるのに、未だに招魂社以外新たに神社佛閣の建立されたものがないさうだ。同地で或る相當の官吏の宅へ、大神宮のお符を御納め下さいと言つて持つて行つたら、その奥さんは、私の家では要りません、と斷つたさうである。これ等の實例を見ても甚だ信仰心の足りないことが分り、日本の教育の缺陷が暴露されてゐると思ふ。かう云ふ有様では、移住地で排斥を受けるのも強ち怪しむに足りないではないか。向うにも不都合な點があらうけれど、こちらにも確かに缺點がないとは云へない。しかも日本ではさういふ點に十分注意して適當な教育を施すことを努めてゐない。否

寧ろ當り前のやうに心得て一向顧みない傾向さへある。従つてこの方面に關する智識も情操も意志も殆んど出來てゐない者が多い。つまり眞の移殖民精神といふものは殆んど養成されてをらぬのである。だから、先きが先きならこちらもちちらだといふ態度で、到底互に共存共榮の實は望まれないこととなる。處が、米國にゐる日本人は、日本からは棄民とまで云はれ、又その國からは散々虐められた揚句、とても外へ對して求めて居ても駄目だ、内から先づ自分を覺醒するより外に生きて行く途はないと云ふことに漸く心づき、今やだん／＼眞劍な氣風が現はれて來たとのことである。先般米國から一寸歸朝された救世軍の小林政助氏のお話にも、現在日系米人は、斷然賭博も止める、醜業もやらぬと云ふ工合に非常な覺悟を以つて進んでゐるから、どうか十年後を見て貰ひたいとのことであつたが、事實この日系米人の覺醒によつて著しく日本人の聲價が揚つて來たさうで、洵に喜ばしい次第だと思ふ。又北海道の開拓にしても、祖先の墓まで持つて移住した位の堅い決心の人は皆成功して居るが、それ程覺悟のなかつた者は失敗してゐるとのことである。つまり一方は永久的であるに比して他方は腰掛的であるから、兩者の意氣込に天地の相違が生ずるのである。かう云ふ事を考へて見ても、移殖民には是非共、その土地のために全身の愛と力を捧げる良市民となり、祖先の墳墓や故郷の氏神等までも共に移してその土地に永住し

其處の土となるといふ覺悟が必要であり、旅の恥は搔捨だとか或は未開の土地の人々に對する自己優越感で威張つたりするやうな間違つた考へは全然一掃して了はなければならぬ。それには度々述べた通り信仰心を有つことが最も大切な根本義であつて、これに依つて始めて眞の愛を發揮し、彼我民族の融合親和を全うすることが出来るのであると私は確信してゐる。

近頃我國に於ては、人口が殖えて困るから産兒制限をしなければならぬといふ議論を耳にするが、一概に産兒制限といふことは、人類を自滅に導く拙なる退嬰的方策に過ぎないと私は思ふ。支那は人口が非常に多く、尙どん／＼殖えてゐるので、あゝいふ有様の國であつても、世界各國の容易に窺竄することを得ない一種の底力を持つてゐる。これは確かに支那の大きな強味である。かういふわけであるから、これと同様、日本の人口が大いに増加してゆくのは實に有難いことと謂へる。故に産兒制限は、却つて民族の衰亡を意味するものであり、甚だ非人道的であつて、苟も心ある者はかういふことを輕々しく口にすべきでないと思ふ。尤も優生學上より行ふ所の最も合理的な産兒制限には私も敢て反對ではなく寧ろ賛成である。即ち遺傳的惡疾などを有つてゐる者に對して、それを根絶するための制限ならば止むを得ない。又貧乏人の子澤山といふ問題もあるが、さういふものに對しては、國家が費用を出してその子供を立派に教育してやるといふ

如き社會政策等も亦必要であらう。然るに我國の現状は果してどうか、飲酒の爲めにさへ酒代として十五億圓の大金を費してをりながら、社會政策の方面に至つては甚だ微々たるものではないか、この點に對してはもつと思ひ切つて改善を加へる必要があらう。それと同時に、移殖民に就いても叙上の最も適當な方法を講じ、その永遠の發展を期することが目下の急務であると思ふ。

次に適當な移住地に就いて一言するが、それは滿蒙の外に南米、南洋等が擧げられる。一體、日本人の素質では熱帯地方の生活にも適するが歐米人は餘りこれに適しない。主に寒帯地方に住する歐米人の食物は従つて寒帯に適するものが多く、主に亞熱帯に住する日本人の食物はどちらかといへば亞熱帯或は熱帯に適するものを用ふべきである。例へば日本人には牛豚肉よりも魚肉の方が適するが如きである。又日本では雨が多く熱度が高いのに比し歐米では雨が少く熱度が低いから、住宅を建てるにしても、西洋では廂が要らないが日本ではこれを必要とする。かういふ具合に衣食住に相違のあることを考へねばならない。南洋のボルネオは日本内地と朝鮮とを合せた位の面積を有つてをりながら人口僅か二百五十萬しかない。又スマトラも内地と略ぼ同じ位の大きさがあるが漸く五百萬人しかゐない。而もスマトラの高原地方の氣候は年中華氏七十度ぐらゐで、實に住み心地がよい上に、移住民には七十年を一期として土地を貸してくれ、尙何期でも

繼續することが出来る。その租借料は約七段歩について一圓をオランダ政府に納めればよい。更に有難いことには年に幾度も米が穫れるといふ、洵に有望な土地である。これは元京都高等蠶業學校長山田登代太郎氏の實地視察談で聞いた話である。故にこの方面へ移住發展策を講ずるものよからう。尤もこの地方は、年中氣候が變らないから、ハワイなどと同様、自然に人間の抵抗力が減衰してゆく處があるので、三年目に一度ぐらゐは内地へ歸つて來る必要があらうとのことであるが、それには日本觀光といふ位の意味で歸還すれば宜しいと思ふ。で、斯やうな策を探れば、このボルネオ、スマトラ地方だけでもまだ澤山な人口收容力があり、滿蒙や南米方面のみに限つた譯ではない。されば日本内地に於ては朝鮮や滿蒙の豊富なる天然資源と大和民族の卓越せる技能や發明力を發揮し、低廉な勞力、動力等を十分に利用して、各種の産業工業を盛にし人口増加に對しては新職業を與ふると同時に移殖民の發展を畫するならば、兩々相俟つて所謂人口問題を解決することも決して困難ではなからうと信するのである。

今日米國を始めその他の諸國に於て、繩張主義を採り日本人の入國を拒んでゐる所があるが、しかし、これには前云つた通り、日本人に未だ眞正の移殖民精神が足りないといふ缺點のあることもその有力な原因として顧みなければならぬ。そこで先づこの精神を涵養することに努めると

共に、斯様な繩張主義は人道上不都合である所以を力説して彼等外國人を覺醒せしめ、以て四海同胞の大義を宣明することが我皇道の一端に外ならないと思ふ。

更に附言しておきたいのは滿蒙人に對する日本人の態度に就いてである。或る有力な滿洲人達は日本人に向つて、在滿日本官民の或る者はどうも横暴でいけない、又自己優越感を以つて臨むから兩國民の融和が出来ない、これでは恐らく日本國のためにもなりませんぞと警告したさうだが、斯る非難を受けるやうな日本人の仕打ちは即ちマイナスの情操による所であるから、これをプラスの情操に變へ、愛を以つて互に融合するやうに改めなければならぬ。例へば在滿日本人が進んで滿洲語の稽古を爲し兩者の親善に資するが如きも必要にして有效なる方法の一であると思ふ。さもなければ、假令表面は強權に屈服してゐても、内心はさうでないから時ありてか憂ふべき事態を醸し日滿の將來に重大な悪結果を齎らす虞があるであらう。元來日本の教育が前述の如くであるから、若手官吏の中には往々理窟一點張で行くといふ弊がなきにしもあらずと聞くが、若しも一々かういふ態度を以つて滿洲人に臨むとするならば、徒らに彼等の感情を害し却つて意思の疏通を缺く結果になりはしないか。又日本人の中には兎角理窟で事を片付ける癖があり、これにつれて反抗的氣分を示したり、或は論争を事とする氣風があるが、對滿洲の問題にも、この點

が懸念されないでもない。尙又御都合主義、打算主義等の立場から論斷し行動する如き弊もありはしないだらうか。更に又感謝報恩の念が足らず、不眞面目で、我儘な氣分が漲り、而も誤れる優越感により傲慢な態度や言語を以つて滿洲人、支那人或は朝鮮人に對する如き人もありはしないだらうか。若し斯かる人がありとすれば、これ皆信仰心の缺乏より來る弊害といふべきであらう。信仰があれば常に謙虚な氣持であるから、例へば苦力を呼ぶにしても苦力さんといふ、やさしい言葉が自然に出て來る筈である。更に又彼の地にあつては喜んで質素な簡易生活が出来なければならぬ。即ち高粱や玄米などを進んで常食とし、その他の食料も土地の産物で間に合はせ、わざわざ日本から白米や酒、罐詰、海苔、上等の茶等を取寄せたり、鯛の刺身や珈琲、アスパラガス等を用ひなければ氣が済まぬやうでは、マイナスの情操が増長してゐるもので、速かに改める必要があらう。とかく日本人の生活には無駄が多く、贅澤で、不經濟を顧みない通弊がある。一燈園の托鉢生活にまで直ちに徹底せよと要求するのは聊か無理だと云はれるかも知れないが、しかしそれも信仰を以つて實行するならば敢て難事でなく、否感謝してこれをやれるやうになるであらう。かうした日本人の缺點を見抜いた、支那の某有力者が彼地にある日本人を見て、日本國は偉いけれども日本人は偉くない、支那國は偉くないけれども支那人は偉いとまで評言し

たとのことであるが、その當れるや否やは別として、味ふべき言葉だと思ふ。

最後に、滿洲在住の日本人から見た内地の有様は如何であらうか、些細な例であるが、鐵道の赤帽の如きも内地のその方が不親切で而も不廉であるとの評判を聞いた。更に突き込んで重要な點に對し忌憚なき批評を求めた所によると、内地人は擧つて、滿洲は日本の生命線なりと高調しながら、實は、官吏の古手や失業者の捌け口の如く心得てゐるのではないか、眞に生命線として重要視するなら、もつと有用な人物がドシ／＼と滿洲に来て永遠の大計を確立するやうに奮發と覺醒と協力を促さねばならないといふ意味のことを主張してゐた。何れにしてもこれ等は宜しく耳を傾くべき事柄であると同時に、やはり内地人一般の無信仰による誤謬不徹底を物語るものではあるまいか。

これを要するに内外在住の何れを問はず一般に日本人は信仰心が足らない爲めマイナスの情操に禍せられ従つて眞劍味が乏しいのである。それ故、今後は非共信仰の涵養に全力を注ぎ、これによつて生理的・心理的醇化を與へ以つてプラスの情操に轉化せしむることを第一義とせねばならぬ。言ひ換へれば情意の鍛錬が特に必要であることを意味するのである。而して情意の鍛錬は前述の通り信仰教育と眞の體育とに俟たねばならぬ。體育に就いては茲に詳しいことは省略する

が要點を申せば、昔の武道鍛錬と同じく常に信仰を本とせる清い心で、毫も卑怯未練な振舞なく、飽くまでも正々堂々勇敢に最善を盡し、而も競技に於ては、勝つても傲慢とならず、負けても落膽せざる公正明朗な態度を失つてはならない。故に今日一般に行はるゝ如き勝敗に熱狂する運動競技等は眞の體育と稱し難く、正に一大改善を要するものと思ふ。

概括的に云つて、維新前には文武兩道共に信仰を根本としてゐた。然るに維新後となるや、武即ち陸海軍の方は、やはり古來の武士道の精神に則り、且つ長くも 明治天皇の下し給へる軍人勅諭を奉戴して、常に忠君愛國の精神を涵養鍛錬し、その實行を缺かさなから、君國の爲めには喜んで死に就くといふ熱誠に溢れ、斯かる戦死者の遺骸は皆恰も高僧の往生せる如き氣高き面影を備へて居るとのことであり、さてこそいざとなれば直に肉弾三勇士を輩出する所以である。これ畢竟するに 天皇中心の生活即ち神中心の生活の現はれに外ならない。この事を思ふと現に滿蒙の野に奮闘せる我皇軍の忠節を偲び、洵に感謝感激の念を禁じ得ない。然るに一方の文教に於ては、一般に情意の鍛錬が不十分で、従つて高等教育を受けた智識階級に却つて殊更信仰心が乏しく御都合主義に走り、物事を打算的に考へ、これに依つて行動する者が多い有様である。例へば未丁年者禁酒禁煙の法律があるにも拘らず、教師や先輩までが彼等未丁年者と一緒になつて飲酒酪酩

するやうな言語道斷な體たらくが止まないではないか。斯かる教育勅語に違反する無信念的教育の現状を改めざる限り、我皇軍に見る如き立派な精神を一般に養成することは至難であらう。上來縷述せる所より明かなる如く移殖民に對する必要條件としては、第一に信仰心、第二に情意の鍛鍊（これは單に信仰があると云ふだけでは往々觀念的傾向のみに留まる處があるから、勤勞的實踐による鍛鍊を旨とするのである。これと共に職業上の心得としての智識の必要なことは申すまでもない）。この二つを特に必要なものと考へるが（以下は山本博士の講演に詳説された通りである）、第三には科學的研究乃至方法をも重要視しなければならぬ。例へば團體的移民、集團的移民といふが如き研究や方法である。第四には成るべく各種の職業人を包含すること、即ち宗教家、教育者、醫者、各種の技術家、商業家、勞働者、産婆、床屋、風呂屋等に至るまで、總ての職業人を網羅して行くことが必要であらう。最後に第五として、適當なる生産業乃至生産物の選擇を誤らざることである。その他科學的に考へるとなほ色々の要件があるであらうが、私は特に精神的の方面、即ち信仰心が根本とならねばならぬことを強調して移殖民精神の確立を冀ひ、これに依つて皇道國家日本帝國の光輝ある發展と王道國家滿洲國の健全なる成長とを祈つて止まない次第である。（昭和七年八月）

至 誠 通 天

人事を盡して天命を待とは古人の金言であるが、もと／＼人事そのものが天命に據るのであつて、我々は何處までも天命に違つて人事の及ぶ限りを盡すといふ覺悟でなければならぬ。言ひ換へれば、人事を盡すとは、天道即ち神の與へた眞理を人間の立場から出来るだけ忠實に遵奉し實行することにある。この眞理は假に分類して宗教的眞理と科學的眞理との二つの方面に歸着するが、前者は宗教的信仰に依つて顯現せられ後者は學問的研究に依つて闡明せられる。而も兩者は決して互に背馳することなく恰も車の兩輪の如く相倚り相俟つて人間生活を正しい軌道の上に導くものである。それ故、再言すれば、人事を盡すとは、單に我々の知識才能から割り出した科學的條件の遂行に於て萬全を期するといふことのみでなく同時に極めて大切な宗教的要素を含んでゐることを閑却してはならない。その要素とは即ち信仰に基く至誠である。抑も神の意志に遵ふといふ人生の根本義からすれば、信仰心に由る至誠の念（これを宗教的信念と呼び代へてもよ

い)こそ萬般の基礎であつて、知識才能の如きは寧ろ從位に屬するといはねばならぬ。私の常に有難く拜誦する 明治天皇の御製にも

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけれ

と仰せられてあり、又古語にも「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり」とある如く神人の交通は唯誠の道に據つてのみ行はれるのである。(世間では往々「誠心誠意」を口にすればれども信仰心のない人には眞の至誠を發揮することは出来ない)。何事にせよ至誠が伴はなければ假令その計畫や方法が如何に優れてゐても大切な根本に於て神の意志に適はぬから畢竟失敗を免れない。これに反し常に至誠を第一として事に當れば假令周囲の條件には止むを得ぬ不備の點があつても必ず神明の加護を得て遂に目的を貫徹するに至るものであることを忘れてはならぬ。「至誠天に通ず」とはこの事である。 明治天皇の御製にも

とき遅きたがひはあれど貫かぬ

ことなきものは誠なりけり

と仰せられてある。この場合天佑は必ずしも所謂奇蹟的な形を以つて現れると限らないが、とに

かくその結果は超合理的の事實であつて、これ即ち宗教的眞理である。

凡そ人間の事業は、所謂天行を翼賛する限りに於てその意義と價值とがあり且つその成功が期待せられるのである。而も天行を翼賛するには徹頭徹尾至誠を以つて當らねばならぬ。言ひ換へれば、神の事業に参加し奉仕するといふ堅忍不拔の宗教的信仰が土臺とならねばならぬ。そこに高遠な理想も湧き眞理の追及も行はれ正義の擁護も全うせられるのである。

人間の至誠乃至信仰に對して神明の加護の添ふことは歴史上の事實に徴しても明かであるが、就中彼の元寇の難に於ける天佑の如きは其の最も顯著な例證であらう。當時 龜山上皇には畏くも御身を以つてこの國難に代らせ給はんと伊勢大神宮を始め石清水、宮崎八幡等へ御祈願あらせられた。

世のために身をば惜まぬ心とも

荒ぶる神は照らしみるらむ

とはこの烈々たる誠心を披瀝し給うた御製である。執權北條時宗も亦、單なる一介の武弁にあらずして念々祈禱を行する篤信の名將であつた。斯くの如く上下一致の熱誠と奮闘とは遂に天に通じて神風の奇蹟となつたのである。これを偶然の僥倖と斷するのは未だ宗教的眞理を解せざるも

のと思ふ。昔から堅き宗教的信念のもとに身命を賭して奉公の至誠を致せる人々の功績には必ず超人的の偉大なる力が加はつてゐることを見逃してはならない。例へば日蓮上人の龍ノ口の危難に於ける天啓や、弘法大師が萬濃の池の熱禱に依つて郷土讃岐の水害を救うた奇蹟、或は二宮尊徳先生が神に祈誓して下野櫻町の復興事業を成就せしめた事實、その他有名無名の篤行者が信仰の至誠に依つて天恵を受けた實例は枚擧に遑がない。近くは日清日露の兩役に於て當時の日本がこれ等の大國に打克つことは列國の常識では到底不可能視せられた。而も正義のために國運を賭して起つた我國は見事に世界の豫想を裏切つて赫々たる勝利の榮冠を贏ち得たではないか。これ我 皇室の御稜威と忠勇義烈なる國民の努力に由ることは勿論であるが、又一に尊き天佑の賜であらねばならぬ。

明治天皇の御信仰の篤くおはしましたことは申すも畏き次第であるが、日清戦争起るや 天皇には恐れ多くも大本營を廣島に進め給ひ、日夕堅き宗教的御信念のもとに九ヶ月の間師團司令部に御起臥あらせられて夙夜軍務に淬勵せさせ給うた。されば玉體を案じて侍臣が備へつけんとした長椅子をすら 天皇には、將士の陣中に無きものなればとて斥けさせられ、同様の御趣旨から寒中にもストーヴを用ひさせ給はなかつたと洩れ承つてゐる。その將卒と艱苦を共にし國民と休

戚を分たせられし偉大なる犠牲的の御精神は古聖賢と雖も遠く及ばない所であつて、この貴き宸慮の上にかか神明の感應ましまさぬことがあらう。(これに就いて勿體なくも思ひ合はされるのは客歲十一月大阪附近に於ける陸軍大演習の砌、畏くも 今上陛下には御風邪の氣味に渡らせられるにも拘らず雨天に觀兵式を御舉行遊ばされ、又引續き執り行はせられし御親閱式の際にも玉座のテントを撤去せしめ給ひ時餘に亘りて雨中に直立不動を保たせられし御英姿を拜し奉り洵に感激を禁じ得なかつたことである。)

更に日露の役に當りても 明治天皇が國を思ひ民を憂へ給ふ大御心の深きは實に恐懼の極みであつた。

明治天皇御製 (明治三十七年)

民草の上安かれと思ふ世に

思はぬことの起りけるかな

(同 年)

花鳥の上も思はでよろづ民

國に心を盡す春かな

(同 年)

子らは皆いくさのにはに出ではて、

翁やひとり山田守るらむ

(同 年)

世のためにも思ふときは庭に咲く

花も心にとまらざりけり

(同 三十八年)

國のため民のためには夏草の

事しげくともつとめさらめや

(同 三十九年)

いかにぞと思ひやるかな戦ひの

をはりし後の民のなりはひ

これ等の御製を拜誦しても歎慮の畏さに唯感激の外はない。さうして、この有難き聖旨を奉體して一意祖國の難に赴く我將卒の忠誠は洵に鬼神を泣かしむるものがあつたが、中にも彼の日本

海の大海戦は實に皇國の興廢を決する一大事であつた。我聯合艦隊司令長官は武人の典型と仰がれる東郷大將である。日本武士道の信條は敬神崇佛を第一義とするが、かねて日蓮宗の熱心な信者である大將の胸中には定めし烈々たる宗教的信念が燃えてゐたであらう。初め敵艦隊の襲來を豫想して専ら對馬海峽を防衛するか或は津輕方面をも併せて警備するかに就いて幕僚の意見は容易に決しなかつたが、東郷司令長官は多年の體驗と信念から深く期する所あるものゝ如く、追て最後の斷案を下すべき期限を定め一先づ全艦隊を鎮海灣に待機せしめた。果せるかな、その期限に先つこと僅かに一時間、敵艦見ゆとの信號は對馬沖から傳へられた、これ既に第一の天佑である。而もこの日天氣晴朗なれども浪高しとある。浪が高いのは、長途の航海に疲れ且つ實戰の經驗のない敵艦隊にとつては却つて不利であり、これに反して、既に日清役の實戰に經驗を積み、爾來更に違算なき練習を重ねて待ち構へてゐる我艦隊にとつては寧ろ有利である。さうして日本海名物の濃霧を一掃せるこの日の快晴は、我射撃に明確な目標を與へるから益々好都合であり、第二の天佑として感謝せざるを得ない。斯くて彼我の決戦は漸く迫つたが、このまゝの對陣で敵を邀へ打つことは日輪の方向に向つて發砲することになるので東郷司令長官の信仰心が許さない。そこで大將は堅き決意のもとに敵前突破の危險を敢行し有名な丁字戦法の陣形を布きつゝ我

艦隊を敵の反対側に廻した。この大膽極まる破格の戦術には、先づ我が幕僚が一驚したのみでなく、敵艦隊司令長官をして「東郷血迷へり」と思はず絶叫せしめたと傳へられてゐる。而も大將の策戦は見事の中して遂に敵艦隊を殲滅せしめたのである。これ偏に我 皇室の御稜威と天佑の賜なりとて、東郷大將は芽出度き凱旋に際し第一に我艦隊を伊勢灣に集め、自ら乗組員を率ゐて大廟に禮參を果したのであつた。

斯うした事例は我國のみでなく世界の歴史の實證する所であつて正義は必ず最後の勝利を占めてゐる。彼の南北戦争の際リンカーンも必勝を豫言したが、その理由は「神の事業なるが故に」といふのであつた。凡そ成敗利鈍を終極的に決定する原因が人為的科學的條件の優劣にのみ存するならば、これ等の條件の劣れる場合、邪惡の壓迫に對して正義を死守することは徒勞に終るであらう。若しも正義を支持する最高最終の力が神の意志によるものでないとすれば、正義の絶對的權威は抑も何處にあるであらうか。

然るに現代はとかく智の争に走り物事をすべて理詰にのみ裁定しようとする所謂唯物主義の風潮が浸潤しつゝあることは憂ふべき謬妄であつて、これ畢竟無信仰の生活が然らしめた變態的結果に外ならない。それ故、天行を翼賛する、神の事業に参加するといふ如き高遠な理想や信念を

失ひ智謀策略を維れ事としてゐる。斯かる世の中は所詮力と力の對抗に終始し到底共存共榮の和樂を望み難い。眞の平和は萬人が互謙謙仰の宗教的精神によつて結び付けられるところにある。

今や我國は滿洲問題を中心として未曾有の非常時に遭遇してゐるが、この難局を打開するには偏に我皇道精神を基調とする國民の至誠に俟たねばならぬ。天地神明の前に一點の私心を交へず、眞に王道新國家の建設、東洋平和の確立のために邁進するの覺悟があれば、天佑は必ずや我に降り所期の目的を貫徹し得ると共に、我國運の一層の發展を招來すべきことを信じて疑はない。若し然らずして國民一般がこの宗教的信念に徹底しないならば國難は文字通りの災禍として我等の頭上を見舞ひ、更に第二、第三の難局は相次いで至るであらう。現に我等の代表松岡全權は如上の宗教的信念を以つて壽府に奮闘しつゝありと信ぜられるが、これを後援する我々國民も亦須く堅き宗教的信念のもとに心を一にし力を協せ以つてこの大使命の遂行を期せなければならぬ。(昭和八年一月)

日本國民の覺醒

感恩報酬の念

元駐日獨逸大使ゾルフ博士は、歸國後彼の地に於て大いに日本の國民性の卓越せることを賞揚してゐるさうだが、その理由の一つとして、去る大正十二年の東京大震災の際大使は田舎に避難したのであつたが、その土地の住民達の親切な接待に衷心から感激させられた結果であるといふ。思ふに、かうした親切は畢竟、知らず識らずの間に傳統的な宗教心によつて培はれて來た感恩報酬の念の現れに外ならない。

看護料の請求

これに反し、私が嘗て獨逸に在留した時（明治三十二年頃）見聞した事實であるが、日本の一留學生が歸朝間際に病氣に罹り、幸に下宿の主婦の看護によつて全快するを得たが、彼はその勞に

酬いるため相當の贈物をして謝意を表した。然るに彼が驚いたのは、出發の際の勘定書の中に、臆面もなく看護料が記載されてゐることであつた。茲に彼我の國民性の相違が窺はれるのである。

無報酬の驚異

また先年西田天香師が渡米の際、或る公園で托鉢を行ひ、しかも無報酬で奉仕してゐるのを見て米國人は舌を卷いて驚き「日本には米國よりも高い道徳がある」と感歎したさうだ。仕事をすれば必ず報酬を要求するものと心得てゐる米國人から見れば、天香師の無報酬の勞働は確に驚異に違ひない。彼の地の巡查が人民から心附を貰つて恥としないのも強ち怪むに足らないのである。

祭政一致

日本は神國、國民は神民の名稱がある通り、太古から高皇產靈神の神籬の御神勅に基き、特に祭祀を重んじた國柄であつて即ち祭政一致の國體である。畏くも明治天皇には、毎朝賢所を

禮拜し給うた後でなければ、決して政を變はせられなかつたと承るほど敬神崇祖の大御心の篤くおはしましたことは、我々國民として洵に感佩に堪へない。然るに歐洲諸國では「神の物は神に返せ、王の物は王に返せ」など、いつてゐる通り、とかく祭政不一致の國柄が多く。

無批判の模倣

神籬の御神勅である祭祀は「みそぎ」「はらひ」「鎮魂」の三つを重んずる儀式であつて、神祇を禮拜するには必ず先づ「みそぎ」に基き身を清めねばならない。これから手や口を洗ふ習慣が生れたものである。然るに今日ではこの大切な潔齋を怠つたまゝ神詣をするものが少くないのは甚だけしからぬことと思ふ。尾籠ながら、我國では便所のことを御不淨と稱し、用便の後は身を清める意味で必ず手を洗ふことになつてゐる。ところが西洋では手を洗はない。そこで近頃西洋から歸朝した人達の中にはこれを怠るものがある。斯くの如きは歐米の弊習の盲従といはねばならぬ。これは畢竟西洋人が單に物質的科學的のみ物事を考へ勝ちな結果である。これに反して我國は古來精神的方面を重く見るから、斯かる場合必ず手を洗ふ習はしである。さうして子供の時から常にこれを繰り返してゐると、後にはどうしてもこれを實行しなければ氣が済まぬやうにな

る。これ即ち生理的的心理的變化による情操醇化の一例であつて、それだけ人格的に向上してゐるのである。然るに西洋流を眞似てこの心身を清める高尚な儀式習慣を放棄するが如きは、明かに我國人の精神的墮落なのであつて、大いに戒むべき事柄である。

かやうに彼我の國民性には固有の相違があり、而も我の彼に優れるものがあるに拘らず、無批判に西洋を模倣する所に我國獨特の精神文化を失ふ悲しむべき結果が生ずるのであつて、今日の所謂思想國難も畢竟こゝに胚胎するものといはねばならない。

惟神の大道

我國は建國以來惟神の大道を中心として今日の國體を形成するに至つたのであつて、國民道德の根柢を此處に置き各人の情操の醇化、意志の鍛鍊は一にこの道によつて行はれ、さうして更に儒教や佛教が渡來して適當に日本化せられ、これ等の眞髓が相倚り相俟つて、特に鎌倉時代以降所謂武士道が興隆したのであるが、そのモットーとする所は一に敬神、二に崇佛、三に忠孝その他であつて、即ちその要素は宗教的のものである。更に後年基督教が入り、自由、平等、博愛等の道德が加味せられた。我國體の精華である日本魂なるものは、全くこの宗教的日本精神に外なら

ない。故に若し我々日本人が宗教的信仰と相離れたならば、この卓越せる國民性も竟に何等の力、何等の權威なく、従つて我國體の精華を發揮することは到底不可能である。また現今盛んに唱へられてゐる所謂自力更生も、この宗教的信仰を根柢として始めてその目的を達成し得られるであらう。

國民覺醒の秋

明治天皇が御信仰の篤くおはしましたことは、前にも申述べたが、

目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ

千早振る神の御代より一筋の道を踐むこそ嬉しかりけれ

の御製を拜しても、この御事が有難く拜察されるのである。かやうに我 皇室に於かせられては御歴代極めて御信仰心が深く厚くあらせられるに拘らず、明治維新以後一般國民は却つて宗教を輕視するの風潮を生じ、歐米の功利主義、物質主義の方面のみを見習つて遂に信仰心を取失ふものが多く従つて傳統的の精神主義は漸く衰亡に傾き、果ては思想國難、政治國難、經濟國難などあらゆる今日の行詰を生ずるに至つたのである。正に國民の一大覺醒を要する秋であると思ふ。

日本の熱心な研究者であつた、米國の故グリフィス博士が日本國民への忠告文の中に、明治維新の原動力は維新前に於ける日本國民の信仰の力であると斷定してゐることや、又故小泉八雲氏、米國のモット博士等が何れも、日本人には宗教心が無くなつたら駄目だと警告してゐることなどは我々の深く反省すべき點である。

諸君の奮起を望む

希くは諸君、茲に顧みる所あつて、我建國の大理想たる惟神の大道に則り、敬神崇祖の美風を培ひ、以つて我國威の宣揚のために奮起せられんことを。しかもこの國民的訓練を全うするには、幼少時代より努めて神佛を拜し 皇室祖先を敬する習慣を養ひ、惡事は斷じて排撃し善事は必ず實行せざれば止まぬといふ意氣を體得するやう仕向けてゆかねばならない。

斯くすれば情操は次第に醇化し意志は益々鍛鍊せられ、さうして宗教心は彌々強固となり、常に感謝、歡喜の裡に職務に勉勵するのみならず、進んで國家社會のために粉骨奉仕する所の尊き體驗を積みゆく結果となるであらう。そこに人格の向上、國民精神の作興が存するのである。

(昭和八年二月)

附 録

我國教育の科學的缺陷と強制的補習教育の必要 (大正七年十二月)

(「京都小學五十年誌」所載)

大正の兒童青年を導いて、能くその祖國に對する歴史的並びに地理的理解を堅實ならしむると同時に併せて現代世界の最新文化に適應せしめ、更に進んで創始的能力を培養し、延いて將來に於ける國運の趨勢を善導し發展せしめ得るの器材と爲すこと、これ我國民教育の大方針であらねばならぬ。従つて教育の實際に當るものは常にこの方針を把握して、萬遺漏なき努力を傾注しなければならぬ。

然らば、我帝國の過去及現在に於ける教育は果して這個の大方針の下に、着實に、的確にその實績を挙げ得たであらうか、將た又挙げつゝあるであらうか。遠き過去は暫く言はず、明治維新以後、西歐の文化を採り容れて、新しき教育を開始して以來既に五十年、この間、形式の上に又實質の上に、相當の進歩と改善とを遂ぐるに至つたことは事實であるけれども、而も仔細に觀

察すれば、果して適切なる方法を以て最大の能率を發揮するに足る教育が行はれてゐるであらうかといふ重大なる疑問を發せざるを得ない。否、予の見を以てすれば、這は既に疑問に附せらるべき事項でなく、或る程度までは明確に否定を以て答ふべき問題である。即ち我國從來の教育は、一は財政上の困難に因るとは云へ、如上の根本方針を遂行する上に於て甚だ重大なる缺陷を包藏して居る。この缺陷に對しては、正に徹底的の革新を必要とし、而も今や世界未曾有の大戦亂に當つて特にこれを斷行すべき時機なることを痛感するのである。

科學の力

維新以來新興日本が、歐米の先進國を驚駭せしめた第一の原因は何であるか。言ふまでもなく我陸海軍の精銳無比なる威力に在る。而も今日歐米に於ては、斯かる武力の強大を以て我日本の唯一の長所なるかの如く見做し、これを稱揚するの陰に、密かにこれに對して畏怖の念を抱く者さへ少くないことである。而して我日本國民の中にもこれを以て最大の誇となす者がある。併しながら、國家の實力は單に武力のみにあらずして、これに加ふるに更に一層重大なる要素が存在することを忘れてはならぬ。蓋し、過去に於ては殆んど武力のみによつて國家の興廢が決せら

れた時代も存したけれども、今や文化の進展に伴ひ國運の前途を支配する要素が決して單なる武力のみでないこと、否寧ろこれであつてはならないことが、世界の大勢と時局の變轉とに照らして明確に察知せらるゝのである。而もその根本に於ては飽くまで正義を以て一貫し、道義の卓越せるものであらねばならぬことは固より論ずるまでもない。然らば、右の重大なる要素とは何であるか、それは勿論一二に止まらないが、予は特に我國の現状に顧みて、「自然科學の力」の必須なることを高調せんとするものである。自然科學の擡頭が、吾人の世界觀、人世觀を一變せしむるに至つたのは、既に數世紀以前のことであるが、爾來その發達は益々顯著にして殆んど那邊に極まるかを知らざる趨勢である。今日に於て自然科學は、吾人の日常生活より、進んで國家社會の現在並びに將來を支配すべき偉大なる勢力を持つに至れることは何人も否む可からざる事實である。史上空前にして恐らく絶後なるべき近時の歐洲大戰は、その影響を世界の隅々に傳へてゐる。盟邦の友誼に従つて、交戰國の一に加はれる我帝國に於ても亦固より直接に間接に、甚大の影響を被りつゝある。商業、工業、農業、鑛業、その他一切の産業上には勿論、政治、教育、國防等のことに至るまで一としてこれが餘波を受けざるものはない。而して、吾人は是等各方面に對する影響を一貫して、その中樞たる一大勢力の儼存することを認識せざるを得ない。否寧ろ我國民

をして特に今次の事變以來あらゆる方面に亘り最大の驚異を感じしめつゝあるものは實にこの一大新勢力の影響でなければならぬ。この新勢力とは、言ふまでもなく「自然科學の力」である。今や歐米は勿論、我帝國に於ても、あらゆる方面に對する所謂戰後經營は一としてこの新勢力を度外視してこれを策圖し得るものはない。余輩はこの趨勢を以て我帝國の爲めに慶ぶよりも、寧ろ當然の事象が、注目せらるゝことの遲きに失したるを憾むものである。併しながら、後れても猶ほ爲さざるに勝れるを思つて、今後我國民はこの方面に對し格段の努力を傾倒すべきである。

何故に強制的補習教育が我國に實施せられざる乎

今日の場合、敵國獨逸の長所を稱揚することは世間の誤解を招く虞なしとしないが、予は偏に我帝國將來の大計の爲めに、その學ぶべき點を指摘して國民の參考に資せんと欲する以外、亦他意なきことを諒とせられたい。

抑も獨逸が戰前の強盛を致したる所以は、主として普佛戰後の發奮に基き、教育を一新したる所に存する。即ちフイヒテがこれを疾呼せし如く、一面祖國の傳統を重視すると共に、他面世界

の大勢を洞察し、國民的並びに民族的自覺を徹底せしめつゝ、而も徒らに歴史的自負に頼らずして能く新たに隆興せんとする國家の使命を覺知せしめたることは、獨逸新教育の偉大なる特長であつた。然るに、今次の大戦により、さしもの強大なりし獨逸が遂に一敗地に塗れたる所以は、これ其の勢に乗じて遂に正義人道を無視したる結果に外ならぬ。正義は最後の勝利たる以上、如何に強國なりと雖も、これを無視すれば必ず失敗を招くべきことは至明の理である。吾人は能くこの真相を了解して、彼の長所を範とし此の短所を戒となすことを誤つてはならない。

翻て我帝國が、維新以後歐米先進國の範に倣ひ諸般の施設を整へんとしたるは固より結構であるが、これを現状より觀察すれば、遺憾ながら、佛を彫んで魂を入れざるの感なきを得ない。即ち我國の一般教育は、今日依然たる舊來の徘徊願望的態度方針を脱離せず、その中心をなすものは主として形而上學的研究乃至非科學的思想である。歴史の尊むべきこと、傳統の重んずべきこととは何人もこれを否定しないが、而もそれが唯徒らに過去に對する自負や回顧に止まるならば、それは殆んど意義なしと謂はなければならぬ。恰も支那人が今なほ後世聖なしと稱して一に文武周公の世を謳歌するが如きものである。歴史と傳統とは、宜しく將來に於ける國運發展の根基としてこれを尊重し、この上に立つて飽くまで新時代に相應はしき進取的創始的教育を振興すること

こそ最も大切なる眼目であると思ふ。

彼の獨逸が、叙上の新教育方針を以て不斷に國運の伸長を圖り、特に自然科學の獎勵によつて國民全般に勤勞と創作との精神を鼓吹すると同時に、世界文明の先驅者たらんと努力したことは最も注目すべき點である。而も斯くの如きは、獨り獨逸のみならず、今や世界列強の等しく企圖する所である。されば、我帝國にありても亦須らくこの大勢に着眼し、現在及將來に於ける教育の重點を自然科學の振興とその的確なる活用とに置き、以て眞に新興國たるの面目と實力とを培養することを期せなければならぬ。

如上の見地に於て現下の我教育界を顧るとき、既に指摘せる如く、種々の缺陷を認めざるを得ないのであつて、これを救済するの策は固より一にして足らないが、予は茲にその急務として、先づ職業補習教育の義務的的制度設定を主張せんと欲するものである。

抑も職業補習教育の必要は、今更呶々するを須ひない。その之を如何にして普及改善すべきかと刻下の問題であらねばならぬ。これを實際に徴するも、歐米諸國に在りては勿論、我國に於ても大戦以來特に重視せられ又戦後經營の一大目標として、着眼せらるゝ所となつてゐる。然るにその實績の、我國に於て頗る微々屑々たるは何故であるか。予はその主なる原因として我國一般

の教育者並びに社會が、未だ眞個に職業補習教育の實質と價值とを了解してゐないからであると思ふ。或はこれが實施に際して横はる多少の難關に逢着し、又は之を想望して、躊躇逡巡するが故である。これ亦畢竟するに、その必要を痛感しないことに歸着する。眞に切迫的必要を認識するならば、そこに何等の遲疑滯滞が許さるべき筈がない。則ち爲さんとすれば必ず途あり、唯これを決行するの熱意と努力とを要するのみである。而してこの必要感を一層切實ならしめ、これを一般に徹底せしむることは、亦吾人の急務たることを感知するが故に、予は這般再度の渡歐に當りて、自ら見聞したる所を茲に紹介し、これを我日本の現状と比較對照することによつて世人の熟慮に懇へんと欲するものである。

瑞西に於ける強制的職業補習教育

予は一昨年(千九百十六年)八月の交、瑞西に遊んで、親しくベルン市(八月二十一日)、チュリツヒ市(同月三十一日)等に於ける職業補習學校の實狀を視察するの機會を得た。

ベルン市は人口八九萬を有するが、同市の補習學校は、市を中心に三キロメートル以内に居住する手工業、機械的職業、飲食店、宿泊所等に使役せらるゝ兒童の全部を收容してゐる。而して

農業に従事するもの以外は、皆これに就學するの義務を有つてゐる。修學年限は三年乃至四年で、月謝を徴收せず、男生は毎週晝夜三時間宛、女生は毎週晝間に限つて同じく三時間半の授業がある。若し許可なくして缺席すれば必ず處罰せらるゝの規定である。

予が視察した時の一組は、車輛工(Wagner)となるべき徒弟であつたが、その講師は同市に於て、自から車輛製造に従事せる實際家であつた。教科書ともいふべきものは、講師が自から作成せるところの車輛の圖面及其の説明書等であつて、生徒は約二十人であつた。

又人口五十餘萬を有するチュリツヒ市に於ては、補習學校の生徒全數約六千人、内女生約千二百人とのことであつた。毎週一度半乃至二度半登校し、少くとも一週六時間の授業を受くることとなつてゐる。教師は専任と囑託とがあり、予の參觀した時は、恰も一専任教師が、模型を示して製圖の授業を行つてゐた。この學校では校舎が狹隘なるため市内數ヶ所に借屋をして授業を行つてゐるので統一上不便を感じるのが缺點だとのことであつた。兎に角、これら兩市に於ける職業補習教育が何れも強制的義務的に行はれてゐることは最も注目すべき所である。

獨逸に於ける強制的職業補習教育

列強中職業補習教育の最も發達せるは戰前に於ける獨逸であつた。而してこれを義務的強制的となしたのも獨逸を以て嚆矢とする。その後これに倣へるものは、澳太利、瑞西で、その他としては英、米の一小部に實施された。斯くの如く獨逸が他の文明國に先んじてこの舉に出でたことは、獨逸當局の卓見を語るものであつて、戰前彼の國が目覺ましき繁盛を遂げ得たのも、確かにその主原因の一が此處に存することを斷定して憚らない。

抑も獨逸が義務的一般補習教育の制度を布くに至つたのは、今(大正七年)より約五十年前即ち西曆千八百七十六年一月一日のことであつた。元來この補習教育は、初等義務教育を終へたのみで、中等學校に入學しない子女の便宜と利益とを企圖したものであるが、この制度の任意的なりし時代に於ては、これに就學するものゝ歩合は僅かに五歩乃至二割に過ぎなかつた。これは主として雇主の好意、家庭の狀況、本人の健康状態、業務の性質、周圍の事情、將來の見込み等によつたものであるが、斯かる少數の就學に過ぎなかつた爲め、その成績は實際上殆んど失敗に歸したのであつた。こゝに於て政府當局も竟にこれを強制的となすの必要を感じ、斷然任意的制度を改めて義務的強制的補習教育制度を設定するに至つたのである。

千八百九十一年六月一日、獨逸政府の發布した實業法によれば、『雇主は十八歳以下の勞務者

を、政府又は地方自治團體の設立せる補習學校に入學せしめ、且つその學習に要する時間と與ふることを要す。』と規定せられ、又、市町村條令には『十八歳以下の男子には補習教育を義務制となすことを得。地方自治團體の統制者は、その條令に基き、前條の義務的補習教育を遂行するに必要なる處置を講じ、生徒の通學、訓練、操行等を確保するを以て、彼等の親權者、後見人、又は雇主の義務となすことを得。』而して『前條の規定を犯すものは二十マルクの罰金又は三日間の拘留に處す。』とある。然るに、この規定が出来ても、尙ハムブルヒその他二三の都市に於ては容易にこれを實施しなかつた。そこで獨逸商務大臣は、更に千八百九十九年八月三十一日附を以て、左の意味の訓令を發した。

『世上未だ強制的補習教育制度の、任意的補習教育制度に勝れる所以を知らざるものあれど、從來の經驗に徴するに、抑もこの教育たるや、市町村條令を以て強制的に施行することによりて、始めて其の目的を達成し得べきことを認む。苟もその成績を實際に擧げんと欲せば、須らく強制的な度を執らざるべからず。然らずんば、生徒の出席するもの少く従つて十分の授業をなし難く、又、彼等は口實を設けて、就學を免れんとし、或はたとひ生徒は自から進んで就學せんと希望を有するも、雇主等は自家の便宜のみを顧慮して、彼等にその自由を與へず、これがため明敏な

る頭腦を有し、勤勉なる精神を懐ける生徒すらも、竟に、その驥足を伸ぶるに由なくして終るの虞あり。これ嘗に生徒自身の不利益に止まらず、延いて國家社會に損失を與ふるものと謂はざるべからず。されば速かに強制的補習教育制度を實施し、生徒のみならず、雇主等にも亦すべて法律に本づく義務を課することによりて、これが實績を擧ぐるやう企圖すべきなり。云々』

この制度の實績を收むる上には、一方に於て、徒弟の従事する現在の職業及將來の見込みを參酌して、その學科を按排し、他方では、徒弟が十分なる教育を受け得る時間を與ふることが必要である。場合によれば雇主の繁閑の都合に従つて、多忙の際には時間を減少し、閑散なる時にその補講をなす等のことも可能であらう。要するに、この種の、凡そ十四歳以上十八歳以下位の徒弟教育を目的とする、強制的補習教育制度の要點は左の四項に歸着すると稱せられてゐる。

- (一) 雇主が眞實に徒弟教育の必要を自覺すること。
 - (二) 教育を受けたる徒弟自身の享有する利益と満足。
 - (三) 徒弟の従事する職業に應じて適當なる専門的教育を施すこと。
 - (四) 義務的初等教育終了後教育を繼續するの利便。
- 斯くして、上下の協力一致に依り、獨逸に於ける職業補習教育の効果は着々として擧がり、就

中ベルリン、ライプツヒ、ミュンヘン等の代表的都市に於けるその實績は殆んど間然する所なき状態に達し、而してこの根底ある實力の上に築かれた獨逸の商工業は、實に驚嘆すべき戦前の繁榮を誇示するを得たのであつた。

【追加附記】 獨逸は更に戦後に至りて憲法を改正し、その第四百四十五條に於て『就學はこれを一般義務とす。就學義務の履行は八學年以上を有する小學校及これを終りたる後滿十八歳に至るまで補習學校に修學することを以て原則とし、右小學校及補習學校に於ける教育及學用品は無償とす。』と規定せるのみでなく、場合によつては生活費までも支給して就學せしむるやうになり従つて戦前に比し文部省費は八倍、教育費のみでは實に十二倍に増額せられた。戦敗後の疲弊を以てして猶この英斷に出でたことは、如何にその決心の重大なるものあるか、窺はるゝであらう。

英米に於ける補習教育

獨逸に於ける義務的補習教育の振興に鑑みて、英國に於ても、既に戦前、これが實施の必要を主張するものがあつたが、戦時中より一層この叫びが大となつた。しかし本來、これが任意的制

度に依つてゐたことは我日本と同様で、そのため補習教育に就くものゝ歩合は、極めて少く、僅かに四分乃至二割を超えなかつた。

英國の狀況が何故に斯くの如きであつたかと云ふことに就いて、英國では、曩に夜間實業教育の制度を布くに方り、獨逸の如く國家主義を基調とせずして、寧ろ個人主義を本旨とし各生徒の意思を尊重することを念としたので、従つて學科の選擇も彼等の境遇、職業に拘らず全く隨意であり、而も未だ頭腦の幼稚なる生徒の常として、或は浮薄なる思想に迷はされ、或は單なる營業方法の變更、四圍の輿論の變化等の如き、殆んど取るに足らざる原因に動かされて、一旦選定したる學科も、隨意にこれを變更するの有様となり、自由の美名のもとに却つてこの惡弊を生ずるに至つたのであると論ずる者もあつた。

或は又次の如き説をなす者もあつた。獨逸では、高等專門學校程度の教育に於てさへも、學科の選擇の自由は學生に許されず、大學程度に及んで、始めてその自由が與へらるゝのである。これを英國の自由主義と比較すれば非常な逕庭がある。英國に於ては、かゝる組織のために、實業補習教育の必要が十分に認識せられ難く、従つて雇主は學校の價値を知らず、これに對して甚だ冷淡である。英國の都市、特に倫敦では、初等普通教育を終へたところの、十四歳乃至十五歳の

少年等は未だ將來の職業に對する明確なる觀念を有たないのに、右の放任主義のためその後にはける學校の選擇が適切を得ない。漸く十八歳位となつて自ら學科の選擇をなし得るに至るも、時に遅く、十分なる學習の時日を有たないため、自己の適否を顧みず、僅かの期間を以て數多の技術を授くるところの工業學校に集るといふ如き不便弊害を生ずるのである。かくて自由制度の下には勞費の多き割合に、その効果が甚だ乏しい。これを矯正するには、一に強制的補習教育制度によるの外はないといふのである。

これらに依つて見ても、英國の識者の意見乃至輿論が、實業徒弟問題の解決のために強制的補習教育の必要を高調するに傾きつゝあることが看取さるゝのである。

果せる哉、昨年（大正六年）八月一日英國文相フィツシャー氏は教育制度改革法案を下院に提出した。本案は戰後教育調査會の報告によつて立案したもので、實に千八百七十年以來の大改革であると稱せられてゐる。その要點は左の通りである。

- 一、五歳以下の幼兒に對して幼兒學校を設立すること。
- 二、義務教育年限を九個年とし五歳より十四歳迄の兒童をして總て義務的に就學せしむること、但し地方學務當局の希望に依り義務年限を五歳乃至十五歳の十個年と定むることを

得。

三、前項の義務教育修了後十八歳に至るまでは一箇年三百二十時間より少からざる補習教育を義務的に受けしむること、但し十六歳まで完全なる補習教育を受けたる者又は補習教育卒業試験に及第したる者は之を除外すること。

四、補習教育は體育に重きを置くこと。

五、十二歳未満の兒童は之を營利事業に使役することを得ざること。

六、十二歳乃至十四歳の兒童を勞役に服せしむる場合には嚴重なる制限を附すること。等

而して右案は多少の修正を経て可決せらるゝに至つた由である。以て、戦後英國に於けるこの方面の覺醒奮起を察知することが出来る。

又北米合衆國に於ては、近年までは矢張り一般に任意的制度であつたが、先づウイスコニン州が強制的制度の先鞭を着け、初等教育終了後滿十八歳まで毎週六時間以上の修學を強制することとした。次いでペンシルヴァニア州も亦これに倣つた。而して戦後愛國心の涵養と優秀勞働者養成の必要が國民の輿論となり、遂に千九百十七年合衆國兩院は所謂スミス、ヒュース法案を通過せしめて實業補習教育に對する國庫補助の支出を可決した。而して千九百十九年にはこの條令

に基き十九州が相踵いで強制的補習教育制度を布き、その後大勢は益々これに傾きつゝある。(米國の項追加附記)

我國の補習教育と獨逸の夫れとの比較

翻て我國に於ても、先年來設置されたる臨時教育調査會に於ては義務的補習教育の施行を希望條件として決議してゐる。而も未だ之を實現するの狀勢に立至らないことは甚だ遺憾である。さりながら以前に比較すれば近來大都市に於ける補習教育は可なり盛んとなつて來た。殊に我京都市に於ける補習教育が昨年來大にその面目を改め盛況を呈するに至つたことは欣賀に堪へない次第で、市當局者の勞を多とせざるを得ない。併し我國に於ては上述の如く未だ何れも任意的制度であるから、仔細なる統計的調査によれば、遺憾ながら極めて微々たる數字を示すに過ぎざるべく、最も補習教育を必要とする大多數の子弟は殆んど之を受けざる現狀にあることは、苟くも我國運の發展を念とするものゝ到底看過すべからざる事態である。

獨逸に於ても特にこの補習教育制度の完備してゐるのはベルリン市並びにミュンヘン市であると稱せられてゐる。我國の義務教育よりも二箇年永き八ヶ年の初等義務教育を了へたる滿十四歳

の獨逸兒童は、更に進んで中等學校に入る者も少くないが、その大多數は、直ちに一定の職業に就くのである。而して、日本ならば、それ以後は殆んど何等の教育をも施さずに放任せらるるのであるが、獨逸では、その實際に従事せる職業に對し更に三四ケ年間毎週六時間乃至八時間の強制的補習教育（小學校を通じて其の課程中、日本の「修身」に相當する科目は「宗教」と稱せられ、滿十六歳位まで之を授けるがそれを受持つのは牧師である。即ち日本と異なり、學校に於て滿十六歳位まで信仰教育を與へて居る。且つ又獨逸では法律を以つて國民は信仰を有たねばならぬと規定してある）を施し、且つその業務に應じて特殊の課程を與ふる爲め、クラスを細分してゐる。ミュンヘン市ではこれ等の異なるクラスの數が五十六、ベルリン市では實に一千百に上つてゐるといふ。そのクラスの主なるものは、鍛冶工、車輪工、運轉士、料理人、バター職人、給仕人、煙突掃除夫、火夫、靴工、活版工、園丁、理髮師、手傳職、商店の徒弟その他各種である。而して、ベルリンでも、ミュンヘンでも、これ等の補習科生中、工業（雜業を含む）に従事する者に對し、商家の番頭或は丁稚として商業に従事する者の割合は、僅かにその二割位に過ぎないことは日本の狀態に比して著しき相違である。（大正元—二年調）。今、日本の實業補習學校入學者に就いて見るに、大正三年度の調査によれば

工業……………一萬八百六十名
商業……………二萬百八十四名
農業……………十三萬五百四十五名

即ち、商の工に對する割合は獨逸に於ては僅かに二割であるのに、日本に於ては殆んど二倍となつてゐる。又これを我京都市に就いて見るに、大正七年度に於て、滿二十歳以下の京都市在住の男子約五萬人（學齡兒童を除く）の内、高等小學以上の學校に在學せる者は左の通りである。

中等學校	約三千五百名	商業學校	一千九百名
實業學校	約二千四百名	工業學校	五百名
高等小學校	約一千六百名		
合計	約七千五百名		

これを五萬人中より差引きたる爾餘の四萬二千五百名は、何れも補習教育を必要とすべきものであるが、其の内商工補習學校に入學せる第一期生（四月入學、九月修了）は漸く一千六百十九名に過ぎない。即ち約四パーセントに足らざる少數で、百名中九十六名は補習教育を受けない勘定であるから、實際上殆んど補習教育は行はれてゐないと言つて差支へない。この内、工に志すものと商に志すものとの割合は精確には分らないが、上述の實業學校に於ける生徒のみに就いて見

れば、工は商に比較して僅かに四分の一強に過ぎない。又本年(大正七年)十月京都市補習學校入學の第二期生(十月入學、翌年三月終了)は總數一千四百八十名でその内商業科六百二十名、工業科三百十五名であるからこれ亦工は商に比し半數を多く出でない。日本全國に於ける正確なる統計を求むることは未だ困難であるが、これ等の實例に徴するも大體に於て我國の青年子弟は工業技術者たらんとするよりも商業家たらんとする志望の方が遙かに盛んなることが分る。斯の如く商業家が多くして技術者が少ないといふ有様は、これを一面より見れば日本人の大多數は自から製産的事業に努めんとするよりは寧ろ仲介代辦的業務に従はんとする傾向のあることを表明してゐるもので、日本の將來に對し甚だ面白からぬ趨勢であると思ふ。

高等教育に於ても亦然り、獨逸の工科大學生は一萬六千四百餘名(大正元—二年調)、法科大學生の約一倍半に當り、日本の工科大學生は一千六百三十名(大正元—二年調)、法科大學生(官立私立共)の一萬一千六百五十七名に比し僅々一割四分に過ぎない。而も獨逸の工科大學生の十分の一と云ふ貧弱なる有様である。これを換言すれば、我國に於ては、徒らに口の人たらんとする者多く手の人たらんとする者少なき傾向を示し、頗る遺憾の現象とせなければならぬ。

商、法多くして工少なきは如何に國運の發展を延遲せしむる乎

抑も吾人の念慮すべき所は、平時に於ては、優秀なる技術者及職工の力に依り、安價、優良にして且つ豊富なる工業製品を得、以て世界の經濟戰線に勝を制すると同時に國運の隆昌を圖るにあり、又一朝干戈を動かすべき時には所謂工業動員に依りて武器その他の軍需品を始め萬般の機械器具及船舶の製作建造等に至るまで萬遺漏なきを期せなければならぬ。彼の英國が今回の戰亂に際し平時に比して約三十倍の工場を要したる事實に徴しても、國家として如何に多數の教養ある技術者及職工を必要とするかを推知するに難くないであらう。獨逸では斯くの如き工業的軍隊を「進歩の武器」と稱してゐるが、予は現代世界の氣勢に照らし、實に國家發展の尺度は科學者、技術者、教養ある職工その他技術的能力を有する國民の多少にありと斷言して憚らないのである。試にその影響する所を見よ、例へば我國には何故に發明の出現乏しきか、彼の獨逸は人口六千に對し一個の發明を成すに比し、我日本は人口三萬五千に對し漸く一個の發明を成すに過ぎない。世人は往々我國に發明の少き理由として我國民に創始的腦力を缺ける結果なりと臆斷するも

のあるを聞くも、予はその主なる原因を、我國に於ける科學教育の不備と、従つて科學者、技術者、職工等の甚だ少數なるとに歸せざるを得ない。國民の素質能力に於ては斷じて歐米人に遜色なきを信ずるものである。蓋し政治、法律、經濟、文學、その他この種の形而上學を專攻する者に向つて科學的發明を期待するは寧ろ無理なる注文と謂ふべきであらう。然るに科學者、技術者、職工等の數が爾かく僅少なると、その割合上發明の少數なるは止むを得ない。換言すれば、發明の隆盛を希望しながら、その適切なる方法を盡さざる所に吾人の罪があると思ふ。然り而して發明の少なき國家は勢ひ發展の遅々たるを免れないとすれば、この點より見ても科學教育、工業教育の特に緊切なる所以は自ら明白である。

又我國現時の工業を見よ、各々分立割據して個々別々に進まんとする傾向を有し、米國等に於ける如く互に協調或は合同して大規模の事業となし以てその基礎を一層強固ならしめんとする計畫の乏しきことは、これ亦、手の人たる技術者、職工の數が過少であつて、口の人たる政治、法律、經濟等の專攻者が過多なるに基因する點が無いとは云へない。それ故我國工業會社の重役は概ね出資者か然らざれば實踐の人たらざる如上口舌の士がその地位を占め、歐米に於ける如く技術家出身の經營者は極めて少なく、従つて自然、事業の中樞たる技術に對する理解を缺き、多く

は形式に走りて管理運用の要點を逸するの虞あることは特に反省すべき事柄であると思ふ。

之を要するに、國運の發展は最も多く工業に待たざる可からざる今日の趨勢に於ては、商、法に向ふものを轉じて理、工に赴かしめ、以て商業家、法律家の過多、科學者、技術家の不足を救ふの方法を講ずることは實に我國刻下の最大急務と謂はねばならぬ。今後若し依然たる舊態を存續するに於ては、青少年の前途並びに國家の將來に對し全く懸念に堪へないのである。

是れ畢竟我國民一般が未だ世界の氣勢に通せず、島國的因習に捉はれて、その病根を痛感せざるに由る結果ではあるまいか。されば速かにこの缺陷を改善せんが爲め、須らく宇内の形勢に鑑み、我國家の地位に顧みて、國民上下大に覺醒する所がなくてはならない。

獨逸の職業補習教育に於ける公民學と其の經費

獨逸に於ける補習學校の教科に就いて、特に注目を値するは、その「公民學」に重きを置けることである。抑も人として此の世に生を享けたるものは必ずや何等かの方法に依り社會人類の爲に貢獻することを以てその使命としなければならぬ。こゝに於て人各々その適する所好む所に従つて夫々の職業を擇び、以て一身一家の生活を確保すると同時に國家社會に對する本分を完う

すべきものである。かるが故に、各人は徒にその職業の傳承的因習に固着し將た苟且偷安を事とすることなく、よく時勢の要求を察知するの明を養ひ、これに適應するの修養を怠らず、以て能ふ限り大なる能率を發揮せんことを力むべきである。この意味に於て、假令一介の職工と雖も、單なる「手足の人夫」に終らずして、教養あり技能ある職匠エキスパートたるべく心掛けねばならぬ。公民學は實にかくの如き根本必須の素地を修得せしめんがために課せらるゝものである。

されば、公民學の内容としては、先づ當該職業の發達の歴史を明かにし、これに依つて各自の従事する業務の社會的地位を自覺せしめ、同時にこの方面に於て社會人類の爲に意義ある貢獻を爲し遂げたる人物の範例を示し、更に進んで國家社會に對する各自の權利、並びに義務を教ふることにしてゐる。かくてこれ等の基礎的教養を施したる上、適宜の技術的教育を進むるのである。今、ミュンヘン市補習學校の大工科について、その教科の實例を示せば、以上の如き基礎的智識の上に、徒弟入門、材料學、材料運搬、營業に關する一般教育、衛生、國家及地方自治團體が公共のために行ふ行政、實地建築學、建築業の價值、書式、手紙、商業作文、實業算術、圖畫等を授け、毎週總計三十六時間、三ヶ年を以て修業年限としてゐる。又職業によつては四個年を要するものもある。而して、特に戰後の公民教育は、智的能力の増進よりも、先づ人格を陶冶して

國家社會に對する奉仕的精神の徹底を第一義とし、國家的精神、國際的精神、將又社會的精神の啓發に向つて一層力を注ぎ、尙又労働科を特設して労働に對する敬愛の念を涵養せしむるに努め以て肉體的労働と精神的活動との融合統一を重んずるやうになつた。斯くの如き基礎的教化の力に依り、公民としての須要なる信念と覺悟とを十分に注入したる上、更に實科としての専門技術を組織的に授け、その科學的修業鍊磨の成就を待つて、茲に始めて精神、科學相融合せる一個の職業人として實社會に獨立すべき資格が與へらるゝのである。これを我國一般の職工、労働者、大工、左官、園丁等が殆んど何等の組織的教養訓練も無く、概ね唯糊口の爲に日々の業務に就けると對比すれば、その意義効果の大小、固より同日の談でなす。

試に見よ、最近の我國工業界に於ては職工の自儘に缺勤する者が頗る倍増して來たとのことである。恐らく昨今の景氣により彼等の収入が増加し、而も職業上の義務的觀念が薄いため、その収入を空費しながら偷安座食する者の多きに因る結果ではあるまいか。又鑛山に於ける坑夫の如きも、その収入の増加と共に遊惰に流れ、缺勤者續出し、従つて鑛山としては勞銀の支出が劇増しながら却つてその産額を減するの異現象を呈するに至つたと聞く。或は又下婢等の如きも徒らに安逸なる家庭を選び自ら訓練修養の功を積むの念慮に乏しき者が風をなしてゐる。その他これ

に類する例は枚舉に遑がない。而も雇主にして偶々彼等の非を責むることあらんか、彼等は却つて改悛の状を示さざるのみか、直ちに怒を發し他に轉じ去りてまた顧みざるの有様である。更に又その職業上必要な智識を缺けることは、例へば菓子職が顔料の選定を誤つて衛生上有害なる結果を與ふるが如き處あるに見ても推察さるゝのである。

又我國の義務教育は、獨逸の八個年なるに比し六個年であり、大抵滿十二歳にてその業を卒はることゝなつてゐる。此の如き若年では、學校に於ける教科も、さながら夢の如く彼等の腦裡に記憶せらるゝのみで、自らこれを理解し咀嚼して、實際生活に活用するには甚だ不十分と謂ふべきであらう。然るに若しその後更に數年間を期し彼等に適宜の教化指導を與ふるならば、恰も將に成熟せんとする年輩であるから、その習得する所を能く了解し、従つてこれを實地に應用する上に於ても非常に有効であると思ふ。この點より見ても亦補習教育の意義は明かである。

獨逸に於ける補習教育の經費は主に當該都市と政府との共同負擔である。管理は實業家の委員と市當局者との手に委ねられ、教師は專任の者と實地の職に従事する人々より選抜囑託せる者とがあり、その中には最高學府出身の權威者も少くない。

さて、強制的補習教育制度の新たなる實施に對し、雇主等は直接眼前の不便と打撃とを恐るゝ

所から、獨逸に於ても當初は可なり反對の氣勢を揚げ、後に至つても、私かに制度の不備に乗じ、若くは當局の眼を掠めて、この制度の埒外に立たんとした者もあつた。けれども、政府當局の熱誠と、自治團體の努力とは、遂に能くこれを抑壓し、彼等をして、眞にその教育の本質と價値とを覺らしむるに至つたのである。こゝに於てか、今や全くこれに反對するものなく、却つてその隆盛を助くる爲め金品の寄附等を申出づる雇主も少くないとのことである。これ亦、我國民の深く参考に資すべき所と思ふ。

職工及農民に關する彼我の相違と現代の兵士

實業補習教育の強制々度、これを予は假りに「實業界の徴兵制度」と稱してゐるが、この制度は實に平和の産業戰に於ける精銳なる兵卒を養成するものである。今や我國産業界に於ける將校下士とも云ふべき技師、技手は大學、専門學校等の出身者によつて相當に得らるゝが、訓練教養を受けたる兵卒に當る所の優秀なる職工労働者は極めて少數なる有様ではないか。今若し我陸軍の兵卒をして志願制度に一任し去つたとせば如何。到底今日の如き強大精銳なる軍隊を充實せしむること能はざるは、多言を要せずして知るべきである。實業補習教育に於ても亦同様であつて、

舊來の任意制度に放任する限り、殊に我國の如き未だ科學教育に冷淡不熱心なる一般の風潮に在りては、決して多數の精練せられたる工匠の得べからざることは、火を賭るよりも明かである。

然るに、今適當なる義務的の制度を設定して極力この教育の振興を圖る時は、その結果當に從來輕視せられたる科學に對する我國民の理解と興味とを刺戟昂進せしむるのみならず、併せて直ちに國家民衆の福利を増進し國運の發展を助長するの可能性を包藏するのである。即ち將來この方面に向ふべき兒童の全部に對し適切有效なる職業的補習教育を授くることを得たならば、彼等自身の向上進歩は云ふまでもなく、我國一般生産事業の能率は數等を倍加し従つて品質優良、價格低廉の實を擧げられ、期せずして我國力の充實伸長を招來し得ることは毫も疑ひを容れない所である。

更に又、農業方面に就いて觀るに、獨逸と日本とは何れも自國の農產量を以て不足を感じる程度にあること略同一である。而も農業に従事するもの數は、彼我の耕作法に於て多少の差異ありとは云へ、獨逸は全人口の約三割なるに比し、日本は約六割餘に當つてゐる。この事實は何を語るかといふに、日本の農夫は、同一の收穫を擧ぐるに獨逸の農夫の約二倍の勞力を拂つてゐることである。換言すれば日本の農夫はその能率に於て獨逸の半分である。つまり國民が同様に食

うてゆく爲めに我は彼の二倍の人數が働かねばならぬことになる。さればこの點に關しても、須らく我農民の幾割かを轉じて、他の工業の如き生産事業に向はしむるやうにせねばならぬ。即ち一面では、農業の效率を昂上する爲にその科學的改善を急務とするのである。これがためには、土地の整理、農具の改良、機械力の應用、肥料の精選、種子の選擇等、總て正確なる科學的智識に據らなければならぬ。これ等が適當の方策を得たならば、所謂食糧問題、農民疲弊問題の如きも案外容易に解決さるゝであらう。今日農村問題の研究者、評論家中には、農村子女の都市集中を一概に非難して、漫然歸農を説くものあるを聞くが、這是所謂一を知りて二を知らざる者であるまいか。都鄙を問はず、青年子女をして今少しく科學的ならしめば、その都會に出づる者も、田園に留まる者も、共に一層合理的なる生活を営ましめ、而も同時に國利民福を増進せしむるの方途に合致すべきことを疑はない。この見地より吾人は、今日農村の科學的改善を重要視すると共に叙上の冗員を宜しく工業界に移して國家有用の職匠たらしむべしと主張するものである。尙又今後の戰爭は専ら精銳なる兵器の競争に歸着することは歐洲大戰の經驗に徴しても敢て説明を要しない。従つてこれを取扱ふ所の兵士は須らく科學的智識能力を有するものでなければならぬ。而も我國現時の特に農村子弟は殆んどこの方面に對する能力を缺如してゐるから、新時

代の兵士として適當といへない。この點より見て機械の取扱に馴れたる職工の方がより適任である。されば工業労働者のみならず農民に對しても努めて科學的智識を採り入れしむることの必要は、國防問題の上より考へても推斷せらるゝのである。我國は他の列強に比して天然資源に乏しく、その國富も未だ低きことを思へば、吾人が居常座臥の間、切に省慮すべく、作爲すべき事を甚だ重且つ大なるを感じざるを得ない。而して吾人は速かに工業思想を徹底せしめ、工業製産物を豊富ならしむることによりて、この缺陷を匡救することこそ刻下に於ける最大急務たることを痛感するものである。又これと同時に重要な國防問題の如きも、斯かる工業の發達に依り富力の増進を圖ることを得ば、自ら適當なる解決に到達すべきこと敢て想像に難くない。

我國の教育方針は果して徹底せる乎

予は上來、主に實業補習教育の方面に就いて論じたのであるが、これを廣く教育全體について言へば、日本の教育は遺憾ながら甚だ迂遠なるを免れないと思ふ。即ち眞に經國的識見を以て今日の急務に適するものが極めて少ない。言ひ換ふれば、國民はその傳統的非科學的教育の然らしむるところ、世界の太勢に背馳して、生産的よりもむしろ消費的なる生活に終始せんとする傾向

を有することは、最も憂慮すべき大缺點である。

我國教育の大綱は、畏くも、教育勅語に宣明せられ、秋毫の疑義を挿むべき餘地もないが、而も之を實行するに當り果して能く聖旨の徹底を得つゝあるかに至つては、予輩の少からず疑問とする所である。今日教育を受けたる青年子弟に就いて見るに、その修養の如何にも不徹底にして且つ迂遠なる、將た又遊戯的道樂的なる點に於て甚しき不安を感じざるを得ないのである。成るほど彼等學校卒業者が社會の實生活に投じたる初期に於ては相當眞面目なる活動を念とする所なしとしない。併しその緊張が果して何時まで持續せらるゝの實狀にあるか、彼等がその子を見、その孫を得るに及んで尙能く從前の意氣と活力とを發揮しつゝあるか。否、遺憾ながら彼等の多數はその餘暇と財力とを、或は謡曲、圍碁、和歌俳誹、骨董等の趣味的閑戲的方面に傾投することを以つて能事とするの風があるではないか。而も甚しきは、斯くの如き老後（又は壯時）に於ける遊閑的娛樂を以つて高等階級乃至知識階級のみを占有し得る境地なるかの如く心得てひそかに得々然たるものがある。夫の獨逸のツェツペリン伯が晩年の生活を、飛行船の發達の爲に捧げたるが如き熱誠は殆ど見ることが出来ない。老後に至るまで青年の氣性を失はざらんとして運動體育等に熱心なる歐米人と我國の所謂樂隱居と、如何にその差異の甚だしきや。これ等の點は歐

米人の體格や健康状態と日本人のそれとを對比してみても思ひ半ばに過ぐるものがあらう。大澤謙二博士は、我國犯罪の九割は酒に歸因すと云つてゐるが而も未成年禁酒法さへ實行されない不徹底の現状は何の故であるか。予は常に青年學生を戒めて曰く、輕々しく老人先輩を模倣すること勿れ、老人先輩が好んで圍碁、謡曲、骨董、飲酒等に耽つてゐるのは過去の因習を脱却し得ない弊風であるが、將來ある青年は敢てこれを咎め立てするよりも進んで自らこれを改むるに勇敢でなければならぬ。そこに文明の進歩が發芽し國運の伸展が招來せらるゝのであると。勿論、趣味嗜好は或る程度まで各人の固有に屬し、強ち一般的に強制し得べきものではないが、而も個人の趣味は一面その修養鍛鍊の如何によつて高下何れにも歸導し得べきものと思ふ。徒らに花鳥を翫び風月を侶とする如きことのみが高尙なる趣味ではない、否、宜しく國家社會の前途を考慮して然る後これを選択する如き公人的態度を希望したい。然るに日本に於ては先輩識者を始めとして前述の如き因襲に泥み今日に至つて猶ほ自己一身はともかく後進子弟の爲にこれが矯正に留意するもの殆んど之れ無き有様より見ても、現時の教育は果して徹底せるものと云ひ得るであらうか。

人間の興味は、實生活に密接することに於て、最も深刻であり最も豊富であり、且つ持久的である。實生活と遊離せるところに求め得たる興味や娛樂は寧ろ贅澤であり、浮薄である。眞實に

人間生活に滲透してこれを根柢より理解するものは、その趣味を求むるに當つても決して後者の態度でなく必ず前者の立場よりするものである。日本の教育は即ち前者を作るに適せずして、後者を多からしむるの傾向はなかつたであらうか。若し果して然らば、これを救済するには、是非共教育の方針を一層實生活と密接せしむべき工夫を主眼とせねばならぬ。予が特に工業教育の振興に就いて力説する一面の理由も亦茲に存するのである。

叙上の見地より、少しく今日の小學校教科書を検べて見たい。尤もこれは予の専門外のことであるから、詳細に論ずることは出来ないが、特に心付きたる二三の點を指摘してみれば、先づ地理書については、神社佛閣その他所謂名所舊跡といふ如きものは概ね洩らす所がないけれども、生産的な、工業的な方面の知識は著しく閑却されてゐるやうである。又讀本について見ても、徒に咏嘆的文章や、今日の時代から見れば頗る考慮を要すべきやうな史話傳説類や、花鳥風月の閑文字等が比較的大部分を占めてゐるに反し現代生活並に將來の文明の上に密接重大なる影響を有する所の科學的材料には甚だ乏しい。日常生活の要素たる電燈、瓦斯等や製造工場等に關する一通りの常識は是非共與ふべきであらう。或はこれを以て理科の教科に讓るべきものと言ふかも知れないが、併しそこが問題である。同じ勞費に對しても、その効果を倍蓰すべき方策があるなら

ば、宜しくそれを選むことは遙かに賢明なる方法であらねばならぬ。斯かる方針にして能く徹底するならば、例へば各戸に普及せる電燈にしても、たとひ定額料金制に依るとは言へ不用の場合點火の儘放置して電力を空費する如き不注意の起るべき筈がない。それ故、教育者たるものは、その非なる所以を兒童に教へ兒童はこれを父兄に傳へて共にその弊風を一掃する位の覺悟でなければならぬ。然るに斯の如き急要なる實際問題に向心附かないのは、これ我教育の不徹底なる爲ではないか。又讀本の中に「世界の話」といふのがある。そこにも單なる名所案内的の叙述が少くないが、殊に不可解に感ぜらるゝのは、「北米合衆國は農、商、工業共に盛なり」といふ意味のことが記され、進んで獨逸を語るに當りては「獨逸は學問の盛なる國なり」とあるのみである。北米合衆國に比して、獨逸が單に學問の國とのみ印象せしむることは果して正當なりや。又善行者の模範とし、或は愛國者の龜鑑として示さるゝ例話の人物が、多くはみな貧困の人であつたり、寡寡孤獨であつたり、政治家とか軍人であつたりすることは如何、偉大なる發明家や科學者は尊敬すべき愛國者ではないのか、模範とすべき偉人ではないのか。試みにその立身の理想を小學兒童に聽け、男兒は大臣たらすんば元帥、大將たらんとし、女兒は慈善家たらすんば看護婦たらんことを希ふ者が最も多いといふ話ではないか。大臣、大將、慈善家、看護婦、固より結構である

が、これ等のみが國家有用の材でないことを兒童達に自覺せしめてゐるか。科學者、技術者、教養ある職工、又主にこれ等より生るゝ發明家が何故に我國には少ないのであるか、正に教育者の三省すべき所と思ふ。

又、圖書について見ても、多くは實生活と隔絶せる題材や手法を教授することに腐心してゐる。毛筆畫も水彩畫も決して無用とはいへまい。けれども、予はこれら以外にも適切なるものゝあることを認めざるを得ない、基礎的製圖や用器畫の如き即ちこれである。これに關して、こゝに多く説明するの要はないが、例へば平面、側面、並びに斷面圖の大要を知るのみにても、如何に實生活に裨益することの多きは自明の理である。

更に實際方面について見れば、何れの學校にも行はるゝ所の遠足、旅行の如きも、從來の儘を以つて最善の方法とすべきであらうか。否と答ふるに予は躊躇しない。即ちたゞ名勝舊跡等を歴訪するのみでなく、努めて製作工場等をも參觀することが、如何に兒童將來のため有益であるか。此處に炎暑寒冷を顧みる追もなく、營々孜々として勤勞せる人達を見るとき、又その諸種の設備に接する時、兒童をして實生活の努力精勵と科學文明の進歩活用とを直接に會得せしむることが出来るではないか、而して教育と生活との關係を實地に理解せしめ得るではないか。

又、綴り方にせよ、從來の如く叙景抒情文を主題とせず、寧ろ工場參觀記などを課する方が遙かに切實なる生活味を兒童の頭に染み込ませ得ることは明かである。

尙一々數へ來ればその煩に堪へないであらう。さりとて、予は、固より歴史を閑却し、風趣を無視せんとする者ではない。併しながら既に日本の教育が從來乃至現在に於て、科學的、生産的方面に甚しく無爲、不熱心なるの缺陷を認識せらるゝ以上、敢て反動的意味にあらずとも、國家發展の必要上、特に専らこの方面に力點を置かんとすることは決して不當ではないと信ずる。

須らく強制々度を斷行すべし

これを要するに、我國教育の發達を期するには固より斯界の全般に亘りてその刷新改善を圖らねばならぬが、就中予が茲に自然科學の應用を主とせる工業教育の振興特に強制的職業補習教育の必要に就いて力説する所以は、既往の缺陷、現下の時局、將た又國家永遠の大計より考察して眞に焦眉の急務たるを痛感するが故である。且つ又勞働者その他貧困なる家庭より見ても、この強制的制度の確立こそは、最も歡迎すべき福音と謂ふべきではないか。然るに悲しいかな今日まで事實に於てこれが設定を見るに至らないのは、未だ眞個にこの方面を重要視する輿論の氣勢の

揚がらざるが爲めである。近來喧しき彼の選舉權擴張論の基礎たるべき公民的資格の如きも、この教育に依つて始めてその完きを得るであらう。然らば、これこそ當に普通選舉の輿論に先行すべきものと思ふ。若し夫れ實施の具體的内容に至つては必ずしも一々歐米の先例を追ふを要せず否宜しく我國情に鑑み適切なる獨自の方策を選ぶべきであらう。予は繰返して言ふ、爲さんとすれば必ず途あり、一にこれを斷行するの熱意と勇氣とを全國民に對し切望して止まない。

熟ら思ふに、我日本人ほどその富力の程度に比して贅澤なる國民はない。彼等が漫然消費する財貨を、必要なる方面に轉ぜしむるに於ては、恐らく如何なる事業もこれを行ひ得るであらう。尠くとも國家が時代の要求に應じて緊要事となすものを施行することは決して難事ではないと思ふ。獨逸がナポレオン戦争後に於ける臥薪嘗膽の有様や又今次の大戦に於ける列國の堅忍努力、或は斷然として禁酒令を實施せる米國の意氣込等に鑑み、而も國運隆興の基礎が茲に存することを自覺するならば、國民の奮起は固より當然である。然るに悲しむべし我國は歐米列強に比し依然として覺醒が足りない。予が一昨年（大正五年）歐米視察の際にも、世界の氣勢に通曉せる在外同胞が想ひを故國の現状に馳らせて、ひそかに憤懣慨嘆の情を寄するもの實に一再でなかつた。苟も世界の新興國として、自他共に許す日本が、徒らに傳承の羈束に甘んじて、眞に新興の

銳氣を發する能はざるが如きは、吾に我國運の發展上遺憾極まるのみならず、世界文明に對する大和民族の使命に顧みて實に一大恥辱と謂はざるを得ない。茲に我國教育の改善進歩を冀ふの餘り敢て卑見を披瀝して、識者の批正を仰ぐ次第である。【追加附記】予が去る大正七年右の一論を發表してより既に十五六年を経過せる今日、斯界の實狀は果して如何。左に最近の統計により全國の概況並びに京都市に於ける狀況を摘記し以てその依然たる缺陷に對し世人の注意を再起したい。

全國概況 (昭和五年度)

- 一、全國實補學校數 一五、〇一九校
- 二、全國實補生徒數 滿十二年ヨリ滿二十年未滿ノ青少年子女ニシテ補習教育ヲ受クベキモノ五〇〇萬人(推定)中就學者左ノ通りデアル。
男 九二七、六二七 計一、三五四、〇七四人
女 四二六、四四七 約一、五〇〇萬圓(一校平均一、〇〇〇圓)
- 三、全國實補經費 約一、五〇〇萬圓(一校平均一、〇〇〇圓)
- 四、全國市町村教育費對實補經費百分比 (町村) 七・七% (何レモ極メテ少額)
- 五、全國中獨立校舍ヲ有スル實補學校數 (市) 三・二% (何レモ極メテ少額) 二七六校
- 六、全國中専用教室ヲ有スル實補學校數 六五二校
- 七、全國中既設ノ一般學校ニ併設セル實補學校數 一四、〇九一校(即チ大多數ハ併設校ニシテ設備甚ダ貧弱)

京都市ノ狀況 (昭和八年度)

- 一、京都市公立實補學校數 (市立校) 四〇一
- 二、京都市ニ於ケル實補生徒數 (學區經營) 約 五、〇〇〇人
- 三、京都市ニ於ケル尋常小學校卒業兒童調 五、一九二人
卒業兒童 一五、二九七人内 (中等學校入學者 五、八九一人)
(高等小學校入學者 五、八九一人)
- 四、高等小學校卒業兒童調 殘員四、二二四人中實業補習學校ニ入學スルモノ五〇〇人内外ニ過ギヌ。別ニ特殊學校入學ヲ除キ大多數ハ前途ノ學習ヲ斷絶シ就職又ハ家庭ニ止マルモノデアアル。
- 五、經費 三、二二九人(内中等學校入學者二三三人、補習學校入學者約五〇〇人) 一四四、六五五圓 (市立校) 五六、〇四五圓 (學區經營校) 八八、六一〇圓

要 望 事 項

- 一、補習學校ノ規程ヲ改正シ義務制トスルニト。
- 二、補習學校ト青年訓練所トヲ統合スルコト。
- 三、補習學校ノ専任教員ノ定員ヲ規定スルコト。
- 四、都市實業補習學校教員ノ養成機關ヲ特設スルコト。
- 五、獨立ノ校舍又ハ専用教室ヲ設クルコト。
- 六、補習學校卒業者ニ相當ノ資格ヲ與フルコト。
- 七、國庫並ニ府縣ヨリ市町村ヘ相當ノ補助金ヲ交付スルコト。

全國概況

學制頒布五十年 (大正十二年一月)

一

學制頒布されて茲に五十年、之が記念の式典は既に昨秋全國に亘つて花々しく舉行せられ、人々は我が文教の成長を祝福した。併しながら我國の實狀は果して之に伴ふだけの教育的効果を收め得てゐるだらうかといふことに就いては、ひそかに疑問なきを得ない。例へば今日、我國の物價は世界中で一番高く、爲に國民は生活の安定を奪はれようとしてゐる如き、最も憂ふべき現象の一と謂はねばならぬ。一體、教育が徹底すれば人々の人格は向上し其の才能は伸長してそれだけ世の中は改善され従つて生活の基本たる産業方面に於ても精神的に蔭日向なく奮勵すると同時に進歩した學問を應用する結果として品質の優良、價格の低廉、且つ潤澤なる供給が行はねばならぬわけである。然るに今や相當に教育が普及したと稱する我國が寧ろ之と反對の傾向に在るのはどうしたことか、勿論世の中はさう簡単に理窟通りゆかぬと謂へるだらうが、併し私は現在の我國社會状態を見るにつけ大きな根本的の矛盾と誤謬とを感ぜざるを得ない。而して其の原因を詮じ

つめてみると教育の缺陷、殊に自然科学に關する教育の不徹底に歸着すると思ふのである。

二

毎度云ふことであるが、我國人の大多數は自然科学に關する教育の訓練が足りない爲め其の智識が甚だ貧弱で、従つて自然科学といふものに對する本當の理解を有つてゐない。我々の生存上自然科学が如何に有意義なものであるかといふ理由を徹底的に了解してゐない。唯漠然と自然科学は生活に便利なものだ位に思つてゐる。否、甚しきに至つては、自然科学を以て現代的病弊たる物質偏重主義の根源である如く見做す短見者さへ少くない。偶々自然科学の惡用された結果を見て自然科学其の者を非毀するのは、邪教の害毒に驚いて宗教を否定しようとする者と同斷である。貪婪なる一部の事業者が自然科学を方便として私慾を營まんとするならば、それは神の與へた理法を究むる神聖な自然科学を冒瀆するものである。自然科学の發達を擁護して其の正當なる効果を發揮せしめることこそ、我々人類の生活をして一層有意義ならしむるものであることを知らねばならぬ。

三

自然科学を唯物主義の根據である如く見做しこれを精神的方面と分離して考へようとするのが

抑も誤謬の原因なのである。凡そ自然科学に限らず何れの學術研究も優秀なる精神と合致して始めて眞の効用を發揮するものである。言ひ換へれば、凡ての精神的活動はあらゆる學術の助けに依つて一層の光りを増すのである。即ち科學(廣義の)と精神とは常に結合して働くべきものであつて、決して分離せしむべきものでない。若し此の兩者を引離す人があるならばそれは未だ其の人の覺醒が足りないのであり、其の人の人格が低いのであると云ふことが出来る。日本刀の眞價は自然科学の粹たる鋼鐵の加工に武士の魂たる精神を打ち込んだ點にあるではないか。若しも日本刀から此の精神を抜けば兎刃となり、又自然科学を除けば鈍刀となるのである。今日に於て酒の害は何人も之れを知つてゐる。酒は錯覺を與へる變質藥であり例へば體量十六貫の人が僅に五勺の酒を飲めば約二晝夜に亘り免疫性を失ふことが明かとなつた。而して此等の事實を教ふるものは最近の科學的研究に外ならない。(別項「眞正の教育」参照)。然るに科學の進歩せざる往昔に於ては、孔子も亂に及ばざる程度の飲酒を認めた。釋迦の教を奉ずる弘法大師も醞酒一杯を許すと云つた。二千年前に水を變じて酒となした基督が今日に於て存在するならば恐らく世界の酒を變じて水となすであらう。斯く吾々は科學と精神との結合に依つて正しき生存の戒律を益々發見しゆくことが出来るのである。

四

人類發達の跡を顧みるに、學者の説によれば、數千萬年乃至數億年の太古より長期間かゝつて漸く無機物の中に有機物が生じ、之に生命が宿りて生物が出来、更に進化して類人的の動物が生れ、最初は無意識の群を成したものが次第に意識的となり精神的となり理性を有ち、遂に現代人にまで進化し人道的の國家社會を形作るに到つた。地球上に生物が出来て以來少くとも一千萬年以上を經過してゐるといふ。而して數十萬年前の原始人から現代人に進むまでの間には絶えず努力を積み困難と闘つて今日の文明を築き上げたものである。之を思へば人類の將來は益々進化向上の一路を辿つて、個人的には理想的最高人格の完成の爲に、社會的には理想的最高文明の完成の爲に、無限の努力奮闘を續けてゆくものであることが推知し得らるゝのである。而して斯くの如く究極の理想に憧れて之を追及することを私は宗教的と稱するのであつて、之に到達すべく不斷の修養を怠らない所に人生の意義が見出され宗教的の信念が確立されるのである。我々は此の理想の導くまゝに、この信念の命するまゝに、不合理から合理へ、惡から善へ、醜から美へ、あらゆる障害を乗り越えて勇敢に進んでゆかねばならぬ。こゝに道德が權威を持ち、藝術が光りを放ち、科學が其の眞價を發揮するのである。之に反し上述の信念なき者は兎角浮薄に流れ、不

眞面目に陥り、御都合主義に走り、熱誠の度少く、實行力活動力乏しく、勇氣足らず、意志薄弱に、思想動搖し、消極的生活に甘んじ、従つて到底偉大なる人格者、大事業家、大發明家、大藝術家たることは出来ないのである。

正しい理想を追及する確乎たる宗教的信念、それは總ての人間の活動の基本であり根柢であり原動力であらねばならぬ。この信念の確立と實踐とに依つて影の形に添ふ如く、求めずとも其の人は常に幸福であり益々偉大となり得るのである。

五

釋迦、孔子、基督の三聖は云ふまでもなく、凡て古來の偉大なる人格者は何れも崇高なる宗教的信念に生きてたるところを見出すのである。殊に吾等の感激を禁じ得ないのは、世界の發明王として自然科学の權化の如く仰がれてゐるエヂソン翁が、自分の背後に神を認め其の指命によつて一意人類の幸福の爲に盡すと云つてゐることである。實に翁の發明的天才が斯くの如き赫々たる光耀を發揮するのは、この宗教的信念を根柢とせる科學と精神との合致に在ると私は信じて疑はない。然るに貴き科學的所産を以つて常に自己の利慾の具に供せんことをのみ心掛くる人や、自然科学を物質的なりとして蔑視する人には、到底この偉大なる翁の心事は了解することが出来ま

い。けれども眞に心の眼を開いて、宗教的信念の下に自然科学の力を藉りて先人未到の發見、創始的發明を續くる所に人類文化の促進、人類共榮の實現があることを會得するならば、吾等は第一に科學的研究の眞義に徹して其の正しき進歩の爲に努力することが何より愉快な何より満足な何より感謝に堪へぬこととなるであらう。而も我國の現状を顧みれば、國民の之に關する思想は猶甚だ幼稚であつて、學生の志望を調べてみても政治、法律、經濟、商科等の方面に向ふ者のみ徒に多く、理、工、農等の研究に志す者は極めて少く、眞に科學と精神との融合せる堅き宗教的信念のもとに畢生的努力に出でようと企圖する青年の至つて乏しいのは、國家の爲め甚だ寒心に堪へない次第である。

六

今日我國は種々の點に於て行詰まつてゐる。それには色々複雑な原因もあらうが、私の見る所では、要するに人々の眞の自覺が足りないのだと思ふ。即ち眞に人生の意義を悟了して確乎たる宗教的信念と創造主義の努力のもとに特に自然科学方面の研究に向つて邁進する勇者が甚だ少いからだと思ふ。斯くいへば世の所謂實際家達は一片の理想論として嘲笑ふかも知れぬが、たゞ眼前の御都合主義に従つて利害の打算を行はんとする無信念の處生法こそ人生を毒する最大の危険

思想だと私は思ふ。

外國人の我國に對する批評を聴くに、遺憾乍ら、痛烈を極めてゐる。先年物故せる新聞王ノースクリフ卿の如き、「日本に將來無し、何となれば到る處模倣維れ事とするが故に」と云つた。又米國の某大學教授は「日本は三千年の歴史を誇つてゐるが是まで世界の文明に貢獻せる大發明に於て何物があるか」と嘲罵してゐる。此等の言を聞くと、眞に切齒發奮する人が我國に幾人あるであらうか。自然科学の不備は産業の不振を來し延いて國民生活の安定を脅かしてゐるにも拘らず依然として一時の好況時代の夢から醒めず、世界五大國の空名に眩惑したり、我勢力圏の些かの擴大に陶醉したり、世界列強の趨勢に反して政治、法律、經濟、商科等に走る學徒の多い間は遺憾ながら日本の前途は誠に暗澹たるものと覺悟せねばならぬ。政黨問題や、農村問題や、勞資問題や、人口問題や、其他あらゆる重要問題が解決されて、獨創的日本文明の光輝の認めらるゝのは、國民が眞に科學(特に自然科学)と精神との合致に徹底し宗教的信念を體得するもの多きに至つた曉でなければならぬ。教育は形式ではない、學校教育のみが教育ではない。不斷の修養と訓練とに依り、如上の宗教的信念を確立し、理想の達成に向つて努力邁進することは、實に吾人々類の永遠の使命である。

(終)

昭和九年一月十五日印刷
昭和九年一月二十日發行

納本

不許複製

宗教的信仰と教育

定價 金壹圓八拾錢

著作者 青柳榮司

京都市烏丸二條北入

印刷人 山本龜太郎

京都市河原町二條下ル

發行人 渡邊久吉

發行所

人文書院

京都市河原町二條下ル
電話・五壹八四八番・振替
東京八四九番
大阪八壹六番

高野山大學教授 博士 福來友吉先生著 四六版最新刊 定價貳圓五拾錢
 文庫學博士 福來友吉先生著 總クローズ・コットン紙 送料拾五錢

五版

精神統一の心理

「精神一到何事か成らざらむ」と云ふ。實に統一された精神の働き程驚異すべきはな
 い。けれども精神統一の意義、その心理を正しく把握してゐる人が幾人あらうか。
 これを學術的に、而して平易に講ぜられたのが本書である。即ちその統一方法、そ
 の偉力は幾多の實驗、實例の解説と共に本書を精くことに依つて容易に認識するこ
 とが出来る。

發 兌

京都市河原町二條下
 振替大阪八番貳百六十九番

院書文人

忽ち五版
 東京帝國大學 教授醫學博士 永井潜氏著 四六版四百五頁定價參圓五拾錢
 總クローズ・美本送料廿一錢

自然觀より人生觀へ
 サイニョリグレンニク

永井博士の近著「自然觀より人生觀へ」は上梓前すでに多數の注
 を受け知識階級の絶讃を博してゐるが左に掲げるは徳富蘇峰氏が
 五月十四日付の大阪毎日東京日々新聞に掲載されたものである
 醫學博士永井潜君の本著は、題目ばかりでは、如何なる内容あ
 るかを詳にせず。或は素人には六ヶ數科學的のものであらうと危
 みのつ、披讀したところ、餘りに面白く一氣に四百六十八頁を讀過
 した。×
 本書は科學を骨とし、文學を肉とし、暢達縱横、平明痛快の筆
 調にして、大は天下國家の筆、もて氣し且説き、説き且論じたるものにして、隔まで瘁きところ
 問題から小は日常生活の要件に至る迄、隅から隅まで瘁きところ
 に手が届きたるもの記者の不敏なる醫學博士の肩書に轢殺せられ
 長く開卷したがつたことを後悔した。×
 本書によりて察すれば、著者は其の専門ばかりでなく、専門以
 外にも博く通曉したる學者として受取らるゝ。而して其の尤も得
 意外に恐らくは文章ではあるまいかと思ふ。巻頭の小序の如きは、
 正にこれ一片の詩にして、我をして陣子昂の巖臺に登るの歌、
 前不見古人。後不見來者。念天地之悠悠。獨愴然涕下
 を聯想せしむるものがある。×
 然も亦卷末の詩餘閑語を讀んで、博士が蘇州竹原の産にして、
 顧山陽一家の發祥地と、其の郷里を同じくすることを詳にするを
 内得た。千史鑿の表に唐崎常陸介の影射したる文天祥の書「忠幸」の二
 大字を觀たるところを想起せざるを得なかつた。×
 尙又金時計の小品文中には、中々面白き文句がある。
 借問す、平等とは何ぞ。差別とは何ぞ。卿等は白なくして、果
 して黒を考へ得るか。生れ果して死ありと信ずるか。果
 差別なくして、平等が達せられようぞ。卿等が夢察にも過
 仰し、母はなほ止まない。差別なれば平等と云ふ意味から
 云ふれば、差別と平等とは、一身同體ちや、差別即平等、平等即
 差別であるのちや。×
 如何にも破的の言である。×
 本書中何れも有用の文であるが中にも巻頭の「爾自身を知れと
 一人問禮讚」とは、尤も示唆の體かなるを覺えた。×

院書文人

京都市河原町二條下
 振替大阪八番貳百六十九番

發 兌

高野山大學教授
文學博士
財團法人・大日本
本心靈研究所長

福來友吉先生著

總頁六百五十・本文五百七十頁・寫眞凸版百餘枚
菊豪華版・別染麻總クロース・背文字革・天黒
定價七圓・特價五圓八拾錢(送料三十三錢)

最新刊

心靈と神秘世界

福來博士が東京帝大の教授を擯廢の如く擲つて、一心専念、靈の研究に精進せらるゝこと爰に二十餘年。其の間、或は學者の攻撃に、或は暴漢の迫害に、凡ゆる辛苦を嘗めつゝ、孤身奮闘彼等を克服し、一路たゆむことなく目的地に向つて猛進されたのである。或る時は身を墨染の衣に包んで高野山上に如法の加行を修し、或る時は一笠一簑、金剛杖を力に四國の靈場を巡拜して神秘意識の開發にいそむの傍、財團法人大日本心靈研究所を設立して兀々研鑽を積み、終に一九二八年、ロンドンで開かれた萬國心靈大會に出席し、其の研究結果を発表して、泰西學者をして驚嘆せしめられたのである。爾來、博士の研究は愈摩訶不思議の奧堂に進入し、爰に其の業績は本書となりて世に現はれ科學萬能の迷夢を破りて神秘主義を樹立し、現代の思想界を風靡するマルキシズムの妖雲を拂つて、宗教の爲に萬代不易の基礎を築いたのである。二千五百年前の昔、大聖釋尊によりて涅槃寂淨の境地として獅子吼された神秘の世界は、本書によりて遺憾なく學的に證明された事實として吾人の面前に現はる。若し夫れ靈界の神扉を開いて自我の眞諦を披瀝し、物・心の根源を探りて生命の出處を窮盡するに至りては、理智主義の論理を超越して縱橫自在、讀者をして破膽張目の慨あらしめるであらう。蓋し古今獨歩の秘説、東西冠絶の密意を述べたるものとして、敢て本書を江湖に薦む。

醫學博士

石川光昭氏著

四六版・籍入瀧酒・美本
寫眞・圖版等五十餘

定價 貳拾五錢
送料 拾五錢

バクテリアと人生

世に細菌は功罪のあるものは他にない。その酵母菌、醱酵素などは前者に屬し後者としてはチブス、コレラ、肺病等々枚舉に遑がない。然も人生の最も強敵たる、實にそれらのバクテリアに依る病氣を思ふ時、われらはそれについての智識を常備してゐなければならぬことを痛感する。仍ち本書はそれらのバクテリアに對する凡ゆる智識と、その豫防方法を教へたもので殊に日本の如き傳染病の猖獗する國ではまことに恰好の座右書だ。

本邦における
傳染病の唯一の
参考書である

最新刊

健康呼吸哲學

(ヨギの強健法)

文學博士

福來友吉氏論攷・清水正光氏著

特價 壹圓貳拾錢
送料 拾五錢

凡ゆる健康術
強健法中の王
座として江湖
にすゝむ

世に健康を希はぬものがあらうか。如何に金殿玉樓中に住うとも、その身が不健康であらば決して幸福ではない。この意味に於て、健康は人間に大切なものがないであらう。これらを決して強健術。健康法等々の書が多数に上梓されるゆゑである。だが、それらを見ても、われは失望せざるを得ない。と、云ふのは、折角のそうした書物が、事實餘りにも役立たないからである。即ち、或はその方法が餘りにも難澁であつたり、繁瑣であつたり、或は生理的・衛生的にみて無價値であつたり等々で多かつたのである。だが、今やこの書はそれらの弊を一掃して、誰にでも容易に立つて呼吸哲學は蓋し凡ゆる強健法中の白眉であらう。

院書文人 發兌 京都河原町二條下ル 振替大坂八貳壹六番

院書文人 發兌 京都河原町二條下ル 振替大坂八貳壹六番

好評重版

醫學博士 小酒井不木氏序・野村瑞城氏著
療病 秘話 白隠と遠羅天釜

特價金壹圓五錢
送料拾五錢
『生』の生源を汲りしめる白隠大和尚の示説は茲に現代人の爲に復活した

著者によりてさきに公にされた「白隠と夜船閑話」の姉妹書。此遠羅天釜(おらてがま)には夜船閑話よりも一步進んだ白隠の體得底が現はれ健康及疾病療法といふ肉體の問題を其ま、靈性の問題に感應道交せしめ、生理的に迷悟の本體を明かにして、所謂「真箇長生久視の大神仙」たる所以の消息が示されてゐる。著者これを解するに親切、且つ禪學者の云ひ得ざる大膽なる解決を下し、内觀の妙境に參入し疾病を治する大道を指示した。

醫學博士 巴陵宣祐氏著 最新型

人類性生活史

定價壹圓八拾錢
送料拾五錢
類書多しと雖も、内容の豊富これに如くはなし

アダムとイヴの時代から、今日に臻るまで人類を一貫してゐるものは性慾の外ない。これを文化史的に興味を中心として叙述したものが本書である。或る意味に於て餘りにエキサイティングかも知れない。性生活を描みてこれ程擴範な、そして興味深いものはない。

最新刊

京都醫科大學 教授醫學博士 越智眞逸先生著

父母よ醒めよ

日本民族優化的の實行法

四六版 三百三十頁 最上製
特價壹圓貳拾錢
送料拾五錢

如何にすれば優良な子供が得らるゝか。然もその方法は極めて神秘的だ。著者はその専門から、多年の研究と蓄蓄を傾けてかくすれば必ず優良な子供を得ると云ふことを、極めて明快、平易に、そして具体的に説いてゐる。これは一面からみると、輓近八益しく稱へられてゐる性教育に對する、最高の指導書でもある。即ち父母はもつて我子にかゝる方法で性教育を授け若き夫婦はかくして優良な子供を得、未婚の男女はその教ふる處に従つて配偶を選ぶならば、日本は五十年を出でずして、世界に於ける最優良な民族とならう。これ洵に刻下の急務であらねばならぬ。

最新刊

發行所

京都市河原町二條下
振替(東京)八四四九番
(大阪)八貳壹六番

人文書院

發兌 京都市河原町二條下 振替(東京)八四四九番 (大阪)八貳壹六番 人文書院

目書版院書文人

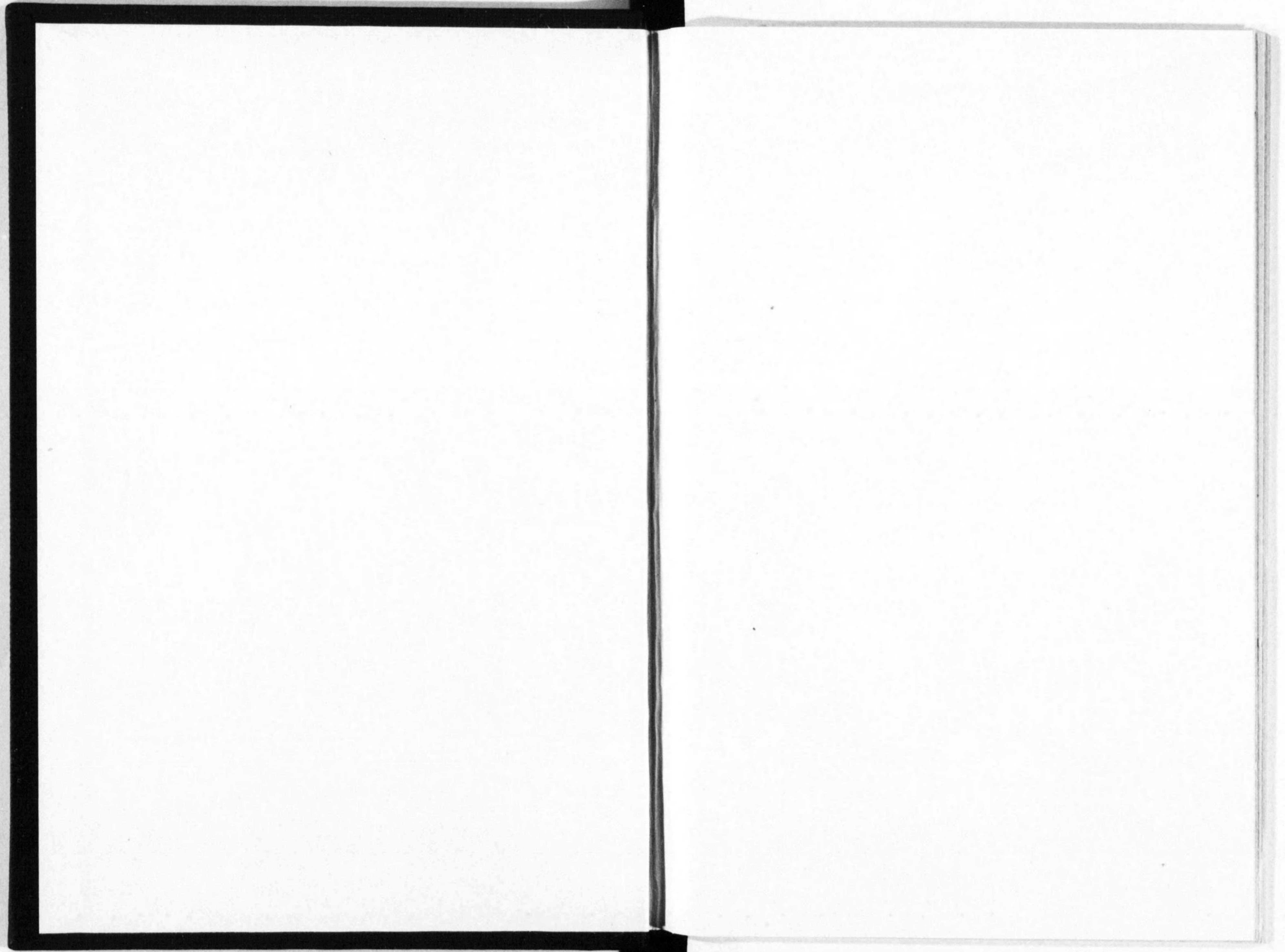
東京帝國大學 教授醫學博士	永井 潜氏著	人性論	廉價版 送料	一〇〇
東京帝國大學 教授醫學博士	永井 潜氏著	人及び人の力	廉價版 送料	一八〇
慶應大學教授 醫學博士	藤浪剛一氏著	東西沐浴史話	定料	四・五〇
京都帝國大學 教授醫學博士	今村新吉氏著	神經衰弱と ヒステリーの治療法	廉價版 送料	一〇〇
醫學博士	藤岡 巖氏著	近世生理學史論	廉價版 送料	一・二〇
理學博士	近重眞澄氏著	野 狐 禪	定料	一・八〇
京都醫大教授 醫學博士	越智眞逸氏著	心の衛生	普及版 送料	一・九〇
文學博士	福來友吉氏著	精神統一の心理	定料	二・五〇
文學博士	福來友吉氏著	觀念は生物なり	定料	二・八〇

目書版院書文人

京都帝國大學 教授醫學博士	小南又一郎氏著	實例法醫學と 犯罪捜査實話	定料	一・三〇
第三高等學校 教授文學士	平田元吉氏著	印度漫談	廉價版 送料	二・三〇
醫學博士 小酒井不木序	野村瑞城氏著	白隠と夜船閑話	定料	一・五〇
京都帝國大學 講師醫學士	速水寅一氏著	放火と犯罪の動機	定料	一・五〇
日本心靈學會 會長	渡邊藤交氏著	靈の神秘力と病氣	定料	一・五〇
醫學博士 小酒井不木氏著		慢性病治療術	普及版 送料	一〇〇
京大名譽教授 近重氏題辭	野村瑞城氏著	澤庵と不動の體現	定料	一・八〇
京大名譽教授 藤浪氏論考	野村瑞城氏著	療病と迷信	定料	一・五〇

目 書 版 院 書 文 人

京都帝國大學 教授醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士
今村新吉氏著	石川貞吉氏著	野村瑞城氏著	野村瑞城氏著	野村瑞城氏著	野村瑞城氏著	野村瑞城氏著	野村瑞城氏著
神經衰弱に就て	實用精神療法	民間療法と民間藥	白隱と遠羅天釜	益養生訓の現代性	原始人性と文化	靈の活用と治病	病は氣の新研究
送定料價	送普及料版	送普及料版	送廉價料版	送定料價	送定料價	送定料價	送普及料版
一六〇	一〇五	一〇五	一〇五	一九五	一〇五	一五〇	一八五



終